

久 留 米

高 専

60 年 誌

2 0 2 4

The 60 th Anniversary
National Institute of
Technology, Kurume
College

目 次

巻頭写真

発刊のご挨拶	久留米工業高等専門学校校長	松 村 晶
祝辞 久留米工業高等専門学校創立60周年に寄せて	独立行政法人国立高等専門学校機構理事長	谷 口 功
祝辞	久留米工業高等専門学校前校長	本 庄 春 雄
創基85周年・創立60周年を祝して	同窓会久留米工業会会長	伊 藤 絹 子
祝辞	令和6年後援会会長	田 中 秀 喜
久留米工業高等専門学校 創基85周年・創立60周年を祝して	テクノネット久留米会長	津 福 一 宏

第1章 学校のあゆみ	1
1.01 変遷	1
1.02 教育理念	6
1.02.1 教育理念の制定	6
1.02.2 教育理念の影響	6
1.02.2.1 教育目的および教育目標	6
1.02.2.2 三つの方針	6
1.02.2.3 国立高専教育国際標準 (KOSEN International Standard : KIS)	6
1.02.2.4 継続的なPDCAサイクルに向けた組織運営	6
1.02.3 専攻科の教育目的	7
1.02.3.1 専攻科の教育目標	7
図：教育理念の木	7
1.03 組織の改編	9
1.03.1 校内組織改革	10
1.03.2 教育研究支援室の名称変更	10
1.03.3 事務組織の見直し	10
1.03.4 材料工学科の名称変更	11
1.03.5 プロボストの設置と名称変更	11
1.03.6 国際化推進室の設置	11
1.04 久留米高専過去10年の施設整備について	13
1.04.01 平成22年度	13
1.04.01.1 ものづくり教育センター（旧機械工作工場）	13
1.04.01.2 武道場	13
1.04.02 平成23年度	13
1.04.02.1 筑水寮	13
1.04.02.2 つつじ寮	13
1.04.03 平成24年度	13
1.04.03.1 図書館	13
1.04.04 平成27年度	13
1.04.04.1 管理棟	13
1.04.05 平成28年度	13
1.04.05.1 筑水寮	13

1.04.05.2・制御情報工学科棟	13
1.04.06 平成29年度	13
1.04.06.1・校内	13
1.04.06.2・野球場	13
1.04.07 平成30年度	14
1.04.07.1・校内	14
1.04.08 平成31年度	14
1.04.08.1・第2体育館	14
1.04.09 令和2年度	14
1.04.09.1・文科・理科棟	14
1.04.09.2・専攻科棟	14
1.04.10 令和3年度	14
1.04.10.1・流体実験室	14
1.04.10.2・熱材力実験棟	15
1.04.10.3・材料システム研究・実習棟	15
1.04.10.4・産学民連携リサーチセンター	15
1.04.11 令和4年度	16
1.04.11.1・筑水寮（寄宿舍2号館）	16
1.04.12 令和5年度	16
1.04.12.1・管理棟	16
1.04.12.2・専門教室棟	16
1.05 教育課程の変遷	17
1.05.1 カリキュラム改正特別委員会の設置	17
1.05.2 最終答申	17
1.05.3 平成31年度以降の改正	18
1.05.4 今後の改正に向けて	18
1.06 入学選抜方法の推移	19
1.06.1 本科	19
1.06.2 専攻科	19
1.07 学生への支援	20
1.07.1 授業料免除・奨学金制度	20
1.07.2 TOEIC試験の実施	20
1.07.3 学生の留学	20
1.08 国際交流	21
1.08.1 学生の派遣	21
1.08.2 学生の受入	21
1.08.3 教員の交流	22
1.08.4 その他の国際交流事業	22
1.09 就職関係	23
1.10 卒業生の進路	24
1.10.1 就職	24
1.10.2 進学	24
1.11 学生寮	26
1.11.1 学生寮の変遷	26

1. 11. 2	入寮者数の変遷	27
1. 12	総合情報センター	28
1. 13	産学民連携テクノセンター	29
1. 13. 1	経緯と活動内容	29
1. 13. 2	近年の活動成果	29
1. 13. 3	高専ハカセ塾	29
1. 14	図書館	30
1. 15	学生相談室	31
1. 16	事務部	32
1. 17	教育研究支援センター	34
1. 17. 1	概略	34
1. 17. 2	グループ構成	34
1. 17. 3	業務内容	34
1. 17. 4	人事の推移	34
1. 17. 5	最近10年間おける活動	34
1. 18	公開講座	38
1. 19	テクノネット久留米	42
1. 19. 1	主な事業内容	43
1. 19. 2	10年間（平成26年度～令和5年度）における新規事業・変更内容	43
1. 20	地域の教育機関との連携	43
1. 20. 1	高等教育コンソーシアム久留米	44
1. 20. 2	市民公開講座	43
1. 20. 3	講習会・セミナー	43
1. 20. 4	本校独自の教育連携	43
1. 21. 01	高専フォーラム	44
1. 21. 02	高専シンポジウム	45
1. 22	同窓会久留米工業会（小森野会）	47
1. 22. 1	同窓会の概要	47
1. 22. 2	同窓会の活動状況	47
第2章	各学科、専攻科のあゆみ（最近の10年）	48
2. 1	機械工学科	48
2. 1. 1	機械工学科の施設・設備	48
2. 1. 2	最近10年の人事	48
2. 1. 3	卒業生・修了生の進路	49
2. 1. 4	教育研究の取組・成果の概要	49
2. 2	電気電子工学科	51
2. 2. 1	教員	52
2. 2. 2	設備	52
2. 2. 3	教育研究の取組・成果	53
2. 2. 4	卒業生・修了生の進路	55
2. 3	制御情報工学科	55
2. 3. 1	学科の施設・整備	55
2. 3. 2	学科の教員 - 人事の推移 -	55
2. 3. 3	卒業生の進路	56

2.3.4	教育研究の取組・成果	56
2.4	生物応用化学科	58
2.4.1	概要	58
2.4.2	教育研究陣容—人事の推移—	58
2.4.3	実践的カリキュラム	58
2.4.4	卒業生の進路	58
2.4.5	学科の施設・設備	59
2.4.6	学科の施設研究活動	62
2.5	材料システム工学科	62
2.5.1	材料システム工学科施設・設備改修	62
2.5.2	教育研究陣容—人事の推移—	63
2.5.3	卒業生の進路	63
2.5.4	教育研究の取組・成果	64
2.6	一般文科	65
2.6.1	教育・研究陣容—人事の推移—	65
2.6.2	教育研究設備	65
2.6.3	教育研究活動—現状と成果—	66
2.7	一般理科	68
2.7.1	教育研究陣容—人事の推移—	68
2.7.2	教育研究設備—特色と活用—	68
2.7.3	教育研究活動—現状と成果—	69
2.8	専攻科	71
2.8.1	専攻科の概略と歴史	71
2.8.2	最近10年における変遷・出来事	71
2.8.2.1	JABEEの廃止	71
2.8.2.2	認定専攻科（特例適用専攻科）	71
2.8.2.3	専攻科30周年記念講演会	72
2.8.2.4	専攻科生による研究発表	73
2.8.3	教育課程	73
2.8.3.1	九大連携教育プログラム	73
2.8.4	入学者状況	74
2.8.5	進路状況	74
第3章	学生の活動（最近の10年）	75
3.1	学生会	75
3.2	文化局	77
3.2.01	英会話部	77
3.2.02	吹奏楽部	77
3.2.03	軽音楽部	78
3.2.04	囲碁将棋部	79
3.2.05	茶道部	79
3.2.06	新聞文芸部	80
3.2.07	自動車部	81
3.2.08	ロボットコンテスト部	81
	美術部	82

3.2.10	華道部	82
3.2.11	プログラミングラボ部	83
3.2.12	鳥部	84
3.2.13	写真部	84
3.2.14	ピアノ同好会	85
3.2.15	ダンス同好会	85
3.3	体育局	86
3.3.01	陸上競技部	86
3.3.02	柔道部	86
3.3.03	弓道部	87
3.3.04	剣道部	88
3.3.05	硬式野球部	88
3.3.06	バスケットボール部	89
3.3.07	バレーボール部	90
3.3.08	テニス部	90
3.3.09	卓球部	91
3.3.10	バトミントン部	91
3.3.11	ラグビー部	92
3.3.12	サッカー部	93
3.3.13	合気道部	93
3.3.14	水泳部	94
3.3.15	ハンドボール部	95
3.3.16	ソフトテニス部	95
3.3.17	サイクリング同好会	96
第4章	資料	97
4.1	専攻科関係	97
4.1.1	専攻科の修了者数と学位取得者数	97
4.1.2	専攻科の修了者の進路状況	97
4.2	学生関係	97
4.2.1	卒業生の就職・進路状況	97
4.2.2	地区別就職状況	99
4.2.3	業種及び産業別就職状況	100
4.3	教職員関係	102
4.3.1	科研費受給状況	102
4.3.2	共同研究受入状況	107
4.3.3	受託研究受入状況	108
4.3.4	寄附金の受入状況	109
4.4	図書館関係	110
4.4.1	冊数、図書購入費（学生閲覧用）	110
4.4.2	蔵書数	110
4.4.3	開架図書数	110
第5章	創基85周年・高専創立60周年記念事業	111
5.1	記念事業（講演会）	112
編集後記		



久留米工業高等専門学校 全景

正 門



管理棟・一般教室棟



メインストリート





一般文科・理科棟



機械・材料システム工学科棟



電気電子・制御情報工学科棟



制御情報工学科棟



生物応用化学科棟



専攻科棟



産学民連携テクノセンター棟



産学民連携リサーチセンター



ものづくり教育センター



図書館



ウェーブホール



記念館



第一体育館



第二体育館



グラウンド



筑水寮



つつじ寮



練心館

歴代校長・学長



久留米高等工業学校
初代校長 小林俊次郎
(昭和14年～20年)



久留米工業専門学校
二代校長 大脇 策市
(昭和20年～26年)



久留米工業短期大学
初代学長 山田 穰
(昭和33年)



久留米工業短期大学
二代学長 葛西泰二郎
(昭和33年～36年)



久留米工業短期大学
三代学長 和栗 明
(昭和36年～41年)

歴代校長



久留米工業高等専門学校
初代校長 和栗 明
(昭和39年～51年)



久留米工業高等専門学校
二代校長 園田 正明
(昭和51年～59年)



久留米工業高等専門学校
三代校長 西川 兼康
(昭和59年～平成元年)



久留米工業高等専門学校
四代校長 長谷川 修
(平成元年～6年)

歴代校長



久留米工業高等専門学校
五代校長 谷口 宏
(平成6年～11年)



久留米工業高等専門学校
六代校長 柳 謙一
(平成11年～17年)



久留米工業高等専門学校
七代校長 前田 三男
(平成17年～22年)



久留米工業高等専門学校
八代校長 上田 孝
(平成22年～27年)

歴代校長



久留米工業高等専門学校
九代校長 三川 譲二
(平成27年～令和2年)



久留米工業高等専門学校
十代校長 本庄 春雄
(令和2年～4年)



久留米工業高等専門学校
十一代校長 松村 晶
(令和4年～)



教員集合写真



職員集合写真

校章の由来



久留米市は、つつじの名所として広く知られており、本校は、春ともなれば色彩豊かに校庭いっぱいに咲き競い、咲き乱れるつつじの花がとても奇麗である。

校章はそのつつじの葉を形どったものであり、又葉脈は、学校のすぐ横を流れる九州一の大河である筑後川の流れを表象したものである。たゆまなく流れる川の流れは、たゆまなく学びの道に進みゆく姿を表したものである。

久留米工業高等専門学校 校歌

一． 筑紫なる 清き山水

あつめきて 流れ流るる 筑後川
ひる夜となく 流れ流るる
我らも進まん学びの道を
学びの道を!!

二． 春くれば つつじの花は

日に映えて 我が校庭に 咲き競う
いのちの限り 咲き競う
我らも咲かさん技術の花を
技術の花を!!

三． 紺碧の 空に聳ゆる

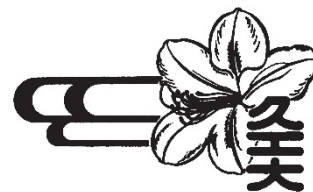
耳納山 永遠にゆるがで 世を護る
雨降る日にも 嵐の夜も
我らも築かんゆるがぬものを
ゆるがぬものを!!

(旧制) 久留米高等工業学校
(旧制) 久留米工業専門学校



高等工業学校を表す「高工」の文字を囲む内側の環は、久留米の「ル」を9（久）個並べたものであり、その外側の8個の剣先は、久留米の「米」の字と共に、当時唱えられていた八紘一字の鉾先を表徴したものといわれている。

久留米工業短期大学



これは、久留米工業短期大学時代の襟章である。つつじの花の左側は筑後川の悠久の流れを表したもの。

当時の校章は、国立大学共通の「大學」を使っていた。

旧制久留米高等工業学校 逍遙歌

- 一、
春筑紫路を訪れて
桜に薫る千歳川
幾代変わらぬ此の流れ
あゝ若人の夢を秘む
- 二、
不知火燃ゆる有明の
海にたわむれ白雲の
なびく脊振の峻峰に
希望をこめて登ならん
- 三、
秋凋落の日は淋し
高良の山の紅葉は
遠く故郷を来し人の
あゝ感傷をそゝるらむ
- 四、
厳しき冬の小森野に
可憐な花を咲き出す
雪割草の在るものを
なか我等は忘れなん
- 五、
三年の春を小森野に
理想を高くすごさなむ
眉秀でたる我が友よ
撞け覚醒の鐘の符を！！
- 六、
篠山城にこだまする
我等が雄叫び君よきけ
時代の思潮荒れくるう
世に黎明の鐘はなる！！

発刊のご挨拶



校長 松村 晶

高等専門学校(高専)は、実践的・創造的技術者を養成する新たな高等教育機関として、昭和36(1961)年に学校教育法に制定されて、翌年の昭和37(1962)年に第1期となる12校が開校しました。続く昭和40(1965)年までの4年間にわたって全国各地に43校の国立高専が設置されましたが、久留米高専はその第3期となる昭和39(1964)年4月に設置されて、令和6(2024)年に60周年を迎えました。人生でいえば還暦にあたります。

しかしながら、本校の歴史はそれより4半世紀前の昭和14(1939)年の久留米高等工業学校の開校まで遡ることができます。今から85年前です。戦後の学制改革などによる変遷を辿って、創基後約20年が経った昭和33(1958)年に日本で最初の全日制工業短期大学として久留米工業短期大学となり、さらにその3年後の昭和36(1961)年には高専のテストスクールとなった附属工業高校が設置されました。第1期高専の開校1年前です。久留米高専の設立直後に附属工業高校の卒業生と在校生が新しい高専に編入したために、高専設立は第3期でしたが、本校は全国の高専に先駆けて、昭和41(1966)年3月に高専卒業生を送り出しました。今では全国に国公私立の高専が58校、さらにタイやモンゴルなどでも高専が開設されて海外にも広がりがつつあります。本校は高専制度の先駆けを担ったと言っても過言ではありません。

久留米高専の設立当初は、機械工学科(2学級)、電気工学科、工業化学科、金属工学科の4学科5学級で5年一貫の本科教育を行っていましたが、時代と共に変遷を辿り、本科卒業後にさらに2年間の専門教育を行う専攻科が平成5(1993)年に設置され、現在では機

械工学科、電気電子工学科、制御情報工学科、生物応用化学科、材料システム工学科の5学科と、機械電気システム工学専攻と物質工学専攻の2専攻の専攻科を擁しています。この間、中学校卒業後の若い学生諸君に対して、豊かさに人間性を育み、時代に即した高度な専門性を身につけた実践的で創造性豊かな技術者を育てる教育に徹し、これまでに本科から10,824名の卒業生を、専攻科からは938名の修了生を輩出しました。卒業生、修了生ともに約半数が就職して、残りにはさらに上位の教育機関に進学しています。幸いにして本校の卒・修了予定者には様々な企業から求人をいただいております、その数は就職希望者の本科で3~40倍に、専攻科では7~80倍に達して、希望者のほぼ全員がそれぞれの志望に沿った進路につくことができます。本校の高専教育と卒・修了生が実社会から高い評価と期待をいただいている証と言えましょう。

本校が高専として歩んできた道のりは、これまで「二十年誌」「三十年誌」「四十年誌」さらには10年前に発刊された「五十年誌」と10年毎に記されてきました。本誌はそれらを補遺する形で最近の10年間の本校の歩みを記すことになります。

この10年間を顧みると、大きな出来事としては何はさておき、令和元(2019)年末に中国・武漢で発生した新型コロナウイルス感染症が瞬間に世界に広がり、我が国では翌年2月頃から令和5(2023)年5月の3年以上にわたって市民生活に様々な行動制限が強いられましたことでしょうか。本誌の中でその間での感染防止対策等については記されるでしょうが、本校でも令和2年度の授業開始が大幅に遅れるとともに、しばらく教室での対面授業ができずにほとんどをオンライン

で授業を進めるしかありませんでした。その後も感染の盛衰によって授業形態を頻繁に変更する落ち着いた日々が長く続きました。様々な学校行事や企業見学、インターンシップ、国際交流なども長く中止を余儀なくされ、クラブ活動などの課外活動にも様々な制限がなされて、在校生諸君は3年以上にわたって学生生活を満喫できませんでした。青春を謳歌すべき若い学生にとっては決して短くありません。極めて残念な事態でした。

加えて、新型コロナ禍で中止を余儀なくされていた伝統ある筑後川花火大会が、令和4(2022)年8月5日に3年ぶりに開催されましたが、そのフィナーレで最大級の不発弾が本校の弓道場に落下爆発して弓道場がほぼ全壊するという事故が起きました。幸いに周囲への延焼や人災に至りませんでしたが、様々な事情により弓道場の再建に丸2年もの歳月を要してしまい、その間は弓道部に不自由な活動を強いることになったのは心苦しい記憶です。しかし、窮状の弓道部に本校の卒業生や様々な方々から多くの温かいご支援やご声援を頂きました。本当に有り難く、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

新型コロナ禍で社会情勢や私どもの日常が大きく変化しました。インターネットを介したオンラインでのミーティングや情報発信が急速に普及して、日常的な手段として広く定着しました。それによって普段の授業の方法も多様化が進み、教室での対面授業の位置付けや内容も大きく変化しつつあります。一方、現代の科学技術に不可欠な半導体デバイスの供給に大きな支障が生じ、かつては世界を席巻していた我が国の半導体産業の著しい衰退が浮き彫りになり、今では半導体産業の再興が九州を拠点として全国的に力強く進められています。高専には当然のことながら半導体分野で活躍する実践的人材の育成が強く期待されており、本校も含めた九州・沖縄地区の高専は連携しながら半導体工学教育の充実と展開を先駆けて進めています。

さらに、機械学習などのデータ科学の急速な発展に伴って人工頭脳(AI)に代表される情報科学技術が急速に発達しており、科学技術だけでなく私どもの日常

の生活もデジタルトランスフォーメーション(DX)として大きく変わろうとしています。単に情報科学・情報工学の分野の発展だけでなく科学工学全般にわたっても様々な局面でのDXが進められて発達してきており、本校でも全学科で工学教育の内容の検討と時代に即した刷新を進めていく必要があります。高度な情報化社会で活躍できる人材の育成のために、近く本校では教育体制と教育内容の改善に着手します。これからの情報化社会では、その特質を活かした新たなビジネスや産業の育成も求められています。また、経済圏がボーダーレスとなってグローバル化が急速に進んでおり、地域産業であっても世界を跨いだ市場での活動や展開が一般的になってきています。これからの将来を担う実践的な技術者には、科学技術に関する能力だけでなく、新たな価値を創造するマインドや国際的センスが益々求められてきており、それらの醸成のためのアントレプレナーシップ教育や国際化教育も充実させていかねばなりません。今、世界は待ったなしにダイナミックに変容していつています。本校も60周年を迎えて過去を総括しつつ、今後の発展に目を向けて前進していく所存です。本誌はその礎になるものと期待いたします。

最後になりましたが、本校のこれまでの発展にご尽力を賜りました、文部科学省、(独)国立高等専門学校機構をはじめ地元・企業の関係各位、本校教職員、後援会、同窓会久留米工業会各位に対して心から御礼を申し上げますとともに、今後一層のご理解とご支援をいただきたくお願い申し上げます。

祝 辞

久留米工業高等専門学校創立60周年に寄せて



(独) 国立高等専門学校機構
理事長 谷口 功

世界に類のないユニークな高等教育機関としての高等専門学校の制度が我が国に創設（1962年）されてから、一昨年、60周年となりました。その2年後の1964年、第3期校として設立された久留米工業高等専門学校（久留米高専）が、今年、創立60周年を迎えられました。心よりお祝い申し上げます。

久留米高専は、この間、高等教育機関としての高専として高度な理念と責任を持って運営され、幾多の素晴らしい卒業生・修了生を輩出されています。

久留米高専は、1964年、機械工学科（2学級）、電気工学科、工業化学科、金属工学科（各1学級）の4学科・5学級で設立されましたが、その後、本科は、機械工学科の1学級を制御情報工学科に、電気工学科は電気電子工学科に、工業化学科は生物応用化学科に、金属工学科は材料工学科を経て材料システム工学科と変遷しながら、「機械・電気システム工学専攻」及び「物質工学専攻」の2つの専攻科を有する九州地域の中核的な高専として発展され、創立60周年の今日に至っています。

一方、近年、社会や産業構造の変化に伴い求められる人材像も高度化しています。久留米高専では、変貌する社会の将来を見据えて、1998年に「自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成」を教育理念として掲げられ、以来、行動を通して人間性・社会性・国際性を養い、工学の基礎力と創造性を身につける教育を進めることで、社会の要請に応え、新しい時代を切り拓く実践力と創造性豊かな人財（人材は社会の宝、財産であるので「人財」と

記載します）の育成を全国の高専の先頭に立って進めてこられました。最近では、「高専マテリアルコンテスト」を開催されるなど、材料作りのおもしろさ不思議さを体験する活動も活発に進められています。創立60周年にあたり、これまでの様々な取り組みに心より敬意を表します。

高専は、開設・開校以来、時代の要請に応える現場力のある実践的で、かつ新しい時代を創り出す創造性を兼ね備えた人財の育成機関として発展してきました。今日、特に九州地域では、近年の社会動向に呼応した半導体産業関連の基盤強化に向けて、また、地域の農業・水産業などの高度化を含めて、産業の基盤的な技術の継続・発展に向けた取り組みなども活発に行われています。久留米高専を含めて九州地域の高専が互いに連携して、ものづくりを基本とし、新しい技術や考え方・価値（DX、GX、半導体など）を組み合わせることで、未来社会の構築に貢献できる人財の育成の取り組みも盛んです。

高専の卒業生の専門性と高い実務遂行能力は、国際的にも高く評価され、「KOSEN」は我が国のユニークで成功した教育システムとして注目されています。これまで、アジアではモンゴル、ベトナム、タイなどで高専型教育の「移植」支援を行ってまいりました。近年、世界各国で「KOSEN」設立要請が広がりを見せ、日本型高専教育の真髄を海外の国々に定着させ、海外の国々の発展に資する国際貢献も重要な使命となっています。

高専は、新時代に飛躍する高専として、日本発の世界のKOSENへと大きく変貌する道を歩みつつあります。高専は、今日では、国際的にも、高専

教育＝「社会のお医者さん：Social Doctor」や新しい技術や方法、新しい価値を創り出す社会の「イノベーター」を育てる高等教育であり、さらに、起業家（アントレプレナー）の育成機関であるとも理解いただいています。

久留米高専は、これからも、社会の将来を見据えて、新しい時代の様々な課題に果敢に挑戦し、輝き、互いに切磋琢磨する学びの場であり続けていただくことをお願い申し上げます。また、久留米高専関係者をはじめ広く社会の皆様方には、引き続いて、久留米高専への多面的なご支援をお願い申し上げ、創立60周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

令和 6年 11月 吉日

祝辞



前校長 本庄 春雄

創立 60 周年記念、誠におめでとうございます。1964 年の久留米高等専門学校創設から 60 年、1939 年の旧制久留米高等工業学校創設からは 85 年の歴史を有し、高等教育機関の 1 つとして国内外・地域の科学技術に貢献しているその実績に心から敬意を表します。現在、そしてこれまでにご尽力いただいた教員、技術職員、職員、同窓会、卒業生など、関係各位に感謝申し上げます。

久留米高専創設の 1964 年はアジアで初めてのオリンピックが東京で開催された年で、近所の家の白黒テレビでその熱戦を応援した記憶が今でも鮮明に蘇ります。その後、ブラウン管のテレビはカラー化され、ディスプレイは液晶、有機 EL と変遷し、スマホでドジャースの大谷選手の活躍をリアルタイムで観戦できるようになりました。科学技術の進展には驚かされますが、今世紀に入ってから指数関数的なその成長は我が国を含む各国の産業構造さえも根底から変えていきます。最近話題の AI は工学、医療、経済、政治などのあらゆる分野で活用されていますが、学習能力から推論能力へさらなる発展を遂げつつある ChatGPT は大学院博士課程学生の能力を持つまでになってきております。今後、その能力はさらに向上して我々の社会を豊かにします。一方で、AGI（汎用型人工知能）の登場が話題になるように、AI 利用の倫理性、AGI が主体的に我々の社会を動かすことへの警鐘、これらの成果を一部の人間、組織、国家が独占することへの警鐘などにも留意する必要があります。

注目すべきは科学技術の脅威的な進展スピードです。ロボットや AI の将来予測はすでに 1940 年

代、1950 年代にアシモフ、チューリング、ウィーナーなどによってなされていましたが、エヌビディアの GPU、ChatGPT、AI がニュース等で現実的に社会的に共有されたのはほんの 2 年ぐらい前からです。今では爆発的な勢いで進展しています。2000 年代にカーツヴァイルは AGI の登場（シンギュラリティ）を 2045 年頃と予測しましたが、最近の議論では 2028 年頃とも言われる場合があります。

このように、科学技術が急速に進展する時代においては、早期から 5 年一貫教育で養成する高専は社会的・時代的要請に合致した高等教育機関です。もちろん、高校、大学、大学院という従来型教育は必要ですが、高校に入学して大学、大学院を修了した頃には社会はすでに激変していることでしょう。久留米高専に入学してくる学生は、生まれた時からスマホ、AI に囲まれて育ったデジタルネイティブの α 世代と言われ、タイムパフォーマンスを重要視するそうです。投入・活用した時間に見合った成果を要求する α 世代は日進月歩する科学技術の申し子のような気がします。すでに、1960 年代に全国に設立された各高専の設立目的は質的に変化していると思われます。

さて、高専は大学と同じく高等教育機関であり、その使命・目的は 1998 年のユネスコの高等教育世界宣言に詳述されています。一部を抜粋すると、「・・・平和、正義、自由、平等および連帯を含む普遍的に受け入れられている価値を擁護し、・・・、学問の自由および自律性を十分に享受し、・・・、地域社会、国および世界の秩序に影響する問題の特定と解決において、支援的役割を果たさなければ

ばならない」となっており、久留米高専の教育理念も同様の趣旨と読めます。このように、高専は大学とこれらの使命・目的を共有しますが、教育・研究環境が大学と異なる高専は、それらの実践において独自の文化があるのは当然です。高専フォーラムや高専シンポジウム、ロボコン、体育大会のような活動はもっと自負していいだろうし、科研費などの研究資金は大学とは異なる獲得方法があるべきとも考えます。

九州・沖縄地区の高専はまとまりがいいとよく耳にしますが、歴史的にもその中心的役割を久留米高専は背負っています。久留米高専が科学技術のプラスの面だけではなく様々な社会的警鐘にも熟考する科学技術者を養成する高等教育機関であって欲しいと願いつつ、今後のさらなる活躍に期待しております。

創基 85 周年・創立 60 周年を祝して



同窓会久留米工業会会長
伊藤 絹子

母校、久留米工業高等専門学校が創基 85 周年・創立 60 周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

1939（昭和 14）年に久留米高等工業学校が小森野に設立されて以来、その後時代とともに変遷し、校名が久留米工業専門学校、久留米工業短期大学へと改称され、現在の久留米工業高等専門学校になりました。

久留米高専は高専第 1 期校より 2 年遅れて、1964（昭和 39）年に第 3 期校として設立されました。そして、1966（昭和 41）年 3 月に第 1 回卒業式が行われました。この時の卒業生が全国の高専で最初の卒業生となりました。

久留米高専設立時は、機械工学科（2 クラス）、電気工学科、工業化学科、金属工学科の 4 学科 5 クラスでしたが、現在は機械工学科、電気電子工学科、制御情報工学科、生物応用化学科、材料工学科の 5 学科 5 クラスとなっています。1993（平成 5）年には専攻科（機械・電気システム工学、物質工学）が開設され、32 年目になります。

久留米高等工業学校（旧工専）1 期以来、卒業生は 14,000 余名となり、国内外のさまざまな分野で活躍されています。

久留米高等工業学校（旧工専）設立から久留米高専設立までの 25 年間、久留米高専設立からこれまでの 60 年の間に多くの変革を遂げ、研究・施設や設備も大きく変わっています。素晴らしい環境の下で、

優秀な研究・教育者である先生方よりご指導を受けた学生は、社会に出て大いに実力を発揮し高い評価をいただいています。卒業生の活躍ぶりを目や耳にすると、とても嬉しく思います。

同窓会久留米工業会についてですが、旧工専同窓会を発展的に解消して、旧工専・短大および現在の高専を統合した新しい同窓会久留米工業会（小森野会）が 1974（昭和 49）年 11 月 3 日に結成されました。今年で 50 年になります。

現在の同窓会状況ですが、同総会久留米工業会には関東・東海・関西・北九州・福岡・筑後・佐賀の 7 支部があり、それぞれに特色のある活動をしています。各支部において年に 1 回支部総会と懇親会が行われます。その他にも、花見やゴルフをして親睦を図っている支部もあります。

同総会には経験豊富な先輩や発想豊かな後輩等いろんな同窓生がいます。皆さん、どうぞ気軽に積極的に参加して下さい。

母校、久留米高専を卒業・修了された皆様、これから卒業・修了される皆さん、「自分らしく」ご活躍されますことを望みます。

本同窓会は、今後も学校・学生・保護者・地域それに同窓生と連携を図り、母校の発展に協力して参ります。

母校、久留米高専のますますのご発展を祈念いたします。

祝 辞



令和 6 年度後援会会長 田中秀喜

久留米高専創基 85 周年、高専設立 60 周年
おめでとうございます。

私が高校生だった 30 年前と現在では、日本を取り巻く環境は目まぐるしく変わりました。その頃の日本は世界の工場でした。しかし、中国の製造業勃興により、ものづくりの拠点が移動し、日本の技術者にとっては厳しい時代が続きました。

30 年間続いたデフレと円高の時代がようやく終わり、これからはインフレと円安の時代が続くのではないかと予想されます。そのような流れの中で、再び製造業の拠点が日本に戻りつつあり、久留米高専の卒業生は日本のソフト、ハード技術両面の中心的な役割を担うことになるでしょう。

これから社会に出ていく学生たちが置かれた環境は、高度経済成長時代の右肩上がりだった頃を知る先輩方が社内にはばからないという状況にあります。さらにこれからの日本の置かれた環境は戦後世界の枠組みの中で、米ソ冷戦下ともソ連崩壊後のポスト冷戦後とも違ってきています。中国は経済的成熟により低成長時代に突入。ロシアによるウクライナ侵攻は今後の世界に大きな負のインパクトを与えることが決定的です。さらにはアフリカを除くほぼすべての国の合計特殊出生率が人口維持に必要な 2.0 を切るという世界的な人口減少時代に突入するでしょう。気候変動と世界的な災害の多発もこれからの人類にとって全く未知の状況です。これからの社会人生活はかつての成功体験にとらわれることなく事業の正しいあり方を模索する時代になるのではないのでしょうか。

もう一点の鍵はアントレプレナーであろうと思います。

経済の健全な発展には新興企業の勃興による新陳代謝が望ましいとされます。また近年、地方の衰退が叫ばれる中で、地方における新規事業起業家が待望されます。

アダム・スミスは国富論の中で、ある地域の資本が生み出した富が、その地域に再投資される環境であれば、その地域は豊かになりうる。一方でその富が別の地域に移動して消費される状態であればその地域はいずれ衰退すると説いています。

今まさに大規模事業者の都市部への一極集中が地方の衰退を招いている時代にあります。都心に拠点を構える事業者が地方に展開し地域の経済循環を吸い取っています。ここ久留米においてもそれは例外ではありません。

前述したように、これからの世界は変化の激しい時代です。既存の経済システムでは埋められない小さな需要、ニッチが生まれやすいとも言えます。そこにアントレプレナーの商機が生じます。アメリカ、シリコンバレーにおいては優秀な学生こそ、野心を持ち、アントレプレナーとして成功を模索すべきだという文化があるようです。久留米発の、高専発の新しい産業を生み出せる人材も出てくることを期待しています。

一方で、人間の作り出すあらゆる技術にはその背景となる根幹的思想（バックボーン）が存在します。そのバックボーンとなる哲学を涵養するのは多感な 10 代の頃です。私自身も学生時代に陽明学や論語など読みふけたものですが結局一番大きな影響を受けたのはファミコ

ンのゲームや少年ジャンプのドラゴンボールやキン肉マン、ジョジョなどでした。私の場合、精神的根幹を煎じ詰めれば、ドラゴンボールの孫悟空の”世の中すげえやついっぱいいるな、オラもっともっと修行すっぞ”となってしまうます。

高専で過ごす15歳から20歳の間、なにに触れ、どう感じたかはその後の一生にとっても大きな影響があります。哲学書のみならず、漫画やアニメ、ゲームでも人生を考えさせられる優れた作品は数多くあります。映画や舞台、音楽もそうでしょう。学校が供給する工業系の技術習得カリキュラムを習得しつつ、私生活においても様々な文化資産を摂取し、学友と語らい、体験をしていきながら、これからの人類の一員として、なにを、どうやって未来を切り開いていくのか自分自身の行動指針を育んでいってほしいものです。

久留米高専の学び舎にある学生たちの未来を祝福しつつ。

久留米工業高等専門学校

創基 85 周年・創立 60 周年を祝して



テクノネット久留米 会長 津福一宏

久留米工業高等専門学校創基 85 周年・創立 60 周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

この長きに渡り、久留米高専からはさまざまな方面の企業に数多くの優れた実践的技術者を輩出されてきました。その間の、歴代の校長先生をはじめとした教職員の皆さま方ならびにすべての関係者の皆さまのご努力に対しまして深く敬意を表するものであります。

久留米高専との産学連携組織として発足したテクノネット久留米は、平成 24 年に設立され、これまで、技術セミナーやラボツアーの開催、テクノネット久留米文庫の寄贈、共同研究への支援、インターンシップの受け入れ、合同会社説明会など、さまざまな事業を行ってまいりました。

今後も、久留米高専と地域産業界との連携・交流の場として、より一層繋がりを深め、久留米高専の教育・研究成果の発信・利活用と、地域産業の技術向上の一助となるよう活動してまいります。テクノネット久留米をきっかけとして、これまで以上に共同研究が活発化し、その中から世の中の仕組みを変えるような技術・製品・サービスが、生み出されることを期待しています。

さて、九州管内においては、2020 年代にはいり、大規模投資により大きな変動が起こりつつあります。不動産・建設投資から、サプライヤー・物流の整備へとフェーズがかわり、さらに生産が軌道にのり、またもう一段上の先端技術に進めば、そこに供給する人材の育成が求められています。

材料、加工、機械装置・制御、電気制御、情報処理など各方面の実践的専門知識をもった先生方に指導された学生たちは、上流から下流まで、どの分野においても活躍してくれるものと思われまふ。官民一体となって投資が行われる中、技術立国として再興できるか、これまで以上に久留米高専の存在がますますクローズアップされることになりそうです。

久留米工業高等専門学校の今後ますますのご発展と教職員・学生・卒業生のみなさまのますますのご活躍を祈念申し上げまして創基 85 周年・創立 60 周年のお祝いのご挨拶とさせていただきます。

第1章 学校のあゆみ

1.01 変遷

昭和32年に設置・開校された高等専門学校（高専）は、平成16年に全国の55国立高専が一つの独立行政法人となり、令和4年に60周年を迎えた。高専は、設立当初は産業界からの要請に基づき、我が国の産業（工業）の発展を支える中堅技術者を工業技術に関する実務教育によって養成する教育機関としてその役割を果たしてきた。創設から60年を経た今日では、科学技術の発展と社会のグローバル化による産業構造の変化に伴い、養成するべき能力・技能も大きく変わり、新しい時代の担い手としての実践力・現場力だけでなく、創造性を有した高度な「人財」の育成が求められている。

独法化に伴い、労働基準法第89条の規定に基づき、教職員に対する就業規則が制定された。また、教職員の安全及び衛生管理に関する就業規則等の法令に則って本校の安全衛生管理規程が制定され、衛生管理者、安全管理者を置くとともに安全衛生委員会が設置された。予算は、政府からの運営費交付金および施設整備費補助金、授業料収入等であり、これらが各高専に配分された。独法化前の費目別の縛りが緩和されたとともに、校長裁量経費が設けられるなど、使途の自由度はある程度緩和されてきた。しかし、政府予算の逼迫から独立行政法人に対する運営費交付金も他の独立法人と同様に効率化係数が導入されて削減されており、年々厳しくなっている。一方、51高専で一法人であることのスケールメリットを活かし、高専機構本部と各高専が連携した教育研究、教員交流、国際交流、産学連携などの取り組みやプログラムが数多く実施されている。

本校の本科4年から専攻科2年に至る4年間の教育については、一般社団法人日本技術者教育認定機構（JABEE）から5つの技術者教育プログラムが認可され、平成16年度以降、令和元年度までに約520名が修了生として認定を受けてきたが、費用対効果や機関別認証評価の業務との重複の問題などを勘案し、令和2年度の継続審査の受審を

見送った。

高専の機関別認証評価は、学校教育法第109条第2項、第123条及び学校教育法施行令第40条に基づいて実施される高専の教育研究活動等の総合的な状況に関する評価で、本校はこれまでに平成16年度の試行的評価を経て、平成18年度及び25年度並びに令和2年度に評価を受けた。令和4年度から日本工学教育協会による「国立高専教育国際標準（KIS）」に基づく高専本科5年間の教育の教育内容を評価・認定する認定制度が開始され、本校も受審予定である。なお、KIS評価・認定プロセスがJABEEの定める認定機関認証評価基準を満たしていることが認証されている。

平成27年4月に第九代校長として舞鶴高専から三川譲二氏が就任し、運営体制や教育課程などの大幅な見直しが行われた。運営に関しては、平成28年度に「校内組織改革の基本的な考え方について（最終版）」が第7回学科長委員会で承認された。教育に関しては、専門学科教員が所属学科以外の学生を教える科目（概論）が開講し、学生は自身の専門分野の垣根を越えて学習することが出来るようになった。さらに、4年次に一般科目担当教員による「リベラルアーツ特論1、2」が開講した。教員1名あたり各学科から2、3名の学生が受講する学科横断ゼミ科目であり、様々な学科の学生とともに担当教員の専門分野を協同で学習出来るようになった。

令和2年4月に第十代校長として九州大学から本庄春雄氏が就任し、引き続き運営体制や教育課程などの見直しが行われた。運営に関しては、大学に倣いプロボスト（副校長）を新設し、学校運営側と学科の橋渡しや、主事間連携の支援の他、これまで教務主事が担ってきた教員人事、学内予算などの業務を担うことになった。令和3年度から各主事または各長以外の教員は主事補等または担任となり、原則併任不可であること、各主事補または各長補の定員が基本的に2名であること、主事または長が所掌する委員会の委員は各学科から1名と

することになり、これまでの主事補と担任の併任や、一つの委員会に同一学科から複数の委員が配置される状態が解消された。教員人事では、学内昇任を凍結し、全ての職位において公募制に統一した。さらに、令和4年2月の人事委員会において、本校の教員人員枠を決定し、学科単位ではなく学校全体としての中期的な人事計画を策定した。教育に関しては、令和2年度はコロナ禍に伴い長期間の休校を余儀なくされたが、高専機構がマイクロソフト社と包括ライセンス・教育支援契約を締結しており、Microsoft 365 を利用出来たことや、本庄校長の強いリーダーシップの下で教職員が一丸となってICTを用いた教育に取り組んだこと、学生の高い順応力などによって、無事に1年間を乗り切ることが出来た。この取組の副産物として、遠隔会議や従来の対面授業では出来ない教授方法の開発とその共有など、ICTを活用した業務や教育が学内に飛躍的に浸透した。また、本庄校長は「九州大学工学部・九州沖縄9高専連携教育プログラム」の高専側のまとめ役として尽力された。同プログラムは、九州大学工学部融合基礎工学科と九州沖縄地区の9つの高専の専攻科で修学するものであり、履修者は九州大学と連携高専専攻科に在籍し、双方の教員が連携して教育・研究指導を行うという特徴を持っている。

令和4年4月に第十一代校長として九州大学から松村晶氏が就任した。運営に関しては、規則と運用の齟齬を解消するため、管理運営会議と本校の最高意思決定機関である運営委員会の機能の明確化および強化を行い、令和6年第5回運営委員会で内部組織の改定が承認された。教育の国際化を推進するため、令和6年11月に国際化推進室が設置され、室員として各学科からの1名に加え、高専機構のグローバルエンジニア育成事業で採用した外国人教員（特命准教授）を配置した。

教育に関しては、これまでは音楽の授業や一部のクラブ活動でしか使用されていなかった校歌を全員が歌えるようにするための様々な取組がなされ、令和6年現在は学生のみならず教職員にも広

く浸透した。また、学生からの授業評価を精緻に分析するため、授業評価アンケートの質問項目の見直しを行うとともに、Webclass を活用することにより、即時に結果を表示出来るようになった。これによって、教員は授業の評価を正確に把握し、早期に改善することが出来るようになった。令和4年度に文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」のリテラシーレベルに全学科が認定された。さらに、令和5年度に制御情報工学科が応用基礎レベルに認定された。令和9年度以降の本科入学試験については、令和6年の入学試験運営委員会において、推薦選抜及び学力選抜の双方ともアドミッションポリシーに沿った入学検査の改善が提案され、承認された。令和6年度の「学業成績の評価並びに単位の認定及び及落に関する規定」の主な改正では、原級留置者の履修方法について、基本的には再履修であるものの、原級に留められた年度で80点以上の学年末成績の評価を受けた必修科目、及び60点以上の学年末成績の評価を受けた選択科目を履修したものとし、再履修の対象外とした。令和6年の企画委員会では、大学・高専機能強化支援事業（支援2:高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援）に制御情報工学科の改組を行う形で、令和7年度に申請することが了承された。

この10年間に新たに設けられた主要な委員会は、リスク管理委員会、広報委員会、特別支援教育委員会、男女共同参画推進委員会、研究推進委員会、表彰委員会、いじめ対策委員会、DX推進委員会であり、この時代のニーズを反映させたものとなっている。

様々な事象に伴う危機について組織的に迅速かつ的確に対処するため平成23年度にリスク管理室、平成29年度に構成員を拡大して委員会が設置された。男女共同参画については、平成26年度に男女共同参画推進室、平成29年度に構成員を拡大して委員会が設置された。障害者差別解消法および改正発達障害者支援法に基づき、特別な支援を要する学生への対応するものとして、平成29年に特別

支援教育委員会が設置された。いじめ防止対策推進法及び、いじめの防止等のための基本的な方針（文部科学大臣決定）などに基づき、令和4年度にいじめ対策委員会が設置された。教育DXを推進するため、令和3年度にDX推進委員会、その下部組織として令和4年度に業務改善ワーキンググループ（WG）が設置され、DX推進委員会が指定する課題について、DXの技術的な実装方法を具体的に検討して作業を実行すること、またその結果を委員会に報告し、必要に応じて相談する業務を担うことになった。さらに、同WGに内包する形で、情報関連のテクニカルサポート窓口業務やDXに資するアプリの開発を担うため、技術職員を構成員とするヘルプデスクが設置された。令和5年度には図書館のアルバイトにアプリ開発業務が付与され、ヘルプデスクと連携することとした。

高等教育改革に対応し、高専教育の質の保証及び向上させるため、高専機構によってモデルコアカリキュラム（MCC）が策定された。全ての高専生に到達させることを目標とする最低限の能力水準・修得内容であるMCC（コア）と、高専教育を受けた卒業生が持つべき基盤的資質・能力であるMCC（モデル）が提示され、コアとモデルにはそれぞれ技術者が備えるべき知識、技能、人間力に関する到達目標が定められている。全ての国立高専でMCCに基づきカリキュラムを編成し、平成30年度以降の入学者に適用している。高専教育の質保証のため、MCCを基軸として学生の学修成果を可視化し、到達状況をチェックすることで学びの向上につなげる仕組みの一つとして、平成17年から実施した学習到達度試験を発展させる形で、平成27年度からMCC到達目標に関する学生の到達状況を測定するComputer Based Testing（CBT）を実施している。

高専機構では、令和2年度からSociety5.0により実現する未来技術をリードする高専発！「Society5.0型未来技術人財」育成事業を進めている。GEAR5.0（未来技術の社会実装教育の高度化）とCOMPASS5.0（次世代基盤技術教育のカリキュ

ラム化）から構成され、それらを通じて、Society5.0で実現する社会・経済構造の変化、技術の高度化、社会・産業・地域のニーズ変化を踏まえ、地域や社会の諸課題に自律的・主体的に取り組み、生涯学び続ける学生を継続的に育成するためのカリキュラム点検を行い、高専教育の質保証へとつなげている。本校では、GEAR5.0のエネルギー・環境分野の中核拠点校、COMPASS5.0の半導体分野の拠点校として取り組んでいる。また、本校は高専機構のSTEAM教育支援事業に令和4年度から5年度の早期STEAM教育先進校、令和6年度から7年度の高専STEAM教育拠点校として採択され、小中学生から高専生までのシームレスなSTEAM教育の確立に取り組んでいる。高専機構では、社会課題を自分事として捉え、失敗を恐れず新たな価値やビジョンを創造できる学生を育成するために「高専スタートアップ教育環境整備事業」としてアントレプレナーシップ教育を支援している。令和5年に学生が価値やビジョンを創造する場所として学内予算で起業家工房を5棟設置した。同年、この事業で講習会を開催して起業家マインドの醸成を図り、関連物品を購入して支援体制を整えた。

国際交流については、これまでは1年程度の海外留学、久留米市が主催するアメリカのモデスト市への高校生派遣事業、高専機構によるシンガポールのポリテクカレッジでの語学研修、国際シンポジウム（ISTS：International Symposium on Technology for Sustainability）での研究発表などだったが、平成26年度以降は日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定受入）や科学技術振興機構さくらサイエンスプログラムにより、タイのキングモンクット工科大学から学生を特別聴講学生として受け入れ、本校学生と研究室でのPBLや、学生寮での交流会などを通じて、研究だけでなく日本文化の理解も深めている。コロナ禍での一時中断やオンライン交流を挟み、令和4年度はJASSOの海外留学支援制度（協定派遣）で同大学への派遣も行った。さくらサイエンスプログラムでは、令和4年度にスウェーデン・

NTI 高校アップサラ校の学生と教員を招聘した。金属・ゴム材料を通じた先進・基盤技術体験をテーマに、福岡県内の工場見学など、日本の最先端技術に関する知見を深めた。令和 5 年度は同プログラムにより本校、有明高専、北九州高専の学生、タイ、シンガポール、マレーシア、ベトナムの学生が参加して KOSEN Global Camp を開催した。久留米のタイヤ・ゴム産業と農業を活用して挑む水災害の防災ブレインストーミングをテーマにグループを作り、議論を深めた。令和 6 年度は、高専機構「高専生海外活動支援事業」、柿原科学技術研究財団、後援会の支援を受け、9 月にマレーシア工科大学への派遣を行った。特別聴講生はトゥールーズ IUT（仏）、キングモンクット工科大学、テマセクポリテクから受け入れた。10 月にはテマセクポリテクから学生と教員が本校を訪問し、学内を見学した。

学級担任や学生相談室では、様々な問題を抱える学生に対する個別の相談や指導に手厚く対応している。特に、この 10 年間でスクールカウンセラーを増員し、新たにスクールソーシャルワーカーを配置したことで、以前よりきめの細かい対応をしている。学生寮では、寮務主事室が寮生を指導し、点呼の徹底、避難訓練、ごみ分別回収、上級生による下級生への勉学の支援、メンタルヘルスを含めた健康チェックなどを実施し、教育的な対応も行っている。

年々、教職員の仕事は増える一方でありながら、定員削減も行われており、多忙化に拍車がかかっている。令和 2 年度から高専高度化推進経費事業「学校改善事業」として、ピアサポーター（TA を含む）を活用した学習・学校生活支援活動を実施している。令和 5 年度以降は卒業研究や課外活動の支援にまで拡大するなど全学的に展開しており、教職員の業務負担軽減に寄与している。さらに、職位の特例流用の活用による全学的な教員人員枠の計画、及び上記学校改善事業で併せて実施している教育 DX を活用した業務の見直しを行い、効率化を図っている。

課外活動については、文化系クラブではプログ

ラミングラボ部が全国高専プログラミングコンテスト、情報オリンピックなどで優秀な成績を収めている。体育系クラブでは、高専体育大会でラグビー部、サッカー部、硬式野球部、弓道部が地区大会だけでなく全国大会でも優秀な成績を収めている。特に、弓道部は令和 4 年の筑後川花火大会の事故で学内での活動が出来なくなったが、同年の全国大会女子団体の部で準優勝を果たした。また、硬式野球部は、令和 5 年度第 105 回全国高等学校野球選手権記念福岡大会で 35 年ぶりの県大会への出場を果たした。

平成 29 年から令和 3 年の間に福岡県の 15 歳人口が大きく減少したにもかかわらず、この 10 年間の入試倍率は約 2 倍を維持している。令和 6 年度以降の福岡地区および筑後地区の 15 歳人口が現状を維持することから、今後、倍率が大幅に減少する可能性は低いと予想される。本科学生に対する求人倍率は 20 倍から 40 倍と非常に高く、就職希望者の就職率はほぼ 100%を維持しているが、企業のグローバル化や離職率の高さなどの社会情勢により採用選考で内定者を厳選する傾向にあり、応募すれば内定するという状況ではない。進学についてはコロナ禍の影響により一時は就職 60%、進学 40%となったものの、直近の数年間は再び約 50%に戻っている。また、専攻科は本科との教育課程の接続性や授業料の安さ、大学院への進学や就職のしやすさなどから人気が高い。専攻科修了生の進路に関しては、本科よりも求人倍率は高く、大学院進学者も増えている。

社会連携に関しては、公開講座、出前授業の他、地域のイベントへの支援も行っている。平成 30 年度には、JST のジュニアドクター育成事業に採択され、5 年間に渡り地球規模の視点を有する次世代傑出人財の発掘・育成を図った。また、平成 24 年に発足したテクノネット久留米で地域連携活動の強化を図っている。教育の連携に関しては、平成 29 年に久留米工業大学との連携・協力に関する覚書、令和元年に久留米大学と連携協定を締結した。教育・研究および地域社会活動の分野で緊密な協力

関係を築き、連携を深めることで、教育・研究活動の充実、学生教育の質的向上、人材の育成、活力ある地域社会の形成、教職員の資質向上などが期待される。

施設については、老朽化の著しい学生寮、ものづくりセンター、一般文科・理科棟、専門教室棟などを整備した。また、KOSEN コモンズについては、ものづくりセンター、専門教室棟、一般文科理科棟、熱材力実験、リサーチセンター、テクノセンターなどを学生向けに整備している。

1.02 教育理念

本校の教育理念は「自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成」であり、平成10年9月1日に制定された。まず、創基75周年・高専創立50周年記念誌に示された制定までの経緯を簡潔に振り返り、次に教育理念の影響について示し、最後に教育理念の見直しも含めた、継続的なPDCAサイクルに向けた組織運営について述べたい。

1.02.1 教育理念の制定

教育理念の制定は平成10年8月に教育理念設置検討委員会から谷口校長に提出された答申に遡る。答申の作成に当たり、委員会が設置されてから約8カ月の審議を行っている。制定当時の教育理念は「自立の精神と独創性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成」であったが、「独創性」は平成16年度に現在の「創造性」に変更された。委員会の設置に至る過程は、和栗初代校長による退任時の提言、第7回機械工学科卒業生(昭和47年3月卒)が寄贈した記念館前の石碑「我等創建により高専魂を養わん」、平成6年10月に設置された将来構想検討委員会、などと合わせて創基75周年・高専創立50周年記念誌に記されている。一読をお勧めしたい。

1.02.2 教育理念の影響

教育理念は文字通り本校の理念であることから、以下との整合性を保つ必要がある。

1.02.2.1 教育目的および教育目標

学校教育法における高等専門学校の目的は、第百十五條において「高等専門学校は、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的とする。」とある、また、設置基準には(教育上の目的)として第三條に「高等専門学校は、学科ごとに、

人材の育成に関する目的その他の教育上の目的を学則等に定めるものとする。」とある。これに従って本校が定めた準学士(本科)課程の教育目的および教育目標を以下に示す。

・教育目的

次のような実践的、創造的技術者を育成する。

- (1) 自立の精神と創造性に富んだ技術者
- (2) 広い視野と豊かな心を兼ね備えた技術者
- (3) 社会に貢献できる技術者

・教育目標

- (1) 広い視野と豊かな心の涵養
- (2) 数学、自然科学、情報処理に関する基礎能力の育成
- (3) 専門に関する基礎知識と技術の修得
- (4) 問題を分析し、解決する能力の育成
- (5) 自ら学び、工夫する能力の育成
- (6) コミュニケーション能力の育成

以上に則り、各学科が教育目的と教育目標を定めている。

専攻科過程の教育目的は以下のとおりである。

・教育目的

次のような創造的技術者を育成する。

- (1) 先端技術及び高度情報化に対応できる技術者
- (2) 創造的研究開発能力を持った技術者
- (3) 国際化に対応できる技術者

専攻科の教育目標は専攻ごと、また、コースごとに用意されている。これらはすべて平成25年9月12日に制定された。

1.02.2.2 三つの方針

平成29年4月1日に施行された学校教育法施行規則の改正において、第百六十五條の二「大学は、当該大学、学部又は学科若しくは課程ごとに、その教育上の目的を踏まえて、次に掲げる方針を定めるものとする。

一 卒業又は修了の認定に関する方針

二 教育課程の編成及び実施に関する方針

三 入学者の受入れに関する方針

前項第二号に掲げる方針を定めるに当たっては、同項第一号に掲げる方針との一貫性の確保に特に意を用いなければならない。」が定まり、高等専門学校に準用された。この改正は高等教育の質的変換、つまり、高等教育の充実に向けた PDCA サイクルを確立することが目的であり、平成 28 年 3 月 31 日付の中央教育審議会大学分科会大学教育部会によるガイドラインが公開されている。

1.02.2.3 国立高専教育国際標準 (KOSEN International Standard : KIS)

令和 4 年度に日工教が始めた評価・認定制度であり、そのプロセスは日本技術認定機構が定める認定機関認証評価基準を満足していることが認証されている。JABEE が 4 年生と専攻科、つまり学部教育を対象としていたのに対し、KIS は本科 5 年間を対象とする点が異なる。KIS の認定基準「1.1 育成する人財像の設定と公開・周知」には以下を満足していることを根拠資料等により合理的に説明しなければならない。「学校は、育成しようとする人財像を設定・公開し、教育に関わる教職員並びに学生に対して周知していること。この人財像は、人財像に対する社会の要求や学生の要望に配慮の上、卒業生の進路として想定される分野等を考慮して定められていること。」注目すべき点は「社会の要求や学生の要望に配慮」にあると思われる。社会の要求や学生の要望は技術の進展や社会情勢によって変化することが考えられる。従って、適宜アンケート等により教育目的や教育目標、三つの方針のみならず、教育理念自体の見直しも視野に入れる必要がある。

1.02.2.4 継続的な PDCA サイクルに向けた組織運営

1.02.2.2 に示した三つの方針が学校教育法施行規則として施行されてから、教育の PDCA サイクルによるスパイラルアップが強く意識されており、これ

を組織的に運営する必要がある。この流れは令和 2 年 1 月 22 日付の中央教育審議会大学分科会による「教学マネジメント指針」として改めて示されている。1.02.1 に示した通り、本校の教育理念は教育理念設置検討委員会で検討されたものであるが、科学技術の進歩はますます速く、激しくなっている。令和 8 年度受審予定の KIS ならびに 9 年度受審予定の機関別認証評価への対応も踏まえ、教育理念のほか、教育目的、教育目標、三つの方針などを定期的に見直す組織の確立が必要である。

1.02.3 専攻科の教育目的

次のような実践的、創造的技術者を育成する。

- ・先端技術及び高度情報化に対応できる技術者
- ・創造的研究開発能力を持った技術者
- ・国際化に対応できる技術者

1.02.3.1 専攻科の教育目標

機械・電気システム工学専攻

機械、電気電子、制御情報に関するより深い専門知識を教授し、これらの知識を総合的に活用し、様々な問題解決ができる技術者を育成する。

(1) 機械工学コース

- ・技術者倫理
- ・数学、物理、情報処理に関する知識と応用力
- ・機械工学に関する専門知識の習得と職業上応用できる基礎能力の育成
- ・工学的な解析能力・考察力の育成及び機器操作の習得
- ・自主的にテーマを企画立案し、創造的かつ継続的に実施できる
- ・種々の工学的知識や技術を利用し、自己学習やグループ学習により社会の要求を解決できる。
- ・専門技術に関するプレゼンテーションと国際化に対応できる基礎的なコミュニケーション
- ・与えられた条件のもとで技術者として地域社会に貢献できる。

(2) 電気電子工学コース

- ・先端の電気エネルギーをマネジメントできる電気電子技術の習得
- ・先端の情報通信・電子機器を活用できる電気電子技術の習得
- ・もの、製品をベースにした技術実務能力の習得
- ・電気電子技術の基礎となる学力の修得
- ・技術に関するコミュニケーション能力の育成
- ・技術者倫理感覚の育成
- ・企画・管理能力の育成

（３）制御情報工学コース

- ・技術者としての広い視野と倫理観
- ・基礎工学の知識と応用力
- ・専門工学の知識と応用力
- ・学んだ知識や技術をベースにして社会の要求に対する解決法を立案し、実現までの手順を計画することができる。
- ・コミュニケーション力
- ・実践力

物質工学専攻

有機、無機、ポリマー、金属材料及びバイオ技術に関するより深い専門知識を教授し、新物質の開発や製造プロセス技術に対応できる技術者を育成する。

（４）生物応用化学コース

- ・技術者倫理と多面的視野
- ・生物応用化学基礎と工学基礎
- ・生物応用化学の専門知識と応用力
- ・生物応用化学基礎、工学基礎、生物応用化学の専門知識を活用し、社会の要求を解決するための企画力を持っている。
- ・国際化に対応できるコミュニケーション基礎能力を習得する。
- ・自主的にテーマを企画立案し、創造的かつ継続的に実施することができる。
- ・地域社会を中心とした産業界に技術者として広く貢献できる。

（５）材料工学コース

- ・自然科学及び情報処理技術に関する知識
- ・材料に関する基礎的知識と応用力

- ・工学的な基礎原理・現象を実験によって理解できる能力を身に付ける。
- ・調査及び実行能力
- ・外国に関する知識及び国際的コミュニケーションの基礎能力を身に付ける。
- ・多面的視野と技術者倫理
- ・インターンシップなどの実務経験を通して、多面的に物事を考える能力を身に付ける。

教育理念

～ Philosophy of Education ～

自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成

We raise engineers with a spirit of independence, creativity, a broad vision and humanity, who are ready to contribute to society.



自立の精神
Spirit of Independence

〔技術者の木〕

1.03 組織の改編

この間の本校の主な組織の改編は、時系列順に校内組織改革、教育研究支援室の名称変更、事務組織の見直し、材料工学科の名称変更、プロボストの設置と名称変更、国際化推進室の設置である。これらを項目別に述べる。

1.03.1 校内組織改革

平成 27 年度第 12 回学科長委員会校長報告において、企画委員会に下記の 3 つの観点に基づく組織改革案策定が諮問された。

- 1) 学校の抱える諸課題の解決に向けて取り組める体制づくり
- 2) 学校意思の決定のプロセスの透明化
- 3) 教員の業務負担のバランス、効率化及び軽減

これらの観点からみた現状の問題点を踏まえて改革案の指針を「委員会構成」、「会議開催日」、「役職数」、「その他」に分けて策定し、平成 28 年度第 7 回学科長委員会で審議の結果、承認された。「委員会構成」では、委員長所掌の委員会の選別、委員会等の新設・廃止、5 主事及び産学民連携テクノセンター長の相互非兼任等を行い、「会議開催日」では、毎週水曜日の 3 時限目以降を会議日とし、委員会毎に第何週に開催するかを定めた。「役職数」では、主事、各種長、各種補、就職主任及び担任の原則非兼任及び役職数を教員定員数-7 とすることが定められた。「その他」では、本内容の適用を平成 29 年度とすることと、平成 30 年度の見直しが明記された。

以降、見直しがなされ、主事を中心として委員がそれを支えて運営する観点から、令和 3 年度から各主事補または各長補の定員が基本的に 2 名となった。

1.03.2 教育研究支援室の名称変更

技術職員は、各専門分野における高度な技術・技能を有するテクニカルスタッフとして、学生の実験・

実習・卒業研究、教員の教育研究活動、地域の産学民連携活動及び本校のネットワーク管理等に係る技術支援、技術の習得・継承・保存及び研修、実験実習機器・設備等の保守・管理及び災害防止その他多岐にわたる業務を、教員と連携しつつ遂行している。実践的・創造的エンジニアの育成を使命とする本校の教育・研究において、大きくかつ重要な役割を果たしている。その業務範囲の広さと役割の大きさ・重さを主な理由として、平成 20 年に設置された教育研究支援室は、平成 29 年度から教育研究支援センターへと名称を変更した。同センターは、教務主事をセンター長とし、技術長の下、機械及び物理系、電気電子及び制御情報系、物質及び化学系という 3 つの技術グループから構成されている。令和 6 年度現在、**Society5.0** で実現する社会・経済構造の変化、技術の高度化、社会・産業・地域のニーズ変化を踏まえ、地域や社会の諸課題に自律的・主体的に取り組み、かつ生涯学び続ける学生を継続的に育成するためにも、同センターが果たす役割は大きい。

1.03.3 事務組織の見直し

以下の 7 項目の基本的な考え方にに基づき、平成 30 年度に事務組織の見直しがなされた。

- 1) 研究及び産学官民連携の強化を推進するため、所掌する係の明確化及び集約強化
- 2) 図書及び情報に関する事務の一本化
- 3) 専攻科に係る担当部署の明確化
- 4) 広報活動の強化
- 5) 委員会を所掌する部署名と事務分掌との整合性の確保
- 6) その他必要な改正
- 7) 係名変更に伴う他の規則等の改正は関連規則等を調査後、一斉に改正手続きを実施

具体的な事務組織の見直しは、以下の通りである。科研費の業務を集約し、産学官民連携を業務に含める形で、名称変更等で研究推進係を設置した。広報

委員会の所掌と広報に関する事務所掌の統一、および図書に学術情報の機能の付加、並びに情報関連に係る窓口業務への特化を図るため、企画情報係を廃止して広報業務については総務係へ移管し、情報関連の業務については、図書係から名称変更等で設置した学術情報係に移管した。さらに、専攻科に係る担当部署の明確化を図るため、専攻科係を設置したが、業務整理に伴い、令和3年度第1回運営委員会にて廃止が承認された。

1.03.4 材料工学科の名称変更

材料の開発・設計・製造から利用、その後の寿命による破壊、廃棄、リサイクルまでを『材料のシステム』として捉え、そのことを学ぶことのできる学科にふさわしい名称として、平成29年4月に材料工学科から材料システム工学科へと名称変更を行った。

以下の6点が名称変更の主要な理由である。

- 1) 材料技術を基にしながら設計・製図等の機械的技術を習得する技術者を養成する必要がある。
 - 2) 高度経済成長期に整備された社会インフラの長寿命化、メンテナンス等「安心・安全」な社会を実現するためのニーズも増えている。
 - 3) 金属・セラミックス・高分子材料に関する技術に加え、ものづくりに関わる広範囲にわたる工学知識を持つ技術者への要求が高まっている。
 - 4) 材料は我が国の科学技術・工業の競争力を支える基盤だが、材料工学系学科がある高専は全国に4校しかなく、材料工学教育の底上げが必要。
 - 5) 中学生、在校生にとって学科の教育内容を理解でき、魅力ある学科名称とする。
 - 6) 学科名称の変更に伴うカリキュラムの変更を行い、グローバル化に対応できる人材等、産業界からの要望に応えることのできる学科とする。
- この名称変更により、材料の研究開発から製造・利用・廃棄までのイノベーションに繋がる人材の育成、製造現場を支える複合融合技術としての材料がわ

かる実践的な技術者の育成、さらに、地域・社会ニーズを踏まえた新分野・領域への教育が期待できる。

1.03.5 プロボストの設置と名称変更

令和3年度に新たにプロボストという名称の副校長職を設置した。校長特別補佐など、学校別に独自設定が認められている役職があり、それに倣い管理職ではないものの同等の副校長として設置された。主要な業務は、学校運営側と学科の橋渡しや、主事間連携の支援の他、これまで教務主事が担ってきた教員人事及び学内予算の管理等である。大学等では、プロボストはNo.2のポジションであるが、校長代理は引き続き教務主事が担う。なお、プロボストの日本語訳に相応しいものがないため、カタカナ表記となっている。また、令和5年度に業務内容の実態に近い総務担当副校長と名称変更された。

1.03.6 国際化推進室の設置

これまでの国際交流活動を踏まえ、活動を推進する上での問題や課題等を解消するために組織的な対応を行う必要があり、令和6年度に「国際交流推進室（仮称）の在り方検討ワーキンググループ（以下「WG」という）」が発足した。WGでは、「国際交流推進室（仮称）」の在り方が検討され、協議内容を整理したものに基つき、組織的な実行力を高めるため、「久留米工業高等専門学校国際化推進室規程（案）」が策定された。規程において、国際化推進室は、目的として国際化の方針を達成するための各種施策の企画及び実施により、本校の国際化を推進すること、任務として、「本校の国際化の方針の立案」、「本校の国際化の方針に資する施策の企画と実施」、「その他国際化に関すること」を遂行すること、組織として、国際担当主事及び同主事補（令和7年度設置予定、主事補（教務、学生、寮務、総務企画（令和7年度設置予定）、専攻科）から各1名、主事補が所属しない学科から各1名、総務課長及び学生課長、その他校長が必要と認める者とした。また、主事補（教務、学生、寮務、総務企画、専攻科）及び

主事補が所属しない学科の室員の任期は 1 年とし、再任を妨げないこと、室長として国際担当主事をもって充てること、室員以外の出席に関すること、事務は学生課の協力を得て総務課で処理すること等が定められた。この規程は、令和 6 年度第 7 回運営委員会で審議され、12 月 1 日付で施行予定である。なお、上述の内容を含め、令和 7 年度に内部組織を改正予定である。

久留米高専過去10年の施設整備について

1.04.01 平成22年度

1.04.01.1

・ものづくり教育センター（旧機械工作工場）

本整備は、昭和46年に建設された鉄筋コンクリート造1階建ての建物で、改修面積730㎡にて、天井に空調機14台設置し、教育環境改善を図った。

1.04.01.2・武道場

本整備は、昭和45年に建設された鉄筋コンクリート造2階建ての建物で、改修面積450㎡にて、耐震化すべく耐震ブレースを設置し、不足していた耐震強度を増すことで、建物の安全性を高める工事を実施した。また、照明器具とコンセントを更新し、給排水設備の改修も行い、教育環境改善を図った。

1.04.02 平成23年度

1.04.02.1

・筑水寮

本整備は、昭和42年に建設された鉄筋コンクリート造4階建ての建物で、筑水寮内の各寮室へ空調設備を設置すべく、1階から4階全ての寮室に空調用のコンセントを設置した。

1.04.02.2

・つつじ寮

本整備は、平成23年度に本校に不足していた、女子寮について、定員30名、鉄筋コンクリート造、地上3階建て、建築面積231.65㎡、延べ床面積578.04㎡を新築した。

1.04.03 平成24年度

1.04.03.1

・図書館

本整備は、昭和40年に建設された鉄筋コンクリート造2階建ての建物で、改修面積1702㎡にて、外部の外壁、屋上防水、建具、内部の床・壁・天井の改修、空調設備の更新、給排水の改修、及び身障者便所の設置を行った。電気設備に関しては、コンセントと照明器具を更新した。またバリアフリー化の

ため、エレベーターを設置した。更に旧耐震であったため、耐震改修を合わせて行い、教育環境改善を図った。

1.04.04 平成27年度

1.04.04.1

・管理棟

本整備は、昭和44年に建設された鉄筋コンクリート造2階建ての建物で、改修面積1156㎡にて、外部の外壁、屋上防水、建具、内部の床・壁・天井の改修、空調設備の更新、給排水の改修、及び身障者便所の設置を行った。電気設備に関しては、コンセントと照明器具を更新した。またバリアフリー化のため、エレベーターを設置し、本校の玄関となる管理棟の環境整備を図った。

1.04.05 平成28年度

1.04.05.1

・筑水寮

筑水寮の男子便所において、設備の老朽化に伴い、照明器具及び給排水設備を更新した。

1.04.05.2

・制御情報工学科棟

本整備は、平成5年に建設された鉄筋コンクリート造3階建ての建物で、建物内の空調設備の老朽化に伴い、空調設備を更新した。

1.04.06 平成29年度

1.04.06.1

・校内

校内に光ファイバーケーブルを新設し、校内のネットワーク環境の充実を図った。

1.04.06.2

・野球場

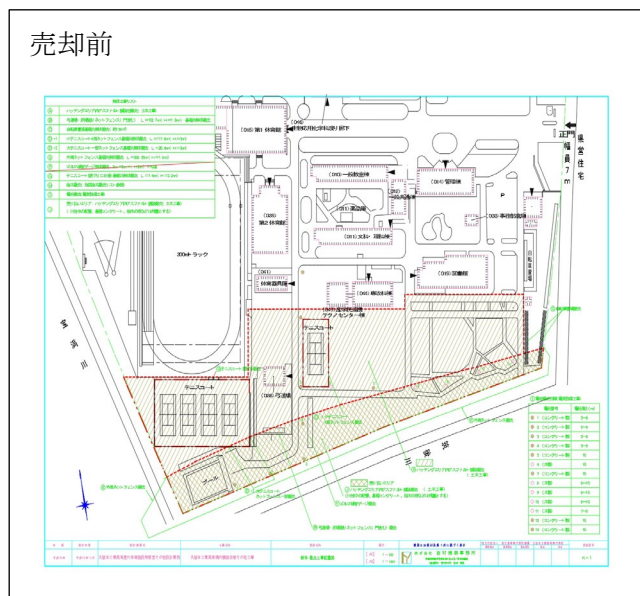
設備の老朽化に伴い、グラウンドの防球ネットを更新した。

1.04.07 平成30年度

1.04.07.1

・校内

筑後地方において、豪雨被害が多発しており、国土交通省より、本校南側にある筑後川堤防拡幅工事を行うため、本校の一部の土地を売却した。それに伴い、売却部分のある弓道場及びプールが支障となっていたため、空き地の整備を行うと同時に、旧弓道場及びプールを取り壊し、新たに同規模の弓道場及びプールを新築した。また、校内の敷地を整地し、駐車場整備及び駐輪場の整備を行った。



1.04.08 平成31年度

1.04.08.1

・第2体育館

本整備は、鉄筋コンクリート造1階建ての建物で、身障者利用が出来るよう段差を解消し、また第2体育館玄関部分にスロープを設置し、バリアフリー化を図った。

1.04.09 令和2年度

1.04.09.1

・文科・理科棟

本整備は、昭和43年に建設された鉄筋コンクリート造3階建ての建物で、改修面積1559㎡にて、外部の外壁、屋上防水、建具、内部の床・壁・天井の改修、空調設備の更新、給排水の改修、及び身障者便所の設置を行った。電気設備に関しては、コンセントと照明器具を更新し、また実験設備の環境改善のため、電源の増設も行い教育環境改善を図った。

1.04.09.2

・専攻科棟

本整備は、平成6年に建設された鉄筋コンクリート造3階建ての建物で、建物内の空調設備の老朽化に伴い、設備を更新した。

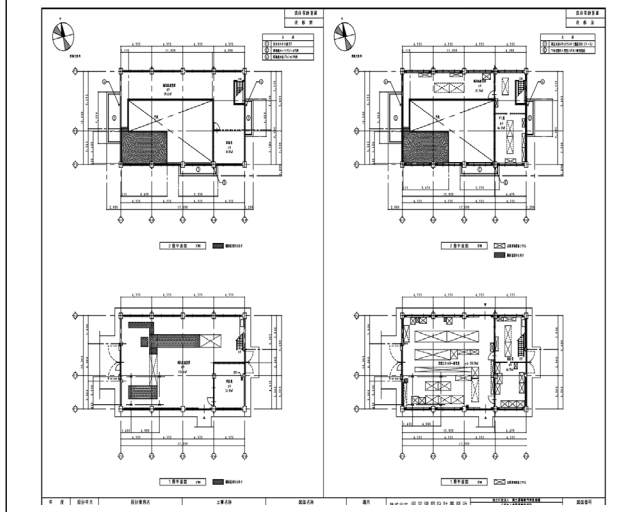
1.04.10 令和3年度

1.04.10.1

流体実験室

本整備は、昭和49年に建設された鉄筋コンクリート造2階建ての建物で、改修面積264㎡にて、外部の外壁、屋上防水、建具、内部の床・壁・天井の改修、空調設備の更新、給排水の改修、及び身障者便所の設置を行った。電気設備に関しては、コンセントと照明器具を更新し、また実験設備の環境改善のため、電源の増設も行い教育環境改善を図った。

改修前後平面図



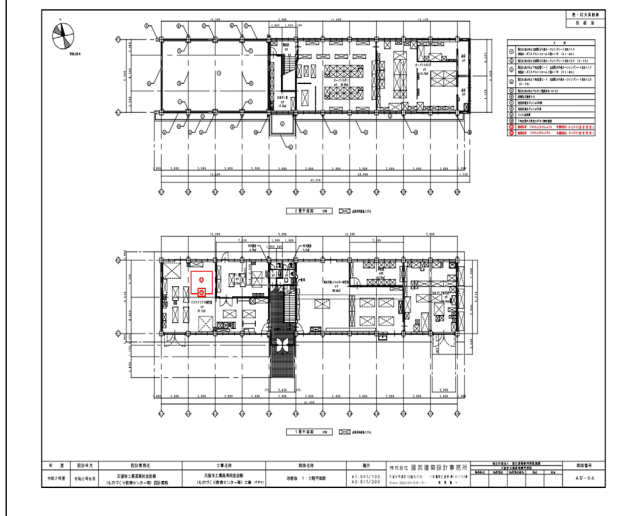
1.04.10.2

熱材力実験棟

本整備は、昭和 47 年に建設された鉄筋コンクリート造 2 階建ての建物で、改修面積 601 m²にて、外部の外壁、屋上防水、建具、内部の床・壁・天井の改修、空調設備の更新、及び給排水の改修を行った。

電気設備に関しては、コンセントと照明器具を更新し、また実験設備の環境改善のため、電源の増設も行い教育環境改善を図った。

改修前後平面図



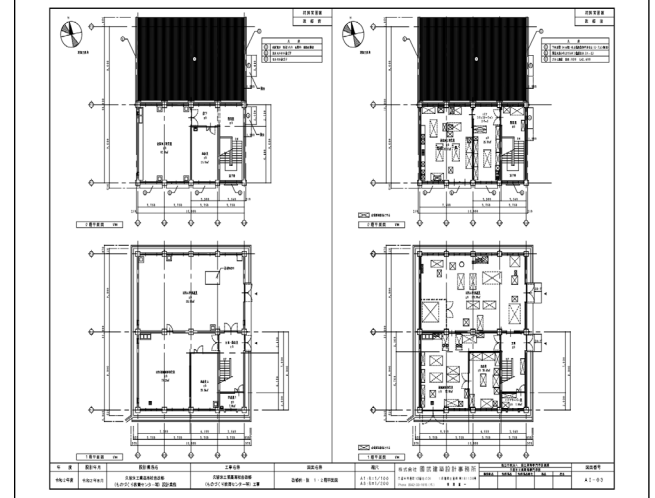
1.04.10.3

材料システム研究・実習棟

本整備は、昭和 53 年に建設された鉄筋コンクリ

ート造 2 階建ての建物で、改修面積 405 m²にて、外部の外壁、屋上防水、建具、内部の床・壁・天井の改修、空調設備の更新、及び給排水の改修を行った。電気設備に関しては、コンセントと照明器具を更新し、また実験設備の環境改善のため、電源の増設も行い教育環境改善を図った。

改修前後平面図



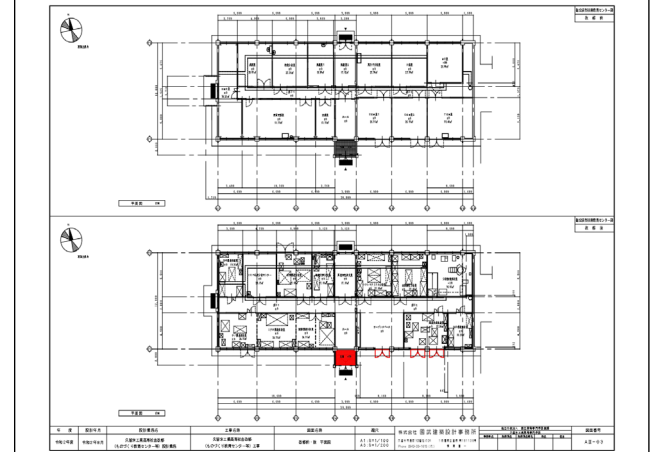
1.04.10.4

産学民連携リサーチセンター

本整備は、昭和 49 年に建設された鉄筋コンクリート造 1 階建ての建物で、改修面積 438 m²にて、外部の外壁、屋上防水、建具、内部の床・壁・天井の改修、空調設備の更新、及び給排水の改修を行った。

電気設備に関しては、コンセントと照明器具を更新し、また実験設備の環境改善のため、電源の増設も行い教育環境改善を図った。

改修前後平面図



1.04.10.5

校内ライフライン

豪雨災害に関連して、校内地下に埋設している雨水・排水管を更新した。

1.04.11 令和4年度

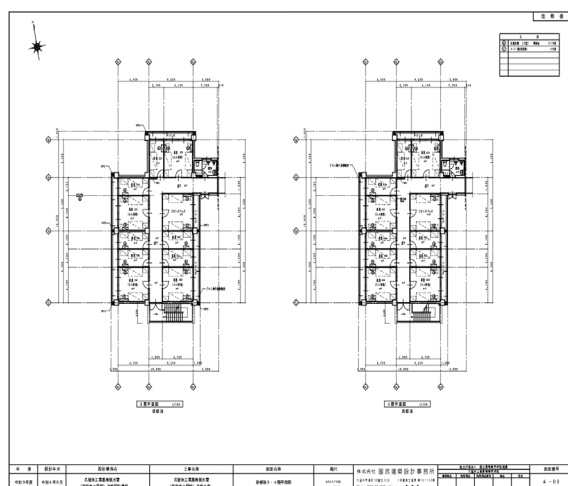
1.04.11.1

筑水寮（寄宿舍2号館）

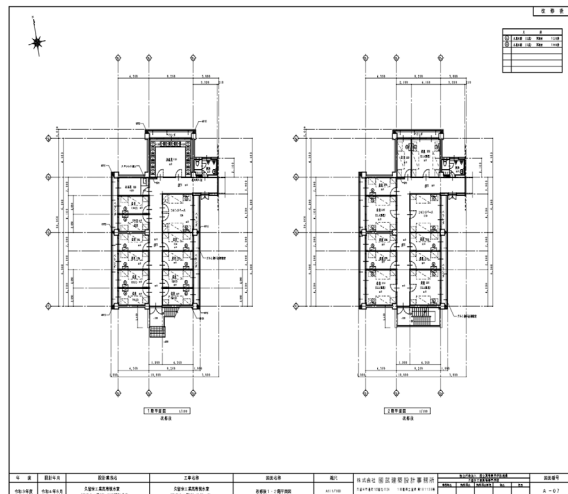
本整備は、昭和61年に建設された鉄筋コンクリート造4階建ての建物で、改修面積781㎡にて、外部の外壁、屋上防水、建具、内部の床・壁・天井の改修、空調設備の更新、及び給排水の改修を行った。

電気設備に関しては、コンセントと照明器具の更新を行い、寮生の生活環境改善を図った。

改修後平面図



改修後平面図



1.04.12 令和5年度

1.04.12.1

管理棟

管理棟にある、防災盤の老朽化に伴い、防災盤を更新した。

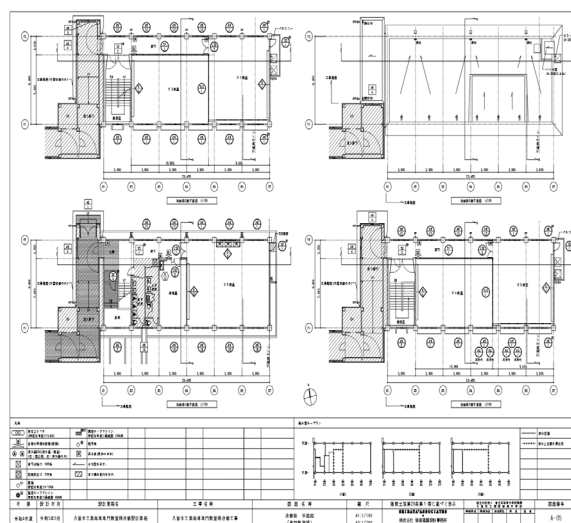
1.04.12.2

専門教室棟

本整備は、昭和55年に建設された鉄筋コンクリート造3階建ての建物で、改修面積663㎡にて、外部の外壁、屋上防水、建具、内部の床・壁・天井の改修、空調設備の更新、及び給排水の改修を行った。

電気設備に関しては、コンセントと照明器具の更新を行った。また、2、3階教室の壁を稼働式に変更し、自由な空間を作り出す事で、様々なイベントや行事にも対応出来るよう更新した。

改修後平面図



1.05 教育課程の変遷

令和 6 年度現在の教育課程は平成 29 年度から 30 年度に設置されたカリキュラム改正特別委員会の最終答申を基本としている。1.05.1 および 1.05.2 にて設置の背景ならびに教育課程改正への道筋を示す。続いて 1.05.3 にてそれ以降の改正について簡単に触れ、最後に今後の改正に向けた展望を示す。

1.05.1 カリキュラム改正特別委員会の設置

平成 29 年度第 4 回運営委員会において、校長より「今後の国立高専における教育体制整備の方針」に係る久留米工業高等専門学校カリキュラム改正計画案（骨子）が提案され、審議の結果、承認された。骨子に書かれた教育課程改正の観点は以下のとおりである。

- カリキュラム改正を平成 31 年度より実施する。
- カリキュラムを MCC に基づき、コアカリキュラム（6～7 割）と特色カリキュラム（3～4 割）に再編成する。
- 特色カリキュラムの内容は次のものとする。
 - 共創教育：以下を例とする
 - ◇ 副教科（4・5 年及び専攻科：他学科の指定授業科目を必修で習得するもの）、工学の共通基礎科目（低学年）、共通必修及び選択科目（高学年）、企業等との協働教育科目、キャリアデザイン、共創教育関係リベラルアーツ科目、文理・理科ゼミ（一般学科教員の各専門に関連した必修ゼミ）、混合クラス授業（英語・国語・数学・物理・化学）等
 - CO-AL 技術英語
 - マテリアル 4.0
 - その他（新規）：各学科からの申請に基づき検討

この骨子を実施するための組織としてカリキュラム改正特別委員会の設置が平成 29 年度第 8 回運営委員会で承認された。

1.05.2 最終答申

カリキュラム改正特別委員会は平成 29 年度に 3 回、平成 30 年度に 4 回開催され、中間答申が校長に提出された。中間答申に対する意見を反映し、再検討を行った結果が最終答申として平成 30 年度第 5 回運営委員会に報告された。答申に示された教育課程に関する検討内容を以下に抜粋する。

● 特色カリキュラム

- リベラルアーツ特論（仮称）：一般選択科目 3 単位を、リベラルアーツ特論 2 単位及び第 2 外国語 1 単位とする。リベラルアーツ特論は 4 年生通年科目とし、5 クラス 14 名の希望する一般教員で担当する。第 2 外国語は 4 年生前期と 5 年生前期の選択科目として中国語、韓国語、ドイツ語を各 1 単位開設し、修得すべき単位を 1 単位とする。開設は 4 年生前期と 5 年生前期の同時開講とする。
- 技術者素養科目：安全工学、技術英語、情報リテラシー、工業倫理、産業財産権、品質管理、技術史、プログラミングの内容を、科目として開設又は何らかの科目のシラバスに含めることで対応する。
- 学科横断科目：学科毎の特性があり、全学科横断は実現できていない。しかしながら、機電系学科は物質系学科と、物質系学科は機電系学科との学科横断を実現している。

- 学修単位の導入：一般教員が担当する本科科目に 40 単位（1 学科当たり 8 単位）を導入する。専門教員が担当する本科科目は、機械：20 単位、電気：8～14 単位、制御：10 単位、生化：20 単位、材料：6 単位であり、学則第 13 条第 3 項第 3 号による上限の 60 単位（一般科目の 8 単位を除くと 52 単位）となる学科はない。

また、一般文科教員担当科目、専門学科の教育課程案が提示された。専攻科教育課程の見直しは行わないことが報告されている。なお、最終答申には学科横断科目は実現できていないとあるが、例えば機械

工学科の科目プログラミングを制御情報工学概論に、機械材料科学を材料システム工学概論に変更する等により、全学科で2科目以上の学科横断科目を設けている。教育課程の詳細は教務委員会・専攻科委員会で検討され、最終的には平成30年度第8回運営委員会にて、教育課程改正に伴う学則改正として審議の上確定し、平成31年度より施行されている。

1.05.3 平成31年度以降の改正

平成31年度以降、例えばKOSEN COMPASS 5.0半導体分野の実践校である関係から全学科の専門選択科目として1単位の半導体工学概論1および2を4年生に開講する、あるいは情報教育の充実を図るための科目名変更などを行っているが、省略する。

1.05.4 今後の改正に向けて

1.05.1 および1.05.2の教育課程改正は教員の採用抑制、あるいは非常勤講師経費の削減も骨子に含まれるが、留意事項は機関別認証評価ならびに専攻科学位授与申請手続きに留まっている。令和6年度現在から当時を振り返ると、以下の答申ならびに指針も考慮する必要があると思われる。

- 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(平成24年8月28日 中央教育審議会答申)
- 『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー)、『教育課程編成・実施の方針』(カリキュラム・ポリシー) 及び『入学者受入れの方針』(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン」(平成28年3月31日 中央教育審議会大学分科会大学教育部会)

特に2点目については、学校教育法施行規則の平成28年3月31日改正(平成29年4月1日施行)において、①卒業認定・学位授与の方針、②教育課程編成・実施の方針、③入学者受入れの方針、を定めること、また、①と②については一貫性の確保に特に

意を用いなければならないことが示されている。本校もこれを反映して三つの方針を平成28年度第10回教務委員会ならびに同第12回学科長委員会で審議の上、確定しており、平成29年度以降の学生便覧に掲載している。三つの方針に基づいた教育の内部質保証システムは高等専門学校評価基準(機関別認証評価)の平成29年1月改訂より基準1の重点評価項目として示されているが、その重要性が当時の本校には浸透していなかったのであろうと想像している。今後は

- 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」(平成30年11月26日 中央教育審議会答申)
- 「教学マネジメント指針」(令和2年1月22日 大学分科会)

を参考に、卒業認定・学位授与の方針と一貫した教育課程編成・実施の方針の下で教育課程を改正する必要がある。それに加え、大学・高専機能強化支援事業(支援2:高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援)、高専機構のMCC(令和5年度4月28日版)、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度、グローバルエンジニア育成事業などへの対応も考慮する必要がある。教員の負荷が益々増える状況のもと、各種条件を満足しながら教育の質を維持しつつ、科目のスリム化や学修単位科目の増加、複数学級の同時授業等により、教員負荷の軽減を図りながら教育課程を改正する必要があると思われる。

1.06 入学選抜方法の推移

入学者選抜は本科、本科編入学、専攻科について行っている。平成 30 年度入試（平成 29 年度実施）以降、すべての募集要項にアドミッションポリシーが掲載されてる。コロナ禍により、令和 4 年度入試から追試験を実施しているが、追試験の条件は令和 6 年度入試以降、感染症の以外の受験者自身の責めに帰することができない理由も含まれるようになった。令和 7 年度入試にはその例として月経随伴症状等の体調不良が含まれている。編入学試験には上記以外の変更は無いため、以下に本科と専攻科の推移について示す。

1.06.1 本科

- ・ 調査書の簡素化

選抜に用いることに無い情報をできる限り記入しないとの高専機構の考えから、令和 4 年度入試より学力選抜志願者は学習の記録のみ記すこととなった。推薦選抜志願者は学習の記録、特別活動の記録、特別活動以外の諸活動の記録及び特徴、第 3 学年の欠席の記録（これは令和 5 年度以降削除）を記入する。

- ・ 福岡会場の廃止

令和 4 年度入試以降、会場は本校のみとなった。学力検査の実施日が 2 月 20 日前後から 10 日前後に早まり、大学入試との関係から会場の確保が困難になったこと、次に示す最寄り地受験が実施されることがその理由である。

- ・ 最寄り地受験

令和 5 年度入試以降、学力検査は出願する高専に関係なく、全国の 51 高専とその他設置している会場のどこでも受験が可能となった。

- ・ WEB 出願

令和 5 年度入試以降、出願サイトで行う「WEB 出願エントリー」と写真票等の必要書類を本校に提出する「出願書類提出」で完了となった。

- ・ 理科と数学の傾斜配点

令和 3 年度入試以降、アドミッションポリシーに

則した選抜を行うため、理科と数学の点数を 1.5 倍した 150 点満点とする

1.06.2 専攻科

- ・ TOEIC スコアの採用

平成 29 年度入試以降、検査科目の英語位については試験は実施せず、TOEIC スコアに基づく換算得点を用いている。

- ・ 調査書の簡素化

令和 5 年度入試より本校から出願する者については調査書における学業、人物、課外活動、生活態度等、所見の欄については記入を要しなくなった。

- ・ 連携教育プログラム

令和 5 年度入試より九州大学との連携教育プログラム（九大工学部・九州沖縄 9 高専連携教育プログラム）が実施されることとなった。

1.07 学生への支援

本校に学ぶ学生の学習・生活両面における支援について、いくつか触れてみたい。

1.07.1 授業料免除、奨学金制度

平成22年度に高等学校等就学支援金制度の導入され、平成26年度から新制度に移行した。現在は、本科1～3年生は、年額23万4,600円を上限に授業料が免除されている。

本校では、平成26年度から令和6年度までの間に延べ5,804人が本制度を利用している。

本科4・5年生及び専攻科生向けの修学支援新制度が令和2年度から始まり、本校では、令和2年度から令和6年度までの間に延べ319人が本制度を利用している。

これら国の制度のほか、国立高等専門学校機構独自の修学支援制度があり、(1) 授業料免除、(2) 入学科免除、(3) 授業料の月割分納がある。

また、高専機構における卓越した学生に対する授業料免除制度があり、本校では(1) 人命救助、重大事故の未然防止等、(2) 学業成績優秀(4年以上に亘り学年末の総合成績が1位)、(3) 全国規模の学会発表優秀・表彰者、(4) 全国高専体育大会等優勝者、(5) 九州沖縄地区及び西日本地区高専体育大会又はこれに準ずる文化的・技術的な大会で3回以上優勝者、(6) 過去1年間のTOEIC試験において、800点以上の得点を得た者の中で最上位者 等に対して授業料免除を実施している。

1.07.2 TOEIC 試験の実施

英語教育の動機づけの一つとして、本校ではTOEIC試験を平成12年度から実施しており、平成26年度から令和6年度までの間、平均して年間78人の受験者数がある。

近年は、大学3年次編入学試験や大学院入試において、英語受験にTOEICのスコアが必要となるケースが増えていることに加え、高専機構全体で推し進めるグローバルエンジニア育成の観点から、令和

6年度から本科1年生全員対して実施する英語評価テストとして英検IBAに代わり、TOEIC Bridgeを導入した。

1.07.3 学生の留学

本校では、長期留学の場合は、一般的には休学して留学することがほとんどである。

留学する理由の大部分は、語学研修であり平成26年度から令和6年度までに、この理由での留学が全体の71.4%を占める。

令和2年1月末から令和5年5月まで続いた新型コロナによる緊急事態により、学生の留学は激減することとなったが、徐々に回復する傾向にある。

1.08 国際交流

本校は、平成16年度末、海外インターンシップ中の学生の海難死亡事故という悲劇に見舞われ、自主的な学生派遣は休止状態となった期間があった。しかし、平成30年8月に「国際交流推進作業部会」が設置され、そこで事故を教訓とした対策を検討したうえで、産業界、社会のグローバル化に対応するために、学生の海外派遣交流を推進することが提言された。その後、国際交流に関しては、企画主事室、国際交流委員会を中心とし、学校全体として対応してきたが、令和6年12月に国際化推進室が新たに設置され、本校の国際化の更なる推進を図ることとなった。

海外機関との協定については、高専機構包括、九州・沖縄地区の9高専包括、久留米高専独自のものがあり、現時点で主に東南アジア諸国の17の機関と協定を結んでいる。うち、9高専包括協定は、今年度中に終了させ、各高専が引き続き交流を希望する機関と個別に協定締結を進めることとなり、本校は国立台北科技大学との個別協定を結ぶ手続きを進めている。

本校における国際交流事業にあたっては、さくらサイエンスプログラム、日本学生支援機構(JASSO)海外留学支援制度、柿原科学技術研究財団の助成金への申請を行い、本校の学生の派遣、および海外からの受入れの支援を行っている。

1.08.1 学生の派遣

学生の派遣再開後、平成30年度は4名の学生が

日本中国文化交流協会大学生訪中団として北京へ、学生交流で5名がマレーシア工科大学へ、1名がクオーストラリア、クイーンズランド工科大学での研修へ渡航した。令和元年度、トビタテ！留学JAPANに採択された学生が1名カナダへ、タイ・カセサート大学での英語研修へ2名、タイ・キングモンクット工科大学との国際交流プログラムへ10名、ホーチミン市民大学での国際共同シンポジウムへ6名派遣されるなど、派遣活動が活発となったが、香港でのデモや新型コロナウイルス感染症による制限により、多くの派遣が中止となった。コロナ禍、国際交流事業の実施が困難となったが、オンライン会議が浸透し、令和4年にはスウェーデンNTI高校ウブサラ校の学生16名と本校の学生18名が放課後にオンラインで交流し、親睦を深めた。コロナ禍が明け、令和5年度からは高専機構の「高専生の海外活動支援事業」の支援も受け、学生派遣が本格的に再開された(表1.08.1)。

1.08.2 学生の受入

本校では主に3年次編入として高専機構から推薦される長期留学生と、数週間から数か月本校の教員の指導のもとで研究活動を行う特別聴講生を受け入れている。令和6年度、長期留学生10名が在学中である。平成26年度から令和6年度までの特別聴講生の受入れは111名で、中でもタイのキングモンクット工科大学ラカバン校からは最多の50名を受け入れてきた(表1.08.2)。

表 1.08.1 海外派遣学生数(R6年度12月1日現在)

年度	本校主催海外研修	他機関主催海外研修	研究発表・共同シンポジウム	計
平成30年度	5	6		11
令和元年度	8	4	7	19
令和4年度	2		6	8
令和5年度	34	4	16	54
令和6年度	6	8		14

1.08.3 教員の交流

教員の国際交流には、国際会議への参加など多様な形態があるが、ここでは在外研究員の派遣実績を表 1.08.3 に、外国人研究員の受入実績を表 1.08.4 にそれぞれ示す。

1.08.4 その他の国際交流事業

令和 4 年度、さくらサイエンスプログラムでスウェーデンの NIT ウプサラ校から学生 3 名と教員 1 名を招聘し、ブリヂストン、安川電機、トヨタ自動車

九州といった福岡県内にある工場見学を中心に、日本の最先端技術を紹介。令和 5 年度は KOSEN Global Camp の開催校となり、シンガポール、マレーシア、タイ、ベトナムから 16 名の学生を迎え、本校他日本の高専生と 5 日間を共に過ごし、水害防止のためのプロジェクトを行った。令和 6 年度はシンガポールテマセク・ポリテックから 26 名の学生と 2 名の教員が 1 日訪問し、本校学生との交流や、衝撃破壊試験実演、ものづくり教育センターでの機械加工実験の授業の見学を行った。

表 1.08.2 特別聴講生受入れ実績

所属校	人数	受入れ担当教員（受入れ学生数）
タイ キングモンクット工科大学ラカバン校	50	黒木祥光(27)，松島宏典(22)，奥山哲也(18)， 池田隆(9)，小田幹雄(7)，田中諒(7)， 村上秀樹(3)，原田豊満(3)，越地尚宏(2)， 松山清(2)，川上雄士(2)，田中大(2)， 富岡寛治(1)，ウリントヤ(1)，堺研一郎(1)， 萩原義徳(1)，山本郁(1)，周致霊(1)，我部篤(1)
タイ カセサート大学	28	
シンガポール ナンヤン・ポリテック	15	
シンガポール テマセク・ポリテック	8	
シンガポール リパブリック・ポリテック	6	
タイ キングモンクット工科大学北バンコク校	3	
フランス トゥールーズ IUT	1	

表 1.08.3 在外研究員派遣実績

所属	氏名	渡航先	期間
一般科目（理科系）	酒井 道宏	サウサンプトン大学（イギリス）	H. 27. 3. 8 ～ H. 28. 3. 7
制御情報工学科	小田 幹雄	ニューヨーク市立大学クイーンズ校（アメリカ合衆国）	H. 28. 5. 27 ～ H. 29. 3. 30
一般科目（文科系）	白井 龍馬	香港大学（香港）、国立高雄餐旅大学（台湾）、ポンティフィシア・コミージャス大学（スペイン）	R. 6. 8. 25 ～ R6. 9. 30

表 1.08.4 外国人研究員受入実績

国名	所属	人数	受入学科	受入期間
タイ	チュラロンコン大学	1	材料工学科	H26. 7. 1～H26. 12. 31
タイ	チュラロンコン大学	1	材料工学科	H27. 8. 1～H27. 12. 31
タイ	チュラロンコン大学	1	材料工学科	H28. 9. 4～H29. 9. 3
シンガポール	ナンヤン・ポリテクニク	1	制御情報工学科	R1. 9. 9～R1. 9. 20
タイ	スラナリー工科大学	1	材料システム工学科	R5. 4. 1～R6. 3. 31

1.09 就職関係

久留米工業高等専門学校内部組織規程第 14 条に基づいてキャリア支援室が設置され（平成 29 年 4 月 1 日）、現在に至っている。卒業後の就職・進学へ向けて全学生のキャリア教育支援を行っている。キャリア支援室は、統括のキャリア支援室長（平成 29 年度～30 年度 越路教授（電気）、平成 31 年度～令和 2 年度 池田教授（電気）、令和 3 年度～現在 梶教授（生化））の他、機械工学科、電気電子工学科、制御情報工学科、生物応用化学科、材料システム工学科それぞれ専任のキャリア支援室長補から構成されており、各クラス担任と協同して各学科毎個別に学生への丁寧なキャリア教育指導が施されている。また、各学科毎に進路指導室（兼資料室）が整備され、学生への個別指導の他、必要な資料を学生に常時提示している。本校ではキャリア支援として具体的には、入学時の卒業後進路説明に始まり、地元就職企業への工場見学、キャリア講演会、工場見学旅行、インターンシップ、就職・進学説明会、大学説明会、企業 OB・OG 講演会、合同企業説明会、就職・進学の個別指導を行っている。

キャリア支援室の前身は平成 13 年に発足した就職担当委員会で、その構成員もほぼ同様であり、就職関連業務のほぼ全てを引継いでいる。各キャリア支援室長補は各科就職主任を兼任しており、就職指導は学科長や 5 年担任をはじめとする学科内の密な連携のもと専門学科単位で実施されている。就職状況に関する情報は、キャリア支援室運営委員会を通して全教員に共有されている。キャリア支援室運営委員会は、キャリア支援室 6 名の他、一般科目教員各 1 名、学生課長の計 9 名から構成されている。また、同委員会を通して各学科の求人及び就職状況の報告、キャリア講演会、合同企業説明会の開催等の審議、各学科での就職支援活動を通しての課題や問題点等の意見交換等が行われている。学校としての方針決定や学校全体にわたる問題点等の把握が迅速に行われると同時に、得られた知見を各学科での支援活動にフィードバックしている。

就職状況に関しては、平成 20 年のリーマンショックからの立ち直り途上の時期（現在は回復）やコロナ過に伴う活動方法の変化等の影響で大学生については大きな影響があったが、本校学生については大学生と比較してその影響は小さく、また最近ではグローバル化、IT 系企業からの求人増加、団塊世代の技術者の退職に伴う人手不足も相まって従前以上に極めて好調な状況である。就職活動の方法については、大学生の就職活動が希望企業に自由にエントリーするいわゆる自由応募が主流であるのに対し、高専では現在に至っても従来型の推薦応募が主流である。これは創立以来 85 年にわたる歴史の中で卒業生が築き上げてきた実績に基づく、企業と本校との信頼関係に立脚するものである。大学生の就職活動が好むと好まざるとに関わらず、人材情報サービスを介しての多くの企業へのエントリーから始まるのに対し、推薦応募の学生は学校推薦を受けた志望企業一社に集中して取り組むことができ、企業研究や志望の動機・入社後の自分の方向性等を十分吟味・整理し試験に臨むことが可能である。そしてその過程において、学生一人一人に対し専任の就職主任（キャリア支援室長補）によるきめ細かな手厚い指導を行っていることが本校の特色である。その甲斐あって、昨今大学卒学生に見られる就職先企業とのミスマッチや早期退職といった問題が本校卒業生についてはほとんど見られない現状である。但し、学生の多様性も増し、就職に関する熱意を感じられないケース、将来の進路をなかなか決めることができないケース、受験指導においてかなり細かな具体的な点まで指導せざるを得ないケースが散見されるようになっていることは気がかりな点である。

実践的技術者に対する企業の採用意欲は高く、企業サイドの高専生に期待する仕事内容も、より広範囲かつ多岐にわたっている。令和 7 年度新卒学生については、ホームページにて 3 月 1 日に求人票を開示することにより実際の就職活動がスタートする。キャリア支援室では、次年度に向けた学生の指導に傾注している現況である。

1.10 卒業生の進路

1.10.1 就職

実践技術者として評価の高い高専卒業生は企業から即戦力としての期待が高く、それは求人倍率にも表れている通りである。バブル景気時に見られた高い倍率からリーマンショックを経て大きく減少はしたが、それでも尚、大学卒、高校卒と比較すると高く安定した職が行えていた。その後、経済も立ち直り就職倍率も上昇する中、令和2年よりコロナ禍に伴う経済活動の停滞や移動制限の影響を受け、オンラインによる就職活動を強いられる等困難な面がありはしたものの、高専卒業生においては実際の就職率に関してはほとんど影響を受けていない。現在ではコロナ禍の影響は見られず、また最近ではグローバル化、IT系企業からの求人増加、団塊世代の技術者の退職に伴う人手不足も相まってバブル期以上に極めて好調な就職状況である。

卒業生の主な就職先は各種製造業、電気・ガス等インフラ産業、情報通信関係の企業等である。地域別でみると20%弱が県内企業で残り80%以上は県外へ就職している。現在のところ、求人企業数約800社、求人倍率約40倍（5学科平均）のもと約100%の就職率を維持している。なお、本校卒業生の進路は他高専と比較して進学希望者の割合が多く、卒業年度により多少の増減はあるものの、例年卒業生のほぼ半数は進学するため求人倍率が非常に高くなっている。さらに専攻科に至っては、本科卒業生が約200名であるのに対し専攻科修了生は約40名であり、本科と同様その半数は進学するため、求人倍率にすると70～100倍近い数値となる（母数が少ないため変動も激しいが）。大学卒と同じ枠内での就職活動となるため、この数値だけでは判断できないが、本科と同様、専攻科においても約100%の就職率を維持している。現在の好況がいつまで続くかは不明であり、時代に即した教育体制のもと、より一層細かく丁寧な指導が必要である。

各学科の詳細な卒業生の進路状況については後述を参照されたい。また、資料編4.02.1～4.02.3に最近10年間の就職に関するデータをまとめている。

1.10.2 進学

本科の進学者数は平成26年度から令和5年度において、最小が64名、最大が94名と変化が大きい。本校では、特に何れかを推奨することは行っていないが、進学者数は令和2年度以降、3年連続で90名を超えており、特に令和4年度は進学者の方が就職者より17名優っている。特に専攻科進学者が増加傾向にあり、令和5年度には42名に至っている。おそらく、専攻科からの大学院進学が良好な成果を挙げている事、また、近年の大学における定員管理の強化により、例えば九州大学が令和7年度編入学試験より一般入試を停止し、推薦入試のみを実施するようになったことが要因と考えられる。

一方、専攻科の進学者は増加傾向にあり、令和元年度は就職者9名に対し、進学者が29名であった。しかし、コロナ禍の影響で遠隔授業が中心となり、大学院に進学する意義が薄れた影響から、進学者の割合が減少し、令和3年度は就職者23名、進学者10名となった。コロナ禍が明けて進学者が徐々に増加し、令和5年度は就職者20名、進学者17名である。

上記のとおり、進学は大学の状況などの環境に影響される傾向がある。令和5年度から実施している九州大学との連携教育プログラム、令和4年度の第2次補正予算によって開始された「成長分野をけん引する大学・高専の機能強化に向けた基金による継続的支援」特に支援2の「高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援」により多くの大学が情報系分野の大学院定員（一部の大学は編入学定員も）を増加させていること、半導体人材育成の加速を契機とする本校と熊本大学工学部との包括協定など、近年様々な動きがあっており、今後、これら

が進学状況を左右すると思われる。

1.11 学生寮

1.11.1 学生寮の変遷

平成 27 年度の寮務主事は石丸良平教授、寮長は 4E 篠崎瑛郷であり、「1. 新 V200 プラン（平成 28 年度寮生 200 名）の継続、2. 6S（整理・整頓・清掃・清潔・作法・躰）の徹底、3. 寮生会活動の推進（寮生会の自主自律）」の年度目標のもとに活動が行われた。舞鶴高専学生寮への視察が行われ、タイからのインターンシップ生 14 名、外国人研究者 1 名、特別聴講生 6 名の受け入れがあった。また、点呼罰について改正がなされ、点呼を通算で 5 回無断欠席した学生に対しては寮務主事室が指定した図書を借りて感想文を提出させることが決定されたが、改善が見られないため、1 週間の停寮処分とすることが決定された。また、平成 28 年 1 月～3 月の間、試験的に、休校日の朝点呼を欠席しても点呼罰を課さないことが決定された。

平成 28 年度の寮務主事は石丸良平教授、寮長は 4A 合屋佑哉であり、「1. 寮生活環境の充実、2. 6S（整理・整頓・清掃・清潔・作法・躰）の徹底、3. 寮生会活動の推進（寮生会の自主自律）」の年度目標のもとに活動が行われた。沖縄高専学生寮および熊本高専学生寮への視察が行われ、シンガポールから特別聴講生 6 名、タイから特別聴講学生 13 名の受け入れがあった。また、休校日に朝点呼を取らないことが決定された。

平成 29 年度の寮務主事は小田幹雄教授、寮長は 4M 中川和であり、「1. 寮生活環境の充実、2. 6S（整理・整頓・清掃・清潔・作法・躰）の徹底、3. 寮生会活動の推進（寮生会の自主自律）」の年度目標のもとに活動が行われた。福井高専学生寮への視察が行われ、タイから特別聴講生 10 名、シンガポールから特別聴講学生 5 名の受け入れがあった。また、寮生保護者会が設立され、5 月 27 日（土）に寮生保護者会が学生寮食堂で開催された。

平成 30 年度の寮務主事は小田幹雄教授、寮長は 4M 國武宙衛であり、「1. 寮生活環境の充実、2. 6S（整理・整頓・清掃・清潔・作法・躰）の徹底、3.

寮生会活動の推進（寮生会の自主自律）」の年度目標のもとに活動が行われた。東京高専学生寮への視察が行われ、シンガポールから特別聴講学生 7 名、タイから特別聴講学生 12 名の受け入れがあった。試験期間中に寮内を巡視し、未施錠の居室を施錠する活動を行った結果、昨年度に比べて未施錠の居室が減少した。

平成 31 年度（令和元年度）の寮務主事は中畠裕之教授、寮長は 4A 宮原伊吹であり、「1. 寮生活環境の充実、2. 6S（整理・整頓・清掃・清潔・作法・躰）の徹底、3. 寮生会活動の推進（寮生会の自主自律）」の年度目標のもとに活動が行われた。奈良高専学生寮への視察が行われ、シンガポールから 8 名の特別聴講学生、タイから特別聴講生 10 名の受け入れがあった。従来のアルバイト願をアルバイト許可願へ変更することが決定された。留学生の入寮に際し、入寮誓約書の保証人欄を空欄（従来は担任教員が署名）とすることが決定された。

令和 2 年度の寮務主事は中畠裕之教授、寮長は 4C 高橋凌雅である。新型コロナウイルスの緊急事態宣言発令を受け、新年度開寮日を 6 月 28 日に延期した（6 月 7 日より家庭での遠隔授業困難な学生のみ特別入寮とした）一方で、夏季休業中は閉寮しなかった。開寮中は寮内でのウイルス感染拡大防止のため、学校のリスク管理対策に準じて自室以外でのマスク着用、手洗い・消毒を徹底するとともに、食事・入浴・点呼時は人数制限等により密集を避ける対応を取った。これに伴い、宿直業務内容を随時変更した。また、例年実施していた他高専学生寮視察や海外特別聴講生受入れを中断し、寮祭等の寮行事を縮小・中止した。

令和 3 年度の寮務主事は辻豊教授、寮長は 4A 才田隼輔であり、「1. 寮生の自主性の育成、2. 人間性の充実、3. 学業の充実、4. 寮生による生活・勉強等のサポート体制を作る、5. 多様性を認め合う共生、6. 行事の活性化（コロナ禍であっても、対策を施したうえでの（可能な限り）通常の生活の実現）」の年度目標のもとに活動が行われた。朝点呼に関する負

担軽減のために Forms を用いて行うことが決定された。また、三密を避ける、マスクの着用等のコロナ対策が寮生に対して周知された。また、新型コロナウイルスのため、テーブルマナー講習会や寮祭でのバーベキューなどの行事が中止された。また、水害時には寮生は男子寮の3階以上に垂直避難することが決定された。

令和4年度の寮務主事は辻豊教授、寮長は4A 今崎幹太であり、「1. 寮生の自主性の育成、2. 学業の充実」の年度目標のもとに活動が行われた。朝点呼は従来の食堂での点呼に変更された。寮生に対して、新型コロナウイルス感染防止に努めるように対策が周知された。宿直可能教員が減少する中、宿直免除職になる役職の改正および宿直免除とする年齢制限の引き上げや次年度以降に週1回の宿直外部委託が決定された。前年度に引き続き、新型コロナウイルスのため、テーブルマナー講習会、寮祭でのバーベキューなどの行事が中止された。閉寮期間中について、1階に居室のある4年生以上の寮生に限り、正当な理由があれば学生寮を利用できることが決定された。さらに、男子寮新棟が改修され、礼拝室や洗濯室が整備され、留学生にも使いやすい環境となった。

令和5年度の寮務主事は田中大教授、寮長は4C 武富康斗己であり、「1. 規律ある共同生活、2. 寮生会役員のリーダーシップ、3. 各種行事の復活・発展」の年度目標のもとに活動が行われた。新型コロナウイルス緊急事態宣言の終結に伴い、寮内の各種行事（他高専学生寮への視察（呉高専）、寮祭でのバーベキュー、餅つき等）が再開された。また、食堂に設置されていたパーティションも撤去された。タイからの外国人研究者1名、シンガポールから特別聴講学生3名の受け入れがあった。寮生への連絡には、従来は食堂設置の掲示板が使用されていたが、寮生用の Teams を作成してこれを利用するように変更された。盗難防止のため、男子寮に防犯カメラが増設された。宿日直マニュアルについて、大幅に修正された。また、外泊管理システムを構築することが決

定された。

令和6年度の寮務主事は田中教授、寮長は4S 久保田孝平であり、「1. 規律ある共同生活、2. 寮生会役員会のリーダーシップ、3. 各種行事の発展」の年度目標のもとに活動が行われた。熊本高専学生寮への視察が行われ、フランスから1名の特別聴講生、タイから2名の特別聴講学生、シンガポールから3名の特別聴講学生の受け入れがあった。水害発生時には、従来は女子寮生も男子寮3階以上に避難することとしていたが、女子寮生は女子寮3階に避難することが決定された。また、閉寮期間中については、留学生を除き、特別な事情がある場合に限り1週間程度の在寮を認めることが決定された。外泊管理システムが導入予定である。

1.11.2 入寮者数の変遷

表 1.11.2 に入寮者数の変遷をまとめる。

表 1.11.2 寮者数の変遷

年度	学生寮定員	寮生数	内、留学生数
2014	240 (30)	177 (29)	留 7 (2)
2015	240 (30)	177 (30)	留 9 (1)
2016	240 (30)	179 (30)	留 11 (1)
2017	240 (30)	178 (30)	留 9 (2)
2018	240 (30)	172 (30)	留 8 (3)
2019	240 (30)	175 (30)	留 8 (3)
2020	240 (30)	196 (30)	留 7 (3)
2021	240 (30)	200 (30)	留 8 (2)
2022	240 (30)	163 (30)	留 7 (1)
2023	240 (30)	192 (30)	留 8 (1)
2024	240 (30)	202 (30)	留 10 (2)

() は女子で内数

1.12 総合情報センター

総合情報センターは平成12年に『Information』、『Communication』、及び『Computing』等に関する業務全体を組織的に運用する目的で設置された。関連する環境や情報を積極的に提供あるいは活用して、本校の情報処理を合理的かつ効率的に実行し本校の教育及び研究活動の支援を行うと同時に事務系業務の合理化を推進している。同センターは上記業務の円滑な遂行のためにハード・ソフト両面からの環境を整備し関連サービスを提供することを主眼とした『運用組織』であり、高度情報化に伴いその役割は年々重みを増している。総合情報センターは、総合情報センター長、総合情報センター長補、情報処理センター長、総合情報センター員で構成され、令和6年度のスタッフ構成は以下の通りである。総合情報センター長：越地尚宏教授（電気電子工学科）、総合情報センター長補：岡本和也准教授（一般文科）：情報処理センター長（兼：総合情報センター長補）：小袋由貴准教授（材料システム工学科）、総合情報センター員：馬場隆男技術専門職員、寺尾慎寿技術専門職員、岡崎朋広技術専門員、諸田亮技術職員、担当事務部：学術情報係、の陣容である。

この10年でセンターを取り巻く社会環境は大きく変わり、ハードウェア的にはPCはもとより、タブレット端末やスマートフォン等の情報端末機器の高度化や普及及びネットワーク環境の高速化や無線環境の整備等が進んだ。ソフトウェア的にはクラウドサービスやSNSそして近年ではAIが社会に浸透し、情報と日常生活が不可分の『高度情報化社会』が実現し、その発展はとどまるところがない。本校においてもこれらの社会情勢を反映し、学内における無線ネットワーク環境の充実に着手し、無線LANアクセスポイントを段階的に拡充／高度化し、現在は学生寮を含む学内のあらゆるところでWi-Fiが利用可能となり、その維持管理もセンターの重要な業務となっている。さらに令和元年末からのコロナ（COVID-19）禍においては、リモートワークやこ

れを支えるコミュニケーションツールが一気に普及し社会の仕組みも大きな変革がなされた。本校においてもMicrosoft Teamsを利用したオンライン授業という今まで経験したことのない環境での教育を行った。この場面でも学内各部署と連携し、センターとしてハード・ソフト両面においてのサポート業務に従事した（Microsoft Teamsは現在も本校業務で重要な役割を担っている）。このような高度情報化への移行に伴い、情報リテラシーの涵養やセキュリティ意識の向上が必要不可欠となっている。新入生ガイダンスの実施や、学内専用HP（下図）による各種情報やセキュリティ対応ソフトの提供、高専機構本部及びKOSEN-CSIRT（平成30年設立の情報セキュリティ対策やインシデント対応を担う組織）と連携しながら、情報交換や各種研修および訓練も含むインシデント対応を行っている。

情報処理センターは平成25年に図書館2階に移転し、L1～L3の3教室に端末PCを常設し本校の情報処理関係の教育の一翼を担っている。授業の多様化に伴い様々な授業でこれらの教室が活用され、時間割のほとんどの時間でこの3教室が使用されている。また図書館一階にヘルプデスクを設置し学生や教職員の情報関係の丁寧なサポート対応を行い学内の円滑な運用の一助となっている。



図 1.12 総合情報センターHP
(学内専用ページ)

1.13 産学民連携テクノセンター

1.13.1 経緯と活動内容

「産学民連携テクノセンター」は、平成 12 年 4 月に発足した「産学民連携推進センター」を母体として、地域企業、行政機関、公設試験研究機関、地域経済団体に向けて本校技術シーズや教育研究資源を活用する拠点として平成 22 年 4 月にセンター棟竣工を機に発足した組織である。

組織内には、「産業支援」、「地域連携」、「人材教育」並びに「知的財産」の各部門を設け、各担当マネージャーを据えて共同研究、受託研究、技術相談等の依頼や技術支援、理科教育支援等の各種連携活動を行っている。

各部門の事業内容は、以下のとおりである。

部門	業務内容
産業支援	・技術相談窓口 ・受託研究・共同研究・受託試験等の産学連携活動 ・各種研究・産業助成 ・高等教育コンソーシアム久留米 ・テクノネット久留米 ・大学・高専・研究機関との連携
地域連携	・フォーラム・講演会・イベント等 ・小中高理科教育及び教育連携 ・GIGA スクール
人材教育	・社会人教育 ・人材育成講座
知的財産	・知的財産 ・各種団体の知的財産支援 ・学内シーズの公表

1.13.2 近年の活動成果

1. イベント出展：イノベーション・ジャパン、NEW 環境展、しんきん合同商談会
2. 地方公共団体等との連携：分別救助隊「ワケル

ンジャー」動画制作、google キャリア講演会

3. 地域教育機関との連携：福岡市科学館「作るを楽しむワークショップ」、福岡よかもんひろば理科実験、GIGA スクール推進のためのプログラミング教室、ワークショップコレクション in 福岡

1.13.3 高専ハカセ塾

「高専ハカセ塾」は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の「ジュニアドクター育成プログラム」の採択事業であり、将来の科学技術イノベーションを牽引する傑出した人材の育成の向けて高い意欲や突出した能力を有する小中学生を発掘するものである。本校は、有明高専および熊本高専との共同で平成 30 年度から令和 4 年度の 5 年間、継続して行った。最終年度の令和 4 年度は、6 月の開講式(図 1.13-1)に始まり、3 月の小・中学生ジュニア学会までに本校では 15 回のイベントを開催した。その中には、各学科で開講する多様経験型プログラムと自分でテーマを決めて研究を進める自主プロジェクト型プログラムがあった。各学科より 1 名ずつ選抜した学生メンターが、教職員とともに受講生をフォローした。さらに、9 月には 3 校の「合同研修～阿蘇山周辺の湧水めぐり～」を実施した。開講式ではおとなしい受講生であったが、ジュニア学会時には堂々とした研究発表を行っており、本事業の意義が感じられた。



図 1.13-1 令和 4 年度高専ハカセ塾開講式

1.14 図書館

専門書から小説まで幅広いジャンルの図書・雑誌約12万冊（開架：約6万冊、書庫：約6万冊）を所蔵し、学生・教職員のみならず、広く一般市民にも開放されており、閲覧及び貸出ができる。

平日9時～20時、土曜日9時～17時に開館しており、利用者の利便性の向上を図っている。



写真 1.14-1 図書館の外観

1階が図書館であり、図書閲覧室などに加えて、玄関ホールに個別学習ブース及び約50人が利用できるグループ学習スペースを設け、個別学習による学習意欲及びグループ学習によるチームワーク力ならびに目標達成度向上へ向けた環境整備を図っている。

また、図書閲覧室内には本校卒業生である乙一氏、安部龍太郎氏（2013年直木賞受賞）の著作等の展示ブースを設けている。また、AVルームも設けられており、CD貸出やDVDの視聴ができる。九州大学連携教育プログラムでの九大デジタルDX予算にてVR機を2台購入し、バーチャルコンテンツの充実も図っている。

2階は情報処理センターとなっており、PC学習室・IT演習室・マルチメディア教室などがあり、情報・マルチメディア関連施設と図書館の融合が図られ、工業高等専門学校という特質を生かした複合施設となっている。



写真 1.14-2 個別学習ブース・グループ学習スペース

図書館ホームページでは、図書館利用案内・開館日・蔵書検索・図書館だより・紀要などの情報を提供している。

「図書館だより」は年1回発行しており、学生や教職員によるお勧め本・エッセイなどを読むことができる。

また、学内専用であるが、電子ジャーナル・データベースの提供をしており、長岡技術科学大学・高専コンソーシアムに加入することにより、多くのデータベースシステムを利用することができ、教育・研究に利用されている。



図書館からのお知らせ						
2024.07.01	7月1日(月)は大雨のため17時で臨時閉館します。					
2024.02.28	紀要第39巻を公開いたしました。					
2023.12.06	図書館だより第98号を発行しました。					

開館カレンダー						
2024年 11月						
日	月	火	水	木	金	土
27	28	29	30	31	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
9時～20時 9時～17時 休館						

図 1.14-3 図書館ホームページ

<https://www.kurume-nct.ac.jp/LIB/>

1.15 学生相談室

学生相談室は、主に学生のメンタルヘルスをサポートする部署である。開設は平成 12(2000)年度で、2024 年度末で 20 年を経過したことになる。学生相談室の構成は、直近では室長 1 名、室長補 2 名、看護師 1 名(非常勤看護師 1 名)、外部カウンセラー 6 名(内スーパーバイザー(SV)1 名)、外部スクールソーシャルワーカー(SSW)1 名、精神科医 1 名となっている。

カウンセラーは、4 名/週体制で毎日、精神科医は 1 日/月、SSW は 1 日/週といった形になっている。また SV が隔週 1 回のペースで勤務している。ここ 10 年間では、笈木、福田かおる、中尾が相談室長を務めた。

平成 31 年度には、学生支援のための学生指導支援連絡会が発足し、学生相談室も参画しながら、合理的配慮、教育的支援の在り方等について情報の共有等を行っている。

学生のメンタルヘルスに関しては、高専機構も注力しており、財政面の支援のみならず、具体的事例集共有や研修等を行っている。また、機構より学校適応感尺度調査(平成 30 年 3 月)というガイドラインが全国の高専に発布され、本校で議論を重ねた上で全学生に尺度調査アンケートを実施し、スクリーニングに大いに貢献している。

学生の発達課題に関する知識や、支援の在り方等については、社会的認知が進み、教員の研鑽もあって、学生、保護者、教職員のカウンセリング受診に対する敷居も低くなっていると思われる。カウンセリングの件数は、近年のべ 400 件超えとなり、この水準が今後も続くものと思われる。

SSW は、学生の経済面での支援の位置づけで、学生主事室管轄であったが、令和 4 年度より学生相談室管轄とした。SSW の認知も学内で広がり、教員、保護者から積極的に相談等が行われている。

今後も学生相談室のより一層の充実が図られ、学生、教職員へのサポートが期待される。

1.16 事務部

平成16年4月より独立行政法人国立高等専門学校機構を一つの法人として、全国55校の国立高等専門学校を設置・運営する大規模な高等教育機関となり、各国立高等専門学校は国立高等専門学校機構本部のもと連携しつつ事業を行うこととなった。

法人化後当初は、法人化前の3課3専門職11係体制を踏襲していたが、平成17年5月に国立高等専門学校機構本部より示された「高等専門学校の事務組織の在り方について」に基づき、平成19年4月から庶務課と会計課を総務課に統合、学生課と合わせて2課体制とし、人員削減により効率的な管理運営体制の構築に対応するため庶務課と会計課の統合に伴う総務課長の業務範囲増大への対応として総務課に総務担当と財務担当の課長補佐を、学生サービス業務を充実させるため学生課に課長補佐を配置するとともに庶務課に配置されていた図書係を学生課に再配置した。また、事務情報処理室を廃止し、事務情報処理業務及び研究協力や地域貢献などの業務を担当する部署として企画情報係を新設、会計課総務係と出納係を統合し、2課3課長補佐11係体制とした。

平成30年に事務組織の見直しを行い、研究及び産学民連携の強化を推進する事を目的に企画情報係を研究推進係に、図書及び情報に関する事務の一本化を行うため図書係を学術情報係に改編し、学生課に専攻科の業務に特化した専攻科係を新設した。令和3年には、総務課に研究推進および広報を統括する研究推進・広報担当補佐を配置し、専攻科の業務を教務係に集約したことに伴い、専攻科係を廃止した。

業務においては法人化後、スケールメリットを生かし、各校で行っていた「人事給与業務」、「共済業務」、「支払業務」、「収納業務」、「旅費業務」を機構本部にて一元化処理を行い、事務の効率化を推進し

ている。また、一元的な共通システムとして財務会計システム、人事給与システム、旅費システム、学納金収納システムを構築し業務の効率化・合理化が図られた。

学生課に設置していた実習係は、平成18年7月に校長の諮問により「組織化に関する検討WG」が設置され、(1)技術者教育の中核をなす学生実験、実習の組織的かつ効率的な遂行、(2)教育研究支援の改善、(3)技術職員の職場環境・待遇の改善、(4)地域連携の拡充に対する技術的な側面からの貢献を基本方針として組織化の検討を行い、平成20年5月に教育研究支援室が設置され、教育研究支援室に組み込まれ、技術職員全員を配置することになった。なお、教育研究支援室は平成29年度に教育研究支援センターに改名した。

表 1.16-1 に事務組織の変遷と人員枠の一覧を示す。

表 1.16-1 事務組織の変遷と人員枠一覧

現員は年度当初人員

年度 内容	2 6	2 7	2 8	2 9	3 0	3 1 (R 1)	R 2	R 3	R 4	R 5
事務	事務部長 総務課 課長補佐 (総務担当)	同 左	事務部長 総務課 課長補佐 (総務担当)	事務部長 総務課 課長補佐 (総務担当)	事務部長 総務課 課長補佐 (総務担当)	事務部長 総務課 課長補佐 (総務担当)	同 左	事務部長 総務課 課長補佐 (総務担当) 課長補佐 (研究推進・広報)	事務部長 総務課 課長補佐 (総務担当) 課長補佐 (研究推進・広報)	同 左
務	- 総務係 - 人事・労務係 - 企画情報係		- 総務係 - 人事・労務係 - 企画情報係	- 総務係 - 人事・労務係 - 企画情報係	- 総務係 - 人事・労務係 - 研究推進係	- 総務係 - 人事・労務係 - 研究推進係		- 総務係 - 人事・労務係 - 研究推進係	- 総務係 - 人事・労務係 - 研究推進係	
組	課長補佐 (財務担当)		課長補佐 (財務担当)	課長補佐 (財務担当)	課長補佐 (財務担当)	課長補佐 (財務担当)		課長補佐 (財務担当)	課長補佐 (財務担当)	
織	- 財務係 - 用度係 - 施設係		- 財務係 - 用度係 - 施設係	- 財務係 - 用度係 - 施設係	- 財務係 - 用度係 - 施設係	- 財務係 - 用度係 - 施設係 - 専門職員(施設担当)		- 財務係 - 用度係 - 施設係	- 財務係 - 用度係 - 施設係	
	学生課 課長補佐		学生課 課長補佐	学生課 課長補佐	学生課 課長補佐	学生課 課長補佐(学務) 専門員(入試)		学生課 課長補佐(学務) 課長補佐(入試)	学生課 課長補佐(学務)	
	- 専門職員 - 専門職員 - 教務係 - 学生生活支援係 - 寮生活支援係 - 図書係		- 専門職員 - 教務係 - 学生生活支援係 - 寮生活支援係 - 図書係	- 教務係 - 学生生活支援係 - 寮生活支援係 - 図書係	- 教務係 - 専攻科係 - 学生生活支援係 - 寮生活支援係 - 学術情報係	- 教務係 - 専攻科係 - 学生生活支援係 - 寮生活支援係 - 学術情報係		- 教務係 - 学生生活支援係 - 寮生活支援係 - 学術情報係	- 教務係 - 学生生活支援係 - 寮生活支援係 - 学術情報係	
	教育研究支援室 室長補佐(技術長) 副技術長		教育研究支援室 室長補佐(技術長) 副技術長	教育研究支援センター 技術長 副技術長	教育研究支援センター 技術長 副技術長	教育研究支援センター 技術長 副技術長		教育研究支援センター 技術長 副技術長	教育研究支援センター 技術長 副技術長	
	- 第一技術グループ - 第二技術グループ - 第三技術グループ		- 第一技術グループ - 第二技術グループ - 第三技術グループ	- 第一技術グループ - 第二技術グループ - 第三技術グループ	- 第一技術グループ - 第二技術グループ - 第三技術グループ	- 第一技術グループ - 第二技術グループ - 第三技術グループ		- 第一技術グループ - 第二技術グループ - 第三技術グループ	- 第一技術グループ - 第二技術グループ - 第三技術グループ	
人員枠	4 5	4 5	4 5	4 5	4 5	4 5	4 5	4 5	4 5	4 5
削 減	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
現 員	4 5	4 5	4 5	4 4	4 3	4 5	4 5	4 5	4 3	4 6

1.17 教育研究支援センター

1.17.1 概略

久留米工業高等専門学校教育研究支援センターは、平成 20 (2018)年に「久留米工業高等専門学校教育研究支援室組織規則」を制定し、平成 21 (2019)年に発足した。発足から 10 年目の節目に教育研究支援室から教育研究支援センターと名称変更した。教育研究支援センターは、教育研究支援センター長の教員、技術長、2 名の副技術長、3 名のグループ長、グループ構成員から成る学科に既存しない独立した組織である。

1.17.2 グループ構成

(1) 第一技術グループ

機械及び物理系を中心に活動

構成員合計 7 名

(2) 第二技術グループ

電気電子及び制御情報系を中心に活動

構成員合計 3 名

(3) 第三技術グループ

物質及び化学系を中心に活動

構成員合計 5 名

1.17.3 業務内容

- (1) 学生の実験、実習及び卒業研究等の技術支援
- (2) 教員の教育研究活動の技術支援
- (3) 地域の産学民連携活動等の技術支援
- (4) 本校のネットワーク管理等の技術支援
- (5) 技術の習得、継承、保存及び研修等に関する業務
- (6) 実験実習機器・設備等の保守・管理及び災害防止に関する業務
- (7) その他支援センターの目的達成及び支援要請のために必要な事項に関する業務

1.17.4 人事の推移

教育研究支援センターの歴代のセンター及び技術長を表 1.17-1 に示す。また、10 年間の技術

職員の人事の推移を表 1.17-2 に示す。

表 1.17-1 歴代のセンター長・技術長

センター長		技術長	
2009 年～	馬越幹男	2009 年～	古賀渉
2014 年～	和泉直志	2014 年～	権藤豊彦
2017 年～	辻 豊	2015 年～	吉富俊之
2019 年～	江崎昇二	2016 年～	黒川秀明
2023 年～	川上雄士	2017 年～	田中宗雄
		2022 年～	富永洋一

表 1.17-2 技術職員の人事推移

着任		退職・転出	
2014 年	芦中辰也	2014 年	田中義規
2016 年	岡崎朋広	2015 年	吉富俊之
	吉利用之		南条潔
	那須駿平		佐藤栄
	今泉宏啓	2016 年	黒川秀明
2017 年	満武翔太	2017 年	芦中辰也
2018 年	高橋健一	2019 年	高橋健一
2020 年	田中準一	2020 年	吉武靖生
	古賀裕一	2021 年	那須駿平
2023 年	諸田亮	2024 年	屋並陽仁

1.17.5 最近 10 年間おける活動

教育研究支援センターでは、通常業務の学生の実験実習以外にも様々な活動を行っている。

(1) 第 12 回高専技術研究発表会 in 久留米

令和 3 年 (2022 年) に全国の高専技術職員の技術的業務や教育研究支援活動並び研究活動について発表及び意見交換を行った。新型コロナウイルスの影響により初のオンライン開催となった。

(2) ヘルプデスクの設置

令和 5(2023)年 1 月から学内のネットワーク接続及び校内共有ソフトウェア使用に関するトラブル処理のサポートとして、ヘルプデスクを設置。

(3)スキルマトリックスの実施

技術職員の技術の見える化を実施し、学内の教職員に周知している。また、同じ作業は二人以上習得するように技術伝承を実施している。

(4)業務依頼書の簡素化

ペーパーレスや電子印鑑の観点から紙媒体から Forms 入力に変更し、業務依頼書の作成やデータ収集の簡素化を実施した。

(5)高専機構主催の研修

高専機構主催の研修会に積極的な参加をしている。(写真 1.17-1)

- ①平成 28 (2016)年度 三機関連携グローバル SD (マレーシア・ペナン) 研修
- ②平成 28 (2016) 年度 三菱重工業株式会社「技術向上研修」

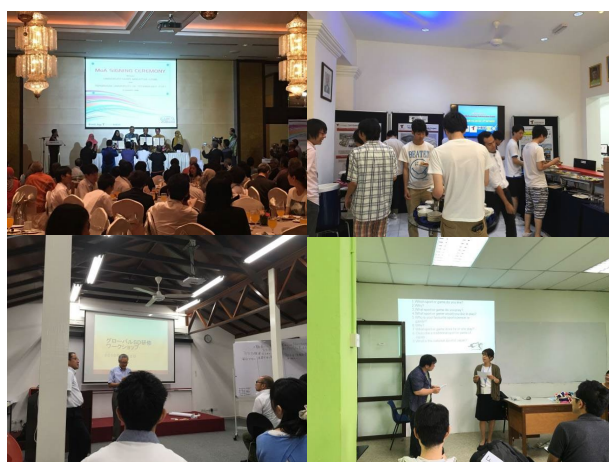


写真 1.17-1. グローバル SD 研修風景

(6)社会人向け公開講座社会人向け講座



写真 1.17-2. 社会人向け講座風景

JGMA ギャカレッジマスターコース基礎実習・ゴム加工技術者人材育成講座・仕上げ作業実技講習会実施している (2013~2017 年)。(写真 1.17-2)

(7)小中学生向け公開講座等

小中学生の理科離れを防ぐと共に久留米高専の PR 活動として公開講座を毎年実施している。10 年間で実施したテーマは以下のとおりである。(写真 1.17-3)

- ①「身の回りのエレクトロニクスーゲルマニウムラジオを作ろう」(2016・2017 年)
- ②「ミクロの世界を見てみよう」(2016・2017 年)
- ③「生体センシング入門 心電計の製作と心拍の観測」(2020~2022 年)
- ④「電子工作Xレジン手芸 ワイヤレス充電で光る置物工作」(2021~2024 年)
- ⑤「IoT 家電の製作 スマート照明を作ろう」(2022 年)
- ⑥「Wi-Fi ルータでネットワークを学ぼう」(2023 年)
- ⑦「(初心者向け) マインクラフトでプログラミングを学ぼう！」(2024 年)



写真 1.17-3. 小中学生公開講座風景

(8)出前公開講座

産学民テクノセンターを通して、外部から公開講座の依頼があり実施した。公開講座の一覧は以下のとおりである。(写真 1.17-4)

- ①「福岡市科学館開館半年前イベント 天神にミニ科学館がやって来る」(2017 年)
- ②「親子で学ぼう科学教室」(2017 年)

③「ワークショップコレクション in 福岡」

(2018・2022・2023 年)

④「34 回 I S T S 福岡・久留米大会キックオフイベント めくるめく宇宙博」(2022 年)

⑤「福岡よかもんひろば理科実験」(2022 年)

⑥「夏休み体験イベント(化学ワークショップ)」(2024 年)



写真 1.17-4.出前公開講座風景

(9)学生向け公開講座

他学科の実験実習を体験したい学生や、より深く学びたい学生を集め「実践回路講習」や「機械加工技能講習」を実施している(2019 年~)。(写真 1.17-5)



写真 1.17-5. 学生向け公開講座風景

(10)学生の資格取得支援

久留米工業高等専門学校ものづくりセンターでは、旋盤の台数が他高専より多いため、希望者だけではなく、旋盤の技能検定取得の支援を実施している(2018 年~)。

(11)外部資金獲得

科学研究費助成事業 奨励研究

①研究課題：遠隔制御を用いて安全性を高めた熱実験観測システム(シャルルの実験)の構築(2014 年)

課題番号：26914005 採択金額：600 千円

②研究課題：実験への意識を改革して実践的技術力を養う荷物搬送ロボットの設計・試作(2016 年)

課題番号：16H00362 採択金額：300 千円

③研究課題：バーチャルリアリティ(VR)を用いた铸造体験教材の開発(2018 年)

課題番号：18H00203 採択金額：510 千円

④研究課題：好奇心と創造性に画像処理で応えるタフで実用的な荷物搬送ロボットの設計・試作(2017 年)

課題番号：17H00356 採択金額：510 千円

⑤研究課題：ウィルス感染してその脅威を学ぶ最恐のセキュリティ教育実践用ネットワークの構築(2018 年)

課題番号：18H00179 採択金額：460 千円

⑥研究課題：VR 動画とヒヤリハット報告を用いた安全管理手法の構築(2019 年)

課題番号：19H00268 採択金額：540 千円

⑦研究課題：IoT を最大限活用した、学生のための全国横断仮想スマートグリッド実験システムの構築(2019 年)

課題番号：19H00219 採択金額：540 千円

⑧研究課題：VR 動画とアイトラッキングを用いた安全教育の開発とマルチスパン評価(2022 年)

課題番号：21H04103 採択金額：470 千円

(12)共同研究・開発

①みやま市長田地区鉱泉調査の共同研究(2013~2014 年)

②工学教育用実験装置の研究(2017 年)

③電氣的手法及びテラ Hz 分光によるゴムコンパウンドの評価に関する研究(2014~2017 年)

④「アルコール自動化設備導入による試作・検討」
(2022～2023 年)

⑤「田中久重製作の蒸気機関車の模型の復元」
(2024 年)

(13) 学会発表

①日本機械学会 九州支部大分講演会
「マグネシウム合金 AZ31 におけるフレッチ
ング摩耗に関する研究」(2014 年)

②日本ゴム協会 第 27 回エラストマー討論会
「農産廃棄物由来の天然フィラーを配合した
エラストマーの開発Ⅱ」(2015 年)

③日本鑄造工学会 第 167 回全国講演大会
「鉄材料のアブレスブ摩耗特性に及ぼす炭化
物の影響」(2015 年)

④日本ゴム協会 第 27 回ゴム技術研究事例発表
会
「ゴム混練りの 1 考察 (配合剤のプレミックス
の効果)」(2016 年)

⑤日本鑄造工学会九州支部・中国四国支部合同研
究会
「振動鑄型装置を用いた Al 合金の結晶粒微細
化」(2017 年)

⑥第 71 回日本鑄造工学会 九州支部講演大会
「Al-2%Cu 合金の結晶粒微細化に及ぼす鑄型
振動の影響」(2018 年)

⑦The 73rd World Foundry Congress「GRAIN
REFINEMENT OF Al-2%Cu ALLOY USIN
G BY VIBRATING MOLD」(2018年)

⑧日本ゴム協会 2019 年年次大会
「混練条件の異なるゴム材料に関する水素特
性評価(2019 年)

⑨生理学技術研究会報告第 16 回奨励研究採択課
題技術シンポジウム
「VR 動画とヒヤリハット報告を用いた安全教
育管理手法の構築」(2020 年)

⑩日本工学教育協会第 69 回年次大会

「エンジニアと協業する工業デザイナー教育
の実践と評価プロトタイピングを用いたデザ
インエンジニア教育の提案」(2021 年)

(14) 表彰

①国立高等専門学校職員表彰 理事長賞
「技能検定を利用した技術職員の能力向上と
産学連携への取り組み」黒川 秀明(2013 年)

②日本鑄造工学会九州支部総会より技能功労賞
の表彰 南條 潔(2020 年)

③福岡県職業能力開発協会より福岡県職業能力
開発協会会長賞の受賞 吉利 用之 (2023 年)

(15) 博士号取得

技術職員の専門性を高めるため、博士号取得を
積極的に取り組んでいる。

①振動鑄型を用いたアルミニウム合金の結晶粒
微細化に関する基礎的研究
吉武 靖生(2020 年)

②硫黄加硫ゴムコンパウンドの混練過程と水素
特性の相関に関する研究
神野 拓也(2023 年)

(16) 起業家工房

令和 5(2023)年度の事業として起業家工房を立
ち上げ、起業家育成支援として教育研究支援セ
ンター 技術職員も学生教育支援を実施して
いる。

1.18 公開講座

年度	講座名	対象	参加人数	受講料
2 6	仕上げ作業実技講習会	社会人	6 名	13,400
2 6	3D-CAD 基礎講座	社会人	1 4 名	7,400
2 6	3D-CAD/CAE 公開講座	社会人	6 名	7,400
2 6	3D-CAD 公差設計基礎講座	社会人	2 0 名	6,400
2 6	エレクトロニクスサマースクール	中学生	8 名	無料
2 6	あなたも一日サイエンティスト	中学生	5 名	無料
2 6	ソーラーカーを作ろう！	中学生	2 0 名	無料
2 6	金属を溶かして青銅鏡を作製してみよう	中学生	2 0 名	無料
2 6	化学への招待ー楽しい生物・化学教室ー	小・中学生	3 8 名	無料
2 6	「いっしょに、作ってみよう」 ---ラジオを組み立てよう---	小学生 (保護者同伴)	1 1 名	無料
2 7	仕上げ作業実技講習会	社会人	7 名	13,400
2 7	3D-CAD 基礎講座	社会人	1 9 名	7,400
2 7	3D-CAD/CAE 公開講座	社会人	9 名	7,400
2 7	3D-CAD 公差設計基礎講座	社会人	9 名	6,400
2 7	あなたも一日サイエンティスト	中学生	1 3 名	無料
2 7	ソーラーカーを作ろう！	中学生	3 1 名	無料
2 7	古代青銅鏡を作製してみよう	中学生	2 0 名	無料
2 7	化学への招待～楽しい生物・化学教室～	小・中学生	4 7 名	無料
2 7	サマーエレクトロニクススクール	中学生	3 3 名	無料
2 7	「いっしょに、作ってみよう」--ラジオを組み立てよう--	小学生 (保護者同伴)	1 2 名	無料
2 8	仕上げ作業実技講習会	社会人	6 名	13,400
2 8	3D-CAD 基礎講座	社会人	9 名	7,400
2 8	3D-CAD/CAE 公開講座	社会人	8 名	7,400
2 8	公差設計基礎講座	社会人	2 0 名	6,400
2 8	あなたも一日サイエンティスト	中学生	1 4 名	無料
2 8	ソーラーカーを作ろう！	中学生	2 5 名	無料

28	金属を溶かして古代青銅鏡を作製してみよう	中学生	14名	無料
28	化学への招待～楽しい生物・化学教室～	小・中学生	17名	無料
28	「身の回りのエレクトロニクス」 -ゲルマニウムラジオを作ろう-	小・中学生	20名	無料
28	ミクロの世界を見てみよう	小学生	28名	無料
28	サマーエレクトロニクススクール	中学生	29名	無料
28	「いっしょに、作ってみよう」 --ラジオを組み立てよう--	小学生 (保護者同伴)	12名	無料
29	仕上げ作業実技講習会	社会人	4名	13,400
29	3D-CAD 基礎講座	社会人	5名	6,400
29	3D-CAD/CAE 公開講座	社会人	7名	6,400
29	公差設計基礎講座	社会人	6名	5,400
29	「身の回りのエレクトロニクス」 -ゲルマニウムラジオを作ろう-	小・中学生	20名	無料
29	ソーラーカーを作ろう！	中学生	31名	無料
29	あなたも一日サイエンティスト	中学生	19名	無料
29	化学への招待～楽しい生物・化学教室～	小・中学生	20名	無料
29	ミクロの世界を見てみよう	小学生	24名	無料
29	青銅鏡を作製しよう！	中学生	20名	無料
29	エレクトロニクスサマースクール	中学生	20名	無料
29	「いっしょに、作ってみよう」 --ラジオを組み立てよう--	小学生 (保護者同伴)	12名	無料
30	3D-CAD 基礎講座	社会人	17名	6,400
30	化学への招待～楽しい生物・化学教室～	小・中学生	36名	無料
30	青銅鏡を作製しよう！	中学生	10名	無料
30	ソーラーカーを作ろう！	中学生	23名	無料
30	あなたも一日サイエンティスト	中学生	19名	無料
30	エレクトロニクススクール	中学生	20名	無料
1	3D-CAD 基礎講座	社会人	18名	6,400
1	3D-CAD/CAE (材料力学)講座	社会人	8名	6,400
1	3D-CAD/CAE(熱流体)公開講座	社会人	1名	6,400
1	化学への招待 ー楽しい生物・化学教室ー	小・中学生	25名	無料

1	青銅鏡を作製しよう！	中学生	13名	無料
1	ソーラーカーを作ろう！	中学生	15名	無料
1	IchigoJamを使ったIoT入門	中学生	8名	無料
1	あなたも一日サイエンティスト（数学講座）	中学生	19名	無料
2	生体センシング入門 心電計の製作と心拍の観測	中学生	6名	無料
2	エレクトロニクススクール ライトレースカーを作ろう	中学生	20名	無料
3	金属アクセサリを作製しよう！	中学生	24名	無料
3	あなたも一日サイエンティスト（数学講座）	中学生	32名	無料
3	心電計の製作と実験	中学生	6名	無料
3	エレクトロニクススクール ライトレースカーを作ろう	中学生	18名	無料
4	3D-CAD 基礎講座	社会人	14名	7,400
4	3D-CAD/CAE（材料力学）講座	社会人	7名	6,400
4	3D-CAD/CAE(熱流体)講座	社会人	3名	6,400
4	金属アクセサリを作製しよう！	中学生	23名	無料
4	化学への招待 -楽しい生物・化学教室-	小・中学生	23名	無料
4	ソーラーカーを作ろう！	中学生	11名	無料
4	高専 AI デバイスを使った人工知能入門	中学生	9名	無料
4	エレクトロニクススクール ライトレースカーを作ろう	中学生	18名	無料
4	あなたも一日サイエンティスト（数学講座）	中学生	34名	無料
4	電子工作Xレジン手芸 ワイヤレス充電で光る置物工作	小・中学生	36名	無料
4	IoT 家電の製作 スマート照明を作ろう	中学生	12名	無料
5	3D-CAD 基礎講座	社会人	9名	7,400
5	3D-CAD/CAE（材料力学）講座	社会人	3名	6,400
5	3D-CAD/CAE(熱流体)講座	社会人	3名	6,400
5	電子工作Xレジン手芸 ワイヤレス充電で光る置物工作	小・中学生	30名	無料
5	金属アクセサリを作製しよう！	中学生	23名	無料
5	ソーラーカーを作ろう！	中学生	14名	無料
5	Wi-Fi ルーターでネットワークを学ぼう	中学生	8名	無料

5	エレクトロニクススクール ライトレースカーを作ろう	中学生	17名	無料
5	高専 AI デバイスを使った人工知能入門	中学生	9名	無料
5	あなたも一日サイエンティスト（数学講座）	中学生	19名	無料

1.19 テクノネット久留米

「テクノネット久留米」は、その前身である「久留米高専産学民連携推進協力会」を母体に、平成 24 年 10 月に設立された技術支援組織である。

福岡県及び佐賀県における産業の更なる発展や地域の人材育成などを目指してきた。

1. 主な事業内容

令和 6 年度における事業計画内容を以下に示す。

- (1) セミナー・講演会の開催
- (2) 学生インターンシップ・学生の工場見学への支援
- (3) 各種学生支援の実施
- (4) 久留米高専ラボツアー
- (5) 会員企業等の施設見学
- (6) 会員紹介ブックの作成
- (7) 会員企業による企業説明会の開催
- (8) 久留米高専の研究・開発シーズの育成奨励

2. 10 年間（平成 26 年度～令和 5 年度）における新規事業・変更内容

(1) 会員紹介ブックの作成

平成 26 年度より、久留米高専在校生及び同窓会に対して、会員企業等の業務内容・会社概要を掲載した冊子「テクノネット久留米会員紹介ブック」を作成することとした。地元就職を希望する学生及び同窓会を通じた Uターン希望卒業生に対して情報提供を行うとともに会員相互の交流促進と連携を図り、さらに企業 PR の一助となることを目的とする。

令和 4 年度より経費削減の観点から、HP を新たに設けて電子データとして提供している。

(2) 会員企業による「テクノネット久留米企業説明会」の開催(写真 1.19)

久留米高専学生に対して地元企業を周知させ、また今後の進路選択の一助ともなることを目的に平

成 28 年度より本事業を開始した。同年度は参加企業数 11 社、参加学生数 28 名にて、会員企業によるプレゼンテーション並びに企業ブースによる個々の説明型式で専攻科棟 2 室にて行った。参加希望企業数の増加によりウェブホールでの開催を経たが、令和 5 年度は、参加企業数 36 社、参加学生数 106 名（第二体育館にて開催）であったため、令和 6 年度はより広い第一体育館での開催を予定している。会員企業からも好評であり、開催時期や説明時間等を適宜変更しながら継続している。



写真 1.19 テクノネット久留米企業説明会
(令和 5 年度)

(3) テクノネット久留米図書寄贈事業「テクノネット久留米文庫」の開設

久留米高専教育研究活動支援の一環として、平成 28 年度より同文庫を開設した。学生に図書の購入希望を募り、毎年度約 30 冊ずつ寄贈されている。令和 6 年 6 月現在で 224 冊が配架されている。

(4) 会員企業対象地域の拡大

本会は、主に福岡県・佐賀県地域の企業を会員の対象としてきたが、近年の他地域企業からの入会希望があること、高専の技術振興が全国に展開されネットワーク化していることに鑑み、令和 5 年度より年会費の差別化を条件に地域企業以外も会員の対象とすることとした。

1.20 地域の教育機関との連携

産学民連携テクノセンターが主体となる地域の教育機関との連携内容の主なものを以下に示す。

1. 高等教育コンソーシアム久留米

加盟する大学等の連携により互いの教育・研究の充実・発展を図るとともに、住民や産業界等の地域社会や行政との緊密な連携の下、地域の教育・文化の向上・発展に貢献し、併せて活力ある地域づくりに寄与することを目的とする。

現在、久留米高専を含む4高等教育機関と久留米市が緊密に連携を図り、地域課題解決のために以下の4専門部会により運用を行っている。

- (1) 高等教育連携：単位互換授業や共同講義などの運営に関すること
- (2) 地域支援／小中高連携：ボランティアをはじめとした地域支援活動、初等中等教育への支援やイベント開催に関すること
- (3) 広報交流：活動内容の広報や学校間の学生交流活動の支援に関すること
- (4) 学生支援：学生の就労および就労後支援、教育の機会均等に関連した活動に関すること

連携事業として、令和5年度開催「久留米市内4大学連携による共同講義」、令和5年度開催「青少年のためのサイエンスモール in くるめ」等が挙げられる。

2. 市民公開講座

1. のコンソーシアム事業の一環である連携プログラムとして、共同講義、市民に求められる生涯学習講座および社会人を対象とした資格取得、実務支援講習会を毎年度継続的に開催している。共同講義は、各校より選抜された講師によりオムニバス形式での開催である。

さらに、加盟校の特色を生かした「理科教育支援」や「出前授業」等の実施や、地域課題の教育テーマ化やFD／SD合同講習会等の実施に向けた研究を実施

施している。

3. 講習会・セミナー

地域教育機関との連携における講習会・セミナーは、依頼を受けて適宜実施している。また、ものづくり支援活動として、各学科・教育研究支援センター担当で毎年公開講座を開催している。

令和5年度に開催した個別依頼の事業例を以下に示す。

- (1) 「えーるぴあ親子科学教室」(令和5年度、久留米市生涯学習センター)：スライム作製を通して化学反応のメカニズムについて学んだ。
- (2) 「GIGA スクール推進のためのプログラミング教室」(令和5年度、久留米市教育委員会)：自動走行できるロボット「Smart Cutebot」を用いて、黒い線の上を自動走行するプログラムを実装させる実習を行った。
- (3) 「ワークショップコレクション in 福岡」(令和5年度、NPO 法人 CANVAS、株式会社グッデイ)：オリジナルスーパーボールとカラフルジェリーボールの作製実習を行った。
- (4) 「久留米市児童センターバスの旅」(令和5年度、久留米市児童センター)：「色」をテーマとして、野菜の色の変化を観察したり、カラービーズ作製を行ったりした。
- (5) 「福岡よかもんひろば理科実験」(令和5年度、福岡よかもんひろば)：久留米市出身の発明家田中久重が完成させ、久留米高専で復元した蒸気機関車の展示と試運転を行った。

4. 本校独自の教育連携

コンソーシアムでの連携活動の他、本校ではJST主催「国際青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプログラム)」による支援を受けたKOSEN Global Campや、日本・アジア青少年サイエンス交流事業の実施、STEAM強化事業による、福井高専や鹿児島高専への出前公開講座などを実施している。

1.21.01 高専フォーラム

「九州沖縄地区高専フォーラム」は、当時本高専工業化学科教授であった鳥井昭美名誉教授が、九州沖縄地区高専の教育・研究の活性化、高専と地域との連携、高専教員間の交流を目的に 1991（平成 3）年 11 月に創設されたものである。第 1 回から第 3 回は本校で開催し、その後は九州沖縄地区の高専による輪番制で継続してきた。

第 27 回九州沖縄地区高専フォーラムは、平成 29 年 12 月 9 日（土）久留米高専主催で日本化学会九州支部共催のもと開催された。久留米シティプラザで「地方創生に果たす高専の役割と課題」をテーマに、地元の 3 企業による高い技術の紹介と経営の視点からの講演、久留米市による行政の立場からみた地域企業の歴史的背景や優位性等に関する講演、ならびに久留米高専による産学官連携の取り組みの現状と今後の戦略に関する講演が行われた。その後、高専関係者、企業関係者、学生等約 70 名の聴衆の下、高専の役割と課題について地方創生に関する各立場からの意見交換、討論が行われた。



写真 1.21.01-1 パネルディスカッションの様子

また、地方創生のためには高専卒業生が地域で活躍してほしいとの思いから、九州沖縄地区企業 34 社についてポスター紹介と、冊子「企業が求める高専卒業生の人材像」第 2 版への掲載を行った。この

冊子は、第 26 回から作成しているが、九州沖縄地区の高専に配布し、就職を控えた学生に活用してもらっている。



写真 1.21.01-2 ポスター発表の様子

さらに、高専学生による 56 件の研究をポスターで発表した。本企画は前回の久留米高専主催である第 19 回から開始したものであり、学生の熱心な発表に対し、参加者との熱い議論が展開されていた。同会場では、九大総理工学府、長岡・豊橋技科大によるポスター紹介も行われた。引き続き実施された学生交流会では、これら 3 大学による学校紹介と学生間の情報交換、交流が和気あいあいとした雰囲気で行われ、互いの親交を深めていた。

以上、第 27 回は地方創生を掲げたイベントを企画したが、参加者は、高専、企業、大学、久留米市等の各方面から 178 名で、本テーマに向けた各産官学からの取り組みや意見を直接聞くことができ盛会裏に終了した。

本フォーラムは、令和 6 年度（有明高専主催）で第 33 回を迎える。ここ数年はコロナ禍によりオンラインでの開催となっており、気軽に参加できる新たなフォーラムのスタイルとして定着してきている。今後は、従前の一堂に会する対面の様式との複合開催を検討してもよいかもしれない。

1.21.02 高専シンポジウム

1.21.02 第 25 回高専シンポジウム in Kurume

久留米工業高等専門学校名誉教授鳥井昭美名誉教授を中心とする九州沖縄地区の教職員の提唱により 1996 年にスタートした高専シンポジウムは、2019 年で 25 回目を迎え、4 半世紀の節目を記念して、第 25 回高専シンポジウムを発祥の地久留米で開催した。実行委員長は生物応用化学科 中畠教授がその任に当たり、三川校長をはじめ久留米高専全教職員の協力のもと開催された。

第 25 回高専シンポジウムでは、高専教育の重要課題の一つである女性エンジニアの活躍に焦点を当てることとし「高専における男女共同参画を考えるー女性エンジニアが活躍する社会に向けてー」をテーマとして掲げ、新進気鋭の女性研究者である山城知佳様（京都大学高等研究院 ヒト生物学高等研究拠点 特定研究員、沖縄高専専攻科出身）から基調講演をいただいた後、長岡高専、舞鶴高専、久留米高専出身の若手女性エンジニア 4 人によるパネルディスカッションを実施した。会場は 2016 年に開業した久留米シティプラザを利用した。（写真 1.21.02-1～4）

一般公開企画として「高専ハカセ塾によるジュニア学会」、「和算への招待ー殿様も数学を愛した土地久留米-」、「高専シンポジウム 25 回開催記念イベント」を実施した。

参加者は合計で 708 名あり、高専関係者では 557 名（うち学生 357 名、一般 200 名）、全国 44 校から参加があり、高専ハカセ塾関係者 130 名、来賓 21 名の参加があった。

研究発表は総計で 384 件行われ、その内訳は表 1.21-1 の通りである。それらのうち優れた発表には優秀賞が与えられることは従前どおりであるが、第 25 回大会から新たにシンポジウム全体を通して最も最優秀な発表には国立高等専門学校機構理事長賞、長岡技術科学大学学長賞、豊橋技術科学大学学長賞が授与された。

表 1.21.02 第 25 回高専シンポジウム発表の内訳

発表分野	口頭発表	ポスター発表
材料	34	12
建築・土木	28	21
情報・通信	25	23
工学教育	22	25
電気・電子	25	33
化学	22	46
機械	13	11
生物・環境	11	33
合計	180	204

第 25 回高専シンポジウム in Kurume 大会概要

主催：高専シンポジウム協議会、久留米工業高等専門学校

後援：久留米市、鳥栖市、久留米市教育委員会、鳥栖市教育委員会、久留米商工会議所、九州大学工学部、九州大学総合理工学府、久留米大学、久留米工業大学、長岡技術科学大学、豊橋技術科学大学、久留米学術研究都市づくり推進協議会、高等教育コンソーシアム久留米、久留米観光コンベンション国際交流協会、テクノネット久留米、国立高等専門学校機構、全国公立高等専門学校協会、日本私立高等専門学校協会、久留米高専後援会、久留米高専同窓会久留米工業会

協賛：日本化学会、日本化学会九州支部、日本高専学会、日本工学教育協会、九州工学教育協会、応用物理学会、化学工学会、電気学会、電気学会九州支部、電子情報通信学会、日本機械学会、日本金属学会、日本ゴム協会、日本ゴム協会九州支部、日本生物工学会、日本セラミックス協会、日本鉄鋼協会、日本農芸化学会、日本歯車工業会、粉体粉末冶金協会



写真 2. 21. 02-1 京都大学 山城知佳氏
による基調講演(沖縄高専卒業生)



写真 2. 21. 02-2 高専卒業生 女性エンジニアによる
パネルディスカッション



写真 2. 21. 02-3 口頭発表での質疑応答

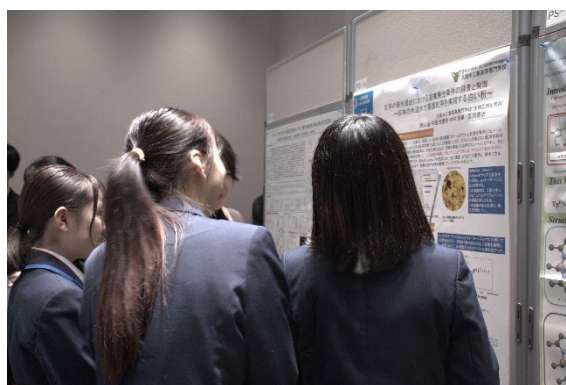


写真 2. 21. 02-4 ポスター発表で聴衆者に
説明する学生

1.22 同窓会久留米工業会（小森野会）

1.22.1 同窓会の概要

同窓会久留米工業会は、(旧制)久留米高等工業学校（以下、高工と呼ぶ）、(旧制)久留米工業専門学校（以下、工專と呼ぶ）、久留米工業短期大学（以下、短大と呼ぶ）及び久留米工業高等専門学校（以下、高專と呼ぶ）の卒業生により、昭和49年11月3日創設され、本年は50周年目にあたる。

創設当時の4,860名（高工及び工專卒2,654名、短大卒752名、高專卒1,454名）が、現在では14,231名と増加し、その内高專の卒業生が8割近くを占めるまでとなった。

当会の大きな特色の1つとして、独立した本部事務局を持っており、これは他高專にはないことである。その事務局は、母校久留米高專の敷地内の“記念館”内にある。この記念館は、昭和58年に高工創立40周年を記念して、卒業生の寄付により建設された。同窓会の主務担当職員が、週2回（月、金曜日）出勤し、様々な事務を遂行している。

本部役員（会長、副会長、理事、監事など）を置くとともに、全国7支部（関東、東海、関西、北九州、福岡、筑後、佐賀）でそれぞれ支部長、事務局を中心とした活動が精力的に行われている。

本会の主な事業としては、

- ・年1回の定期役員会（評議員会）
- ・隔年の大同窓会
- ・年1回の会報「小森野だより」の発行
- ・5年毎の同窓会名簿発行

が挙げられる。

1.22.2 同窓会の活動状況

（1）本部役員

表1.22-1の通り、津福啓二氏から川島秀雄氏、國松良康氏、現在の伊藤絹子氏へバトンタッチされ、従来からの業務、新たな仕事の処理、支部活動への支援など、誠意活動されてきた。

（2）大同窓会の開催

表1.22-2の通り、大同窓会を市内のホテルで開催してきた。令和2年～4年は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために大同窓会を中止せざるを得なかったが、令和5年には再開できた。

（3）情報発信の充実

ホームページに加え、FacebookやLINEでも情報発信を行えるようになっている。

<https://komorinokai.jimdo.com/>

<https://www.facebook.com/kurumekosendosokai>

<https://lin.ee/xhPLhqV>

表 1.22-1 同窓会久留米工業会会長

就任期	会長氏名（卒業期、学科）
平成21年～平成26年	津福啓二氏（短大4期、機械科）
平成27年	川島秀雄氏（高專1期、電気工学科）
平成28年～令和元年	國松良康氏（高專7期、機械工学科）
令和2年～現在	伊藤絹子氏（高專13期、工業化学科）

表 1.22-2 大同窓会の開催

回数	開催日	実行委員長（高專卒業期、学科）	実行委員の高專卒業期
第11回	平成27年12月30日	初瀬房雄氏（20期、機械工学科）	20, 21, 22, 23, 30, 31, 40, 41
第12回	平成28年12月30日	大山周治氏（22期、機械工学科）	22, 23, 24, 25, 32, 33, 42, 43
第13回	平成30年12月29日	田中信也氏（24期、金属工学科）	24, 25, 26, 27, 34, 35, 44, 45
第14回	令和5年12月29日	久保立木氏（27期、材料工学科）	26, 27, 28, 29, 36, 37, 46, 47

第2章 各学科、専攻科のあゆみ（最近10年）

2.1 機械工学科

2.1.1 機械工学科の施設・設備

ものづくり教育センターの第一期工事として平成26年3月に機械加工実験実習室や創造デザイン室など実習・製図関係の施設改修が終了した後，第二期工事として，令和3年3月に実験・研究関係の施設である熱・材力実験棟および流体実験室が竣工し，ものづくり教育センターの一連の改修工事が終了した。熱・材力実験棟は，1Fにエコマテリアル研究室，再生可能エネルギー研究室，ものづくり研究室，解析室，ゼミ室を，2Fにオープンラボ1，オープンラボ2を配置した。2Fにオープンラボとして広いスペースを確保したことにより，他研究室との学生・教員の交流を進めることが可能となった。流体実験室は，環境エネルギー研究室や解析室・ゼミ室を配置

し，単なる実験室ではなく，解析や議論を深めることが可能となり，教育研究環境を充実させることができた。写真2.1-1に令和3年3月に竣工された熱・材力実験棟および流体実験室の外観を示す。

また実験実習研究設備として，施設整備補助金や設備整備補助金により電気式溶解炉、エアハンマーなどの実習設備や表面形状システム、プローブ式画像解析粒子径形状分析装置などの研究設備を充実させることができた。表2.1-1に最近10年間の主要導入設備の一覧表を示す。

2.1.2 最近10年の人事

この10年間で学科の発展に多大な功績を残された8名の先生方が退職された。平成25年度にデザイン工学の分野で多大な業績を残された藤田雅俊教授がお亡くなりになり，誠に残念であった。平成26



写真2.1-1 ものづくり教育センター（熱・材力実験棟、流体実験室）令和3年3月竣工

表2.1-1 最近10年間の主要導入設備

設備名	導入年度	予算
表面形状測定システム	平成26年度	設備整備費補助金
電気式溶解炉	平成26年度	施設整備費補助金
NCワイヤカット放電加工機	平成26年度	施設整備費補助金
万能試験機	令和2年度	施設整備費補助金
エアハンマー	令和2年度	施設整備費補助金
複合加工機	令和3年度	設備整備費補助金
プローブ式画像解析粒子径・形状分析装置	令和5年度	設備整備費補助金

年度に加工学の櫻木功教授が、熱流体工学の松永崇教授が、平成 27 年度に制御工学の岩本才次教授が、設計工学の山村基久准教授が退職された。また、同 27 年度に設計工学の大津健史助教が大阪大学に転出された。令和 4 年度に材料力学の原田豊満教授が、設計・加工学の和泉直志教授が退職された。

これらの先生方の後任として、平成 27 年度に長崎総合科学大学から流体工学の谷野忠和准教授（現在教授）が、信州大学から特殊加工の細野高史准教授が、平成 28 年度に豊橋技術科学大学大学院博士課程から表面処理の渡邊悠太助教（現在准教授）が、令和 6 年度に九州大学大学院博士課程から鉄鋼材料の上野虎太郎助教が着任した。また、平成 27 年度には人事交流として、有明高専から篠崎烈准教授が本校に在籍し、本校から南山靖博准教授が有明高専に在籍した。現在の教員は表 2.1-2 に示すとおりである。

2.1.3 卒業生・修了生の進路

本校卒業生の就職・進学状況は全般的に好調である。就職については、求人倍率が 40 倍を超えることも珍しくなく、景気に左右されず大半の学生が希望の企業へ就職している。また進学についても希望者のほとんどが国立大学等への編入学や本校専攻科へ

の進学を果たしている。進学先でも実験等に長けていることや自主性を持っているなど、卒業生は高い評価を受けている。なお、就職者数と進学者数を比較してみると、就職者数の割合の方が若干多いが、年によっては進学者数の多い年もある。ここ数年は就職 6 割、進学 4 割程度で推移している。

専攻科機械工学コース修了生の就職・進学状況も全般的に好調である。就職については専攻科修了生諸氏の長年にわたる活躍や専攻科の認知度が高まったことを反映して、求人倍率が本科を超える程の状況である。また、就職者数と進学者数の比率については、毎年修了者数が少ないこともあり、年によっては進学者ゼロや就職者ゼロの年もあるが、およそ半々程度である。

最近 10 年間の本科卒業生、専攻科機械工学コース修了生の進路は表 2.1-3 に示すとおりである。

2.1.4 教育研究の取組・成果の概要

この 10 年間で最も影響を受けた出来事は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）であろう。令和 2 年 1 月 15 日に国内で初めて感染者が確認され、同年 4 月 7 日には緊急事態宣言が発せられた。この影響を受けて、令和 2 年度は入学式、始業式が中止とな

表 2.1-2 現教員一覧（令和 6 年 10 月時点）

氏 名	職 名	専門分野	主な担当科目
中武 靖仁	教 授	環境エネルギー工学	伝熱工学、機械設計製図
石丸 良平	教 授	歯車工学	機械設計法、機械製図
中尾 哲也	教 授	制御工学	工業力学、制御工学
谷野 忠和	教 授	流体工学	流体工学、流体機械
田中 大	教 授	熱工学	工業熱力学、移動現象論
青野 雄太	准教授	材料力学	材料力学、破壊力学
細野 高史	准教授	特殊加工	機械加工学、精密加工学
南山 靖博	准教授	安全工学	安全工学、情報リテラシー
渡邊 悠太	准教授	表面処理	機械設計法、図学
上野 虎太郎	助 教	鉄鋼材料	材料力学、機械製図

り、恒例の新入生合宿研修も中止となった。さらにGW明けの5月6日まで休校の対応となり、前期の授業開始は5月7日からとなった。しかも、感染拡大を防止するために遠隔授業中心の授業となり、令和2年度の時間割は前期を前半・後半に分けて、前半は座学を中心に、実習や製図は後半に時間割を編成した。後期は通常に戻すことができたが、時間割にも工夫を余儀なくされた。他にも、研究活動、クラブ活動や工場見学旅行などの各種行事は原則禁止の対応となった。令和2年度はこのような事態であったが、翌年度から少しずつ平常を取り戻し、令和5年度には完全に元の状態に戻すことができた。

このような社会情勢であったが、教育研究活動の一旦を担う外部資金として多くの科学研究費補助金を獲得してきた。平成26年度に中武靖仁教授、谷野忠和教授が基盤研究（C）を、平成27年度に大津健史助教が若手研究（B）を、平成29年度に谷野忠和教授が基盤研究（C）を、令和2年度に中武靖仁教授、田中大教授、南山靖博准教授が基盤研究（C）を、渡邊悠太准教授が若手研究を、令和3年度に谷野忠和教授が基盤研究（C）を、令和5年度に中武

靖仁教授が基盤研究（B）を、青野雄太准教授、南山靖博准教授が基盤研究（C）を、細野高史准教授が挑戦的研究（萌芽）を獲得し、この10年間の獲得件数はのべ8名、13件に上る。中でも中武靖仁教授の基盤研究（B）は高専では獲得の難しい研究種目であり大いに評価される。

学生に対する資格取得の一助として、青野雄太准教授、南山靖博准教授が中心となり、三次元CADの認定試験であるCSWA（Certified SOLIDWORKS Associate Exams）を毎年実施している。また、社会人向け公開講座として中尾哲也教授が取りまとめとなり、3D-CAD基礎講座および3D-CAD/CAE応用講座を材料力学分野の原田豊満教授、青野雄太准教授および熱流体分野の中武博仁教授、谷野忠和教授、田中大教授が担当して実施してきた。さらに、日本歯車工業会主催のJGMAギヤカレッジマスターコースの基礎実習を石丸良平教授、細野高史准教授、渡邊悠太准教授、上野虎太郎助教が担当となり実施している。また、中学生向け公開講座として「ソーラーカーを作ろう！」を中尾哲也教授が中心となり実施し、受験志願者増の取組を行っている。

表 2.1-3 卒業生、専攻科（機械工学コース）修了生の進路

年 度	機械工学科卒業生								専攻科修了生（機械工学科出身）					
	就 職		大学編入学		専攻科入学		その他		就 職		大学院進学		その他	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
H26	23	59.0	8	20.5	6	15.4	2	5.1	0	0.0	4	100.0	0	0.0
H27	30	65.2	11	23.9	5	10.9	0	0.0	3	50.0	3	50.0	0	0.0
H28	20	54.1	9	24.3	6	16.2	2	5.4	1	16.7	5	83.3	0	0.0
H29	27	61.4	9	20.5	8	18.2	0	0.0	3	50.0	3	50.0	0	0.0
H30	20	51.3	8	20.5	11	28.2	0	0.0	5	62.5	3	37.5	0	0.0
R1	18	48.6	11	29.7	6	16.2	2	5.4	2	25.0	6	75.0	0	0.0
R2	16	44.4	8	22.2	12	33.3	0	0.0	4	40.0	6	60.0	0	0.0
R3	30	60.0	15	30.0	5	10.0	0	0.0	6	100.0	0	0.0	0	0.0
R4	19	59.4	10	31.3	3	9.4	0	0.0	7	58.3	5	41.7	0	0.0
R5	23	59.0	8	20.5	6	15.1	2	5.1	3	60.0	2	40.0	0	0.0
平均	22.6	56.6	9.7	24.3	6.8	17.0	0.8	2.0	3.4	47.9	3.7	52.1	0	0.0

2.2 電気電子工学科

2.2.1 教員

令和 6 年 4 月現在の教員一覧を表 2.2-1 に示す。
教授 5 名、准教授 2 名、助教 2 名の体制となっている。以下に、平成 26 年度から令和 5 年度までの 10 年間の人事の変遷を振り返る。

平成 26 年度

学科長は前年度から平川靖之教授である。4 月に、佐世保高専から嶋田英樹准教授（専門：電磁界解析）が高専間教員交流で 1 年間、本学科に赴任した。

平成 27 年度

3 月に、吉田智博助教が 3 年の任期満了に伴い退職された。

平成 28 年度

4 月に、加藤直孝准教授が教授に、山本哲也助教が講師に昇任した。また、広島大学大学院から村上

秀樹氏（専門：半導体工学）が准教授として採用された。

平成 29 年度

4 月に、池田隆教授が学科長に就任した。また、津山高専から掛橋英典教授（専門：磁気応用・照明）が高専間教員交流で 1 年間、本学科に赴任した。長年教育研究に尽力された原卓伸講師が退職された。

平成 30 年度

4 月に、宮崎浩一准教授が教授に昇任した。

令和元年度

4 月に、越地尚宏教授が学科長に就任した。また、熊本県立技術高等学校から原田裕二郎氏（専門：集積回路工学）が助教として採用された。

令和 2 年度

3 月に、平成 2 年度から長年教育研究に尽力された池田教授が定年退職され、翌年度は特任教授、

表 2.2-1 教員一覧（令和 6 年 4 月現在）

氏 名	職	着任	担当授業科目
越地 尚宏	教授 (総合情報センター長)	H24.4.1	総合基礎演習、情報リテラシー、電磁気学 1、電気電子演習 3、電磁気学 3、応用物理 2、応用数学 1・2、電気電子実験 2、量子力学
平川 靖之	教授	H18.4.1	総合基礎演習、電気電子工学基礎、電気電子 CAD、電気回路 2・3、応用電磁気学、光エレクトロニクス
山口 崇	教授	H21.4.1	総合基礎演習、プログラミング 3、論理回路、システム工学
宮崎 浩一	教授 (学科長)	H9.4.1	総合基礎演習、プログラミング 1、電気回路 1、電気電子演習 1・2、高電圧工学、電気電子実験 2、パワーエレクトロニクス、電力応用、情報理論、プラズマ工学
村上 秀樹	教授	H28.4.1	総合基礎演習、電気電子演習 2、確率統計、電気電子実験 1、半導体工学、集積回路工学、技術英語
ウリントヤ	准教授	H25.4.1	総合基礎演習、電気電子演習 2、マイコン制御、電気電子計測、コミュニケーション、デジタル信号処理、創造工学実験
山本 哲也	准教授	H19.10.1	総合基礎演習、電磁気学 2、電気機器工学 1・2、電気電子演習 3、電気電子実験 2・3、電力システム、電力応用
中川原 光洋	助教	R6.4.1	総合基礎演習、プログラミング 2、電気電子演習 2・3、技術社会の安全と倫理、電気電子実験 2・3、電気電子設計
原田 裕二郎	助教	R1.4.1	総合基礎演習、電気電子演習 1、電子回路、プログラミング 2、制御工学、計算機アーキテクチャ、創造工学実験

翌々年度は嘱託教授として再雇用された。

令和3年度

8月に、山口崇准教授が教授に、山本講師が准教授に昇任した。3月に、平成25年度から教育研究に尽力された加藤教授が定年退職され、翌年度は特任教授として再雇用された。

令和4年度

10月に、村上准教授が教授に昇任した。3月に池田嘱託教授と加藤特任教授が退職された。

令和5年度

4月に、宮崎教授が学科長に就任した。

令和6年度

4月に、退職された池田教授の後任として、パナソニックオートモーティブシステムズより、中川原光洋氏（専門：信号処理）が助教として採用された。

2.2.2 設備

高専機構の設備整備マスタープランに基づく予算配分により、老朽化した設備を更新した。令和元年度には、低濃度PCB含有機器の高電圧実験用電圧調整器を廃棄し、交流高電圧150kVの高電圧試験（絶縁・放電）が行え、PCBを含有していない機器で構成した交流高電圧発生・測定システムを導入した。令和2年度には、サイリスタ位相制御モータ駆動システムを更新し、回生型直流電源とインバータによって永久磁石同期モータを駆動できる、バッテリーシミュレータ・IPMモータ駆動システムを導入した。令和5年度には、YAGレーザー装置を更新し、高出力狭帯域YAGレーザーとOPOにより真空紫外から赤外まで広い波長域の高出力パルス光を発生できるパルスレーザー装置を導入した。また、半導体ウェハのC-V特性およびI-V特性の評価を行うことができる、半導体デバイス電気特性評価システムも導入した。これらの設備は、学生実験、卒業研究、専攻科研究論文に加え、教員研究にも活用され、電気電子工学科の教育および研究が充実したものとなった。

2.2.3 教育研究の取組・成果

平成25年度から低学年での学習姿勢の定着、専門に深く関わる基礎的な諸項目学習の充実を図るために、低学年の演習科目として「電気電子実践演習」（令和元年度以降は「電気電子演習」）を開設して継続している。低学年に本演習を開設することで、入学時に持っていた専門に関する興味を、学年進行に伴って具体的な関心に高めて進路選択にも結びつく素地の形成促進の効果を期待したものである。併せて、基礎学力や計算力の充実、ものづくりや実践的コミュニケーション力の充実等を低学年から推進するものである。なお、当学科の特徴として(1) エネルギー、(2) エレクトロニクス、(3) プラクティカルコミュニケーションを掲げており、これらに沿って演習内容も組まれている。表2.2-2には1年前期の「電気電子演習1」、表2.2-3には2年前後期の「電気電子演習2」の中で令和4年度に行った演習項目を示している。13～15名の学生を1人の教員が指導する演習で少人数授業を実施し、専門科目の学習参加意欲と習熟度を高め実践力を養うものとなっている。また、本学科独自で外国人非常勤講師をお願いし、意思を伝える英語でのコミュニケーションの必要性の理解と共に、どう工夫すれば伝えることができるか、実践的に学ぶ機会を充実させた。

表 2.2-2 電気電子演習1（1年前期）

区分	演習項目
A	電気電子入門演習
B	コンピュータ活用入門演習
C	コミュニケーション入門演習

表 2.2-3 電気電子演習2（2年前後期）

区分	演習項目
A	電子工作入門
B	電磁気学入門
C	コミュニケーション基礎演習
D	電子工作
E	仮想ネットワーク構築
F	コミュニケーション演習

キャリア教育の一環として、平成 23 年度から OB 講演会を行っており、学生には好評である。表 2.2-4 には、平成 26 年度から令和 5 年度までに本学科主催で開催した OB 講演会を示す。新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止していた時期もあったが、令和 5 年度から再開した。

一般向けには、平成 22 年度より継続して、中学生向け公開講座「エレクトロニクスサマースクール ライントレースカーを作ろう」（平成 23 年度以降は九州パワーアカデミー共催）を実施し、大変好評を得ている。新型コロナウイルス感染拡大により中止していた時期もあったが令和 4 年度に再開した。また、平成 24 年度より小学生対象の公開講座や小中学生対象の高専ハカセ塾の中で「いっしょに、作ってみよう」ーラジオを組み立てようーと題して、ラジオ製作を行っており、こちらも好評を得ている。

2.2.4 卒業生・修了生の進路

本科卒業生および専攻科修了生の就職・進学状況は良好である。就職については、求人倍率が 40 倍を超えることもある。また進学についても、希望者のほとんどが国立大学へ編入学および本校専攻科へ進学している。平成 26 年度、平成 30 年度、令和 4 年度の本科卒業生および専攻科修了生の進路を、表 2.2-5 に示す。就職者数と進学者数を比較すると、近年、進学の割合が高くなってきている傾向にある。

表 2.2-4 本学科主催の OB 講演会

年度	講師（部署役職等は講演会当時のもの）
H26	松川 直樹 氏（日産自動車九州株式会社工務部工務課、42 回卒） 樋上 武 氏（経済産業省九州産業保安監督部、26 回卒）
H27	栗原 浩寿 氏（日本たばこ産業株式会社浜松工場技術担当、45 回卒） 大塚 信也 氏（九州工業大学大学院工学研究院電気電子工学研究系准教授、26 回卒）
H28	加呂 光 氏（九州大学大学院総合理工学府量子プロセス理工学専攻博士課程、45 回卒） 富山 直登 氏（TOTO 株式会社機器水栓事業部水栓グローバル事業推進部、45 回卒）
H29	北島 工 氏（九州旅客鉄道株式会社鉄道事業本部電気部電力課、24 回卒）
H30	池田 雅延 氏（株式会社ジャパンディスプレイ R & D 統括部フロントプレーン開発部、24 回卒）
R5	一木 貴大 氏（シンク・ロジスティクス株式会社代表取締役社長、46 回卒）

表 2.2-5 卒業生・修了生の進路

年度	就職先・進学先
H26	【本科就職】アイシン精機㈱、東芝メディカルシステムズ㈱、㈱サン電工社、ジェイ・アール・シー特機㈱、昭栄化学工業㈱、コニカミノルタビジネスソリューションズ㈱(2名)、㈱明電舎、福岡市、イーエレクトクス㈱、㈱小松製作所、関西電力㈱、国立印刷局、中部電力㈱、JAXA、㈱ふくれん、NS ウェスト㈱、㈱栄電舎、三菱電機システムサービス㈱、東海旅客鉄道㈱ 【本科進学】新潟大学、豊橋技科大、熊本大学、九州大学、久留米高専専攻科(9名) 【専攻科就職】福岡市、フジテック㈱、スクールJCA、㈱日立製作所電力システム社 【専攻科進学】九州大学大学院(2名)、九州工業大学大学院
H30	【本科就職】浜松ホトニクス㈱、㈱エム・システム技研、SUBARUテクノ㈱、キャノンメディカルシステムズ㈱、㈱栄電舎、中部電力㈱、西部ガス㈱、日鉄住金ハード㈱、ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング㈱、新日鐵住金㈱、㈱日立ハイテクフィールドディング、㈱オーレック、㈱デンロコーポレーション、キャノンシステムアンドサポート㈱ 【本科進学】東京大学(2名)、九州大学(2名)、山口大学、佐賀大学(2名)、豊橋技科大(6名)、九州工業大学、久留米高専専攻科(7名) 【専攻科就職】㈱ティー・エス・ジー、西部電機㈱ 【専攻科進学】早稲田大学大学院、大阪大学大学院(2名)、九州大学大学院
R4	【本科就職】村田機械㈱、九州電力㈱、㈱FIXER、㈱J-POWER ハイテック、日本原子力発電㈱、㈱anno lab、トーテックアメニティ㈱、JASM㈱、中部電力㈱、㈱日立ビルシステム、㈱西部技研、富士電機㈱、㈱メンバーズ 【本科進学】九州大学(4名)、長崎大学、豊橋技科大(3名)、佐賀大学、熊本大学(2名)、九州工業大学(2名)、大阪大学、千葉大学、長岡技科大、久留米高専専攻科(6名) 【専攻科就職】TOTO㈱、トヨタ自動車㈱、ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング㈱、ソフトバンク㈱、トヨタ自動車九州㈱、富士通クラウドテクノロジーズ㈱、 【専攻科進学】九州大学大学院

2.3 制御情報工学科

2.3.1 学科の施設・整備

主な学科の教育研究施設は、専門科目の実験、実習および演習の授業で使用する実験室、卒業研究や専攻科研究で使用する実験室（卒研室）および教員室に分けられる。実験実習演習用実験室として、（１）制御情報工学科棟２階の電気電子工学実験室、（２）電気電子・制御情報工学科棟２階の制御情報実験室および（３）ものづくり教育センター１階のメカトロニクスデザイン室がある。

実験室（１）では、主に電気電子工学関係の実験を実施しており、電気電子工学に関係する学科共有の設備や機器のほとんどは、この実験室に備え付けられている。実験室（２）は、PCが48台設置され、PCを用いるプログラミング等の演習授業や中学生向けの体験授業で使用されてきた。PCのアップデート管理や定期的なPCの更新費用等の諸問題により、PCを用いる演習授業は、学校共有施設のIT演習室で実施できるよう徐々に移行した。現在は、電子工作の実習授業で利用しているが、将来的な制御情報工学科棟の改修と合わせて、この実験室の整備を計画している。実験室（３）は、平成25年度のものづくりセンター改修に伴い整備された実験室で、特定の実験だけではなく、多目的に利用ができるように、使用する装置等は保管庫に入れて、作業台を自由に使用できる形態としている。平成29年度には、創造プログラミング演習で使用する装置を整備し、令和元年には、機械学習により自動走行する自

走車をクラス定員の学生数分整備した。このような情報工学に関連する演習科目を実施するだけでなく、グループワークをする講義科目や語学関連の演習科目にも利用されている。

2.3.2 学科の教員 - 人事の推移 -

平成26年度から令和5年度までの学科所属教員の人事を振り返る。平成26年度は、綾部隆教授、丸山延康教授、江崎昇二教授、江頭成人教授、小田幹雄准教授、黒木祥光准教授、熊丸憲男准教授、中野明准教授、松島宏典准教授、松本光広助教および堺研一郎助教の11名の教員が所属し、複合融合の学科として、機械工学、電気電子工学、情報工学および教育学を専門とする多彩な教員陣で運営していた。

その後10年間の人事の推移は、つぎのとおりである。松本光広助教は、平成27年度に准教授に昇任後、同年度に退職、小田幹雄准教授および黒木祥光准教授は、平成28年度に教授に昇任した。平成29年度には田中諒助教が採用された。熊丸憲男准教授は、平成30年度に退職し、綾部隆教授も同年度に定年退職し、その後1年間嘱託教授を務めた。平成31年度には古賀裕章助教が採用された。堺研一郎助教は、令和2年度に准教授に昇任し、丸山延康教授は、同年度に定年退職し、その後2年間特任教授を務めた。田中諒助教および古賀裕章助教は、令和4年度に准教授に昇任、江崎昇二教授は、同年度に定年退職し、その後1年間嘱託教授を務めた。令和5年度現在の学科教員を表2.3-1に示す。

表 2.3-1 現教員一覧（令和5年度）

氏名	役職	学位	専門分野	主な担当科目
小田幹雄	教授/学科長	博士（工学）	知能情報工学	計算機アーキテクチャ1、情報通信実験、ディジタル回路設計、電子計算機基礎
江頭成人	教授	博士（工学）	制御工学	パワーエレクトロニクス、工業倫理と安全、電気回路2、機構学、情報処理基礎
黒木祥光	教授	博士（工学）	画像処理	情報理論、応用数学1、信号処理、画像工学、コンピュータグラフィックス
中野明	准教授	博士（情報工学）	教育工学	オペレーティングシステム、コンパイラ、データベース基礎、ソフトウェア工学
松島宏典	准教授	博士（工学）	高度道路交通システム	データサイエンスと人工知能2、応用数学2、確率統計、離散数学、応用情報処理
堺研一郎	准教授	博士（工学）	スピン磁気量子物性	電子情報実験、半導体材料工学、電磁気学、加工実習、情報処理基礎
田中諒	准教授	博士（工学）	システム制御理論	ロボット工学、制御工学1、CAD演習、製図、システム制御工学、創造工学実験
古賀裕章	准教授	博士（工学）	医用画像処理	電子回路、数値計算法、データ構造とアルゴリズム、プログラミング3
江崎昇二	嘱託教授	修士（工学）	制御工学	制御工学実験、制御工学2、計測工学、シーケンス制御、加工実習、創造工学実験

2.3.3 卒業生の進路

平成 26 年度から令和 5 年度まで、379 名の卒業生を輩出した。就職、進学、その他のうち、各年度の就職する卒業生の割合は 34%から 69%であり、進学する卒業生の割合は 28%から 55%であり、年度により学生の希望に左右される。就職のうち、情報通信業の企業に就職する割合は、平成 28 年度までは 10%程度であったが、令和元年度には 50%を超え、令和 5 年度では 80%を超える勢いである。10 年間に卒業した学生が就職した業種の一覧を表 2.3-2 に示す。

また、10 年間に 158 名の卒業生が進学したが、進学者数の多い上位 5 大学等は、専攻科 80 名、九州工業大学 29 名、筑波大学 13 名、九州大学 7 名、東京工業大学 6 名であった。

2.3.4 教育研究の取組・成果

学科の教育に関して、10 年間の教育課程の変遷を説明する。平成 26 年度入学者の専門科目教育課程は、必修科目 87 単位、選択科目 2 単位の計 89 単位（学修単位 6 単位を含む）を修得するものである。必修科目のうち、専門共通基礎が 13 単位、メカトロニクス系科目が 34 単位、情報系科目が 33 単位、卒業研究が 7 単位であり、メカトロニクス系科目と情報系科目の比率がほぼ同じである構成であった。

平成 29 年度には、入学者の専門科目（必修）の教育課程をつぎのように改正した。製図Ⅰ、製図Ⅱ、設

計製図および CAD/CAM(計 6 単位)を製図および CAD 演習（計 2 単位）へ単位減とし、工業力学（2 単位）を同科目（1 単位）へ単位減、基礎電磁気学および電磁気学（計 3 単位）を電磁気学（2 単位）へ単位減、材料学（1 単位）を廃止した。一方、熱／流体工学（1 単位）を流体力学および熱力学（計 2 単位）に、ロボット工学（1 単位）を同科目（2 単位）に単位を増やした。機械加工（1 単位）を廃止する一方、加工実習を 1 単位から 2 単位へ単位を増やした。また、電動アクチュエータ（1 単位）を廃止し、電気機器（1 単位）および半導体材料工学（1 単位）を新設した。以上の科目の新設、廃止、単位数増減により、メカトロニクス系科目を計 34 単位から計 30 単位に削減し、選択科目の修得単位要件を 2 単位から 0 単位にすることにより、情報系科目を 6 単位増やした。新設した情報系科目は、情報セキュリティ、データベース基礎、創造プログラミング演習、ディジタル回路設計、コンパイラおよびディジタル通信である。

平成 31 年度には、専門科目について、専門共通基礎の確率統計、応用数学Ⅱ（計 2 単位）を応用数学 2（2 単位）へ科目名変更した。メカトロニクス系科目の電気機器、材料力学、工業力学、流体力学および熱工学（計 5 単位）を廃止した。電気電子工学実験および電子情報実験（計 4 単位）を電子情報実験

表 2.3-2 就職業種一覧

業種 \ 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和 元年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
建設業	1			1		3	3			
製造業	10	12	20	11	9	4	4	11	4	2
電気・ガス・熱供給・水道業	2	3	2	1		3	1			
情報通信業	2	2	2	6	7	15	17	14	8	13
運輸業		1	1	1				1		
卸売・小売業				1						
学術・専門・技術サービス					1		1			
その他	3	2		1	1				1	1
合計	18	20	25	22	18	25	26	26	13	16

(2 単位) へ統合し、電気回路 2 を 1 単位から 2 単位へ単位を増やした。また、工業倫理と安全 (1 単位) と学科横断科目である物質工学概論および機械工学概論 (計 3 単位) を新設した。情報系科目では、データベース基礎、コンパイラ、信号処理および創造プログラミング演習をそれぞれ 1 単位から 2 単位へ、計算機アーキテクチャ (2 単位) を計算機アーキテクチャ 1 および 2 (計 3 単位) に単位を増やした。また、情報工学実験、ディジタル通信 (計 3 単位) を廃止した。

令和 4 年度には、情報系科目の数学関連科目と工業倫理と安全を専門共通基礎に分類替えし、応用数学 2 (2 単位) を応用数学 2 および確率統計 (計 2 単位) に分割した。また、通信工学および電子情報実験を情報系科目からメカトロニクス系科目に分類替えし、メカトロニクス系科目の機械工学概論を 2 単位から 1 単位にした。情報系科目について、計算機システムおよびマルチメディア工学 (計 2 単位) を廃止し、データサイエンスと人工知能 1 および 2 (計 2 単位) を新設した。

以上のとおり、10 年間の専門必修科目の教育課程の変遷を辿ったが、平成 26 年度は、メカトロニクス系科目と情報系科目がほぼ同じ割合であったが、機械系科目を廃止し、数学に関連する情報系科目を専門共通基礎に分類替えしながら、情報系科目を選択的に強化し、人工知能に関する科目などを新設して、高度情報化社会に適応できるように改訂を行っている。

学科の研究活動に関しては、所属教員がそれぞれ研究室を運営し、教員の研究および配属学生の研究指導にあたっている。令和 5 年度の実験室は、つぎのとおりである。

システム制御実験室 (江頭研) では、メカトロニクスにおける、モータ駆動やセンサ信号の増幅のための電気電子回路、画像処理による距離計測やハードウェアを扱うためのシステムプログラミングなど、計測・制御に関する研究が行われている。

知能情報実験室 (小田研) では、英語などの自然言語について、人工知能等を用いた文章の解析や分類または言語モデルなどの研究が行われている。所有する主な設備は、GPU 搭載のサーバである。

画像処理実験室 (黒木研) では、人工知能による分類や認識などを含む画像処理一般に関する研究が行われている。所有する主な設備は、GPU 搭載のサーバである。

映像メディア実験室 (松島研) では、コンピュータビジョン、パターン認識の観点から、高度道路交通システムの諸問題を解決するための研究が行われている。所有する主な設備は、実験車両、電動モビリティ、GPU 搭載のワークステーションである。

知能工学実験室 (中野研) では、自然言語処理、機械学習、深層学習などの技術を用いて、英文のリーダビリティ (読みやすさ) を計測することを目指した研究がおこなわれている。所有する主な設備は、AI 技術を支える専用 PC が複数台ある。

磁気エレクトロニクス実験室 (堺研) では「スピントロニクス」の研究に取り組んでいる。特に、磁性体から金属・半導体・磁性絶縁体中へのスピン流の生成と検出を目指している。実験装置としては、縦型電磁石コイルと横型電磁石コイルの 2 台の電磁石コイルを保有している。

CAD/CAM 実験室 (田中研) では、産業用ロボットの高精度自動制御に関する研究が行われている。所有する主な装置は、水平多関節ロボット、垂直多関節ロボット、産業用ドローン、台車型倒立振り子、GPU 搭載のサーバ、3D プリンタなどである。

情報処理実験室 (古賀研) では、レントゲンや眼底画像などの医用画像について、画像処理やデータ処理等を用いて解析や診断補助を行うシステムの研究が行われている。所有する主な設備は、GPU 搭載のサーバである。

最後に、中学生向けの講座として、令和元年に IchigoJam を使った IoT 入門を開催した。その後、コロナウイルス蔓延期間を経て、令和 4 年度から高専 AI デバイスを使った人工知能入門を開催している。

2.4 生物応用化学科

2.4.1 概要

平成 8 年に工業化学科から生物応用化学科に改組され 28 年目を迎える。この間、入試倍率は常に 2 倍以上を維持し、最近の 10 年間の平均倍率は 2.1 倍であり、全国高専の化学系学科では最高値に達している。女子学生の比率は直近の 10 年間は、おおむね 50% となり、理系分野における女性の活躍推進にも貢献している。就職・進学に関しても極めて良好で、専攻科の生物応用化学コースも含めて、就職希望者の内定率は 100% である。第一希望企業への内定率も高く、産業界からの高い評価を反映してしる。進学希望者に関しても、国公立大学（大学院）への合格率は 100% である。これらの就職と進学の実績が、高い入試倍率へつながるといふ好循環を生んでいる。

2.4.2 教育研究陣容—人事の推移—

この 10 年は人事が大きく動いた期間であった。平成 27 年 3 月に泉本英二教授が退職され、同年 4 月に中島めぐみ助教が赴任された。この年、石井努准教授が教授に昇任された。平成 28 年 4 月に萩原義徳助教が講師に昇任され、平成 29 年 4 月に准教授に昇任された。平成 30 年 3 月に松山清准教授が退職された。令和 3 年 3 月に津田祐輔教授が退職され、同年 4 月に我部篤講師が赴任された。令和 4 年 3 月には、富岡寛治教授が退職され、同年 4 月よりタイ王国 KING MONGKUT'S UNIVERSITY OF TECHNOLOGY THONBURI に赴任された。同年 4 月に笈木宏和准教授が教授に、我部篤講師が准教授に昇任された。令和 5 年 12 月に谷本勝一助教が赴任された。

2.4.3 実践的カリキュラム

生物応用化学科の改組後に応用化学と生物化学を融合したカリキュラムへの変遷を続け、現在は低学年では化学及び生物学の基礎科目を配置し、高学年に進むに従い応用化学と生物化学に関する高度

な内容を学ぶ専門科目を配置する体系を構築している。令和元年から応用化学コースと生物化学コースの専門科目を再編し、応用化学系は有機材料と高分子材料の基礎から加工技術まで、生物化学系は生体系の遺伝子および代謝の基礎からバイオ工業まで、化学工学をベースに据えて実際に工場で実施されている内容とする改訂を加えた。同時に、品質・安全工学と産業財産権入門・工業倫理の素養科目を再編した。これらのカリキュラムは、企業から高く評価され、就職の内定率向上に大きく寄与している。令和 6 年より 1 年生の生物応用化学入門を生物応用化学情報基礎に変更し、情報学やインフォイマティクスにも明るい実践的技術者の育成を開始した。

2.4.4 卒業生の進路

令和 4,5 年度の卒業生の進路を表 2 に示す。この 10 年は、平成 20 年のリーマンショックから立ち直り、おおむね売り手市場であった。大学に進学しても就職の心配がなかったためか、若干進学する学生が多かった。その中で、平成 28,29 年度は就職が 7 割を超えている。この年は景気対策のため、マイナス金利政策を導入している。就職難の年度は本科からの就職が増える。就職先としては、化成品工業・石油エネルギー・分析から、医薬・食品への移行が見られた。また令和 6 年度は政府の施策により大手企業が給与のベースアップをしたため、大手企業を希望する傾向がみられた。今後この傾向はますます強まるだろう。専攻科学生も大手企業を選べる状況であり、専攻科修了生も企業で認められている。

進学先としては、1~2 割が本校専攻科に、豊橋・長岡両技科大、九大にほぼ毎年進学している。九州内では、佐大・熊大が、九州外では、広大・東工大・神大が人気のようである。専攻科からはほとんどが九州大学総合理工学府に進学している。令和 4 年度から九州大学との連携プログラムが運用され、この年、1 名がプログラム生となった。

表2. 4. 1 生物応用化学科教育研究陣容 —現職教員と退職教員の一覧を示す—

現職教員

(令和6年4月1日現在)

氏名	現職	着任	担当授業科目
中畠 裕之	教授	H6・4・1	生物学 2 遺伝子・細胞工学 生体機能分子学 分子生物学 基礎生物化学実験 生物化学実験 生物工学実験 卒業研究 専攻科研究論文
辻 豊	教授	H9・4・1	化学 1 有機合成化学 教養化学 分析化学実験 有機化学実験 応用化学実験 卒業研究
梶 隆彦	教授	H10・4・1	物理化学 1・2 化学工学 2 バイオ工学 応用物理化学 創造化学実験 物化・化工実験 応用化学実験 卒業研究 専攻科研究論文
笈木 宏和	教授	H8・4・1	情報化学 2 有機化学 2 代謝工学 環境工学 生体物質化学 生物工学実験 生物化学実験 基礎生物化学実験 卒業研究 創造工学実験 専攻科研究論文
石井 努	教授	H18・4・1	酸塩基化学 有機金属化学 機能有機材料 機器分析 有機反応化学 分析化学実験 有機化学実験 応用化学実験 卒業研究 専攻科研究論文 専攻科研究論文
渡邊 勝宏	准教授	H12・4・1	基礎有機化学 1 基礎有機化学 2 有機化学 1 高分子化学 1・2 高分子材料特論 有機構造化学 分析化学実験 有機化学実験 応用化学実験 卒業研究
松田 貴暁	准教授	H18・10・23	基礎溶液化学 化学平衡論 無機化学 1 ポリマー工学 品質・安全工学 機能有機材料特論 有機化学実験 物化・化工実験 生物工学実験 卒業研究 専攻科研究論文
萩原 義徳	准教授	H24・1・1	生物学 1 情報化学 1 酵素構造工学 遺伝子・細胞工学 技術英語 基礎生物化学実験 生物化学実験 生物工学実験 卒業研究 専攻科研究論文
我部 篤	准教授	R3・4・1	化学工学 1 工業物理化学 2 品質・安全工学 産業財産権・工業倫理 物化・化工実験 創造化学実験 応用化学実験 卒業研究 化学工学特論 創造工学実験 専攻科研究論文
中島 めぐみ	助教	H27・4・1	生物学 1 化学 2 化学工学基礎 生物有機化学 情報処理演習 地球環境と現代生物学 創造化学実験 生物化学実験 生物工学実験 卒業研究
谷本 勝一	助教	R5・12・1	生物学 2 基礎無機化学 工業物理化学 1 応用情報処理演習 基礎生物化学実験 物化・化工実験 生物工学実験 卒業研究

退職教員

氏名	退職時	在職期間	担当科目
泉本 英次	教授	H18・4・1～H27・3・31	化学工学 I・II 化学工学特論 バイオプロセス工学 工業倫理 工業英語 物化・化工実験 応用化学実験 創造工学実験 卒業研究
松山 清	准教授	H24・4・1～H30・3・31	化学工学 I 工業物理化学 II 環境工学 化学工学概論 産業財産権特論 創造化学実験 物化・化工実験 応用化学実験 卒業研究
津田 祐輔	教授	H6・4・13～R3・3・31	有機構造化学 機能有機材料特論 創造工学実験 専攻科研究論文 機能有機材料 卒業研究 ポリマー加工技術 ポリマー製造工学 高分子化学 I 応用化学実験 有機化学実験
富岡 寛治	教授	H12・4・1～R4・3・31	生物学 I 情報処理演習 応用情報処理演習 基礎無機化学 酵素構造工学 基礎生物化学実験 生物化学実験 生物工学実験 卒業研究
津田 祐輔	教授	H6・4・13～R3・3・31	有機構造化学 機能有機材料特論 創造工学実験 専攻科研究論文 機能有機材料 卒業研究 ポリマー加工技術 ポリマー製造工学 高分子化学 I 応用化学実験 有機化学実験

2.4.5 学科の施設・設備

化学系： 核磁気共鳴装置、熱分析装置、吸光光度計、蛍光光度計、赤外分光計、ラマン分光計、ゲル浸透クロマトグラフィー、ガスクロマトグラフィー、原子吸光分光光度計、テンシロン万能試験機、ゼータ電位・粒径測定システム、原子間力顕微鏡、ポテンシオスタット、回転リングディスク電極装置、電位差自動滴定装置、管状電気炉、合成反応装置、高精度ガス吸着量測定装置

生物系： 電気泳動装置、PCR 装置、蛍光顕微鏡、レーザー顕微鏡、嫌気グローブボックス、クリーンベンチ、オートクレーブ、高速液体クロマトグラフィー、微量分光光度計、マルチモードマイクロプレートリーダー、高速冷却遠心機、タンパク質クロマトグラフィーシステム、クロマトチャンバー、ディープフリーザー

2.4.6 学科の施設研究活動

(a)培養工学実験室（中畠）

中畠研究室では、2004 年に採取した南極産地衣を対象としその耐凍性機構の遺伝学的解明を行っている。*Umbilicaria aprina* を用いた次世代シーケンサーによる解析の結果、地衣菌に脂肪酸不飽和化酵素（ $\Delta 6$ -及び Δ -12FAD）遺伝子ゲノムの存在が認められた。現在、低温下における同遺伝子の発現を確認中である。また、日本産 *Sulzbacheromyces sinensis* の系統解析を行っている。同種の ITS 領域について、九州と沖縄産の間で数塩基に違いが見られ、遺伝的変異の境界が示唆された。さらに、ダイダイゴケ科地衣の系統分類解析も進めている。

(b)生物化学工学実験室（萩原、谷本）

萩原研究室ではタンパク質や酵素に着目してい

る。タンパク質はそれぞれが特有の立体構造を形成することによって、多種多様な機能を発揮する。生化学・遺伝子工学・構造生物学的手法を用いて、タンパク質の構造と機能の研究を進めている。主な研究テーマは、①光受容色素を合成する酵素の研究、②光合成アンテナの構築に関わる鉄硫黄タンパク質の構造機能解析、③タンパク質のリフォールディング、④DNA メチル化酵素に関する研究の3つである。これらの研究を行うにあたって、遺伝子組み換え大腸菌の作製やタンパク質の発現誘導、精製、結晶化、X線結晶構造解析、酵素活性測定などを遂行し、生命現象の解明に力を注いでいる。

谷本研究室では、生体内におけるタンパク質の構造形成、および機能発現の分子論的メカニズムの解明に向けて、計算機を用いた計算化学・理論化学的研究を展開している。特に、タンパク質が間違った構造を形成して凝集することにより引き起こされる神経変性疾患について、水溶液中もしくは脂質膜上でのタンパク質の凝集体形成のメカニズムの解明や有効な治療法開発のためのシミュレーション研究に主に取り組んでいる。

(c)生物化学実験室（笈木）

笈木研究室では、ゴム分解微生物を中心に研究を行っている。現在は以下に示す研究を行っている。①これまで報告のなかった合成ゴムを分解する微生物の分解メカニズムの解明を、長岡技科大との共同研究により実施中。②ゴム分解微生物の分解残渣を用いたマテリアルリサイクルを行っている。ゴム分解残渣の添加によりナイシン生産乳酸菌のナイシン生産能、ビフィズス菌のコレステロール蓄積抑制能向上が確認されている。これらを生かしたゴム分解残渣のマテリアルリサイクルを行う。

(d)生物工学実験室（中島）

中島研究室では主に①ゴム分解能を持つ新規微生物の探索や②久留米高専キャンパス内に生息する花から採取した天然酵母の活用に関する研究を

行っている。また、九州沖縄農業研究センターとの共同研究として、③九州北部の環境に適したムギの育種についても取り組んでいる。

(e)反応工学実験室（梶）

本実験室は反応工学及び分離工学に関連する研究を行う実験室であり、現在のところ、以下の抽出分離に関する研究を行っている。

①産業廃棄物からの有価資源回収に関する研究：分離対象金属として、抽出分離が困難とされるロジウムの抽出分離に関する研究を主に行っている。

②イオン液体の液液抽出への利用に関する研究：イオン液体は「環境に優しい溶剤」として注目されている。本研究では、上述の物質分離における抽出剤の代替としての利用に関する研究を進めている。

(f)化学工学実験室（我部研究室）

エネルギーや環境問題を解決する新規ナノカーボン材料に関する研究を行っている。優れた導電性、機械特性、高い表面積を兼ね備えており化学的にも安定であることからカーボンナノチューブやグラフェンといったナノカーボンをベースとした機能性材料の研究が盛んである。カーボンの表面化学や細孔構造といった基礎的な特性は最終的な目的物の機能に大きな影響を及ぼすためそれらのナノレベルでの理解が重要になってくる。炭素の構造をナノスケールで制御し更に様々な物質と組み合わせ高機能なナノカーボンを調製することで水素貯蔵材料や燃料電池用触媒への応用展開やバイオマス源の有効活用を目指している。

(g)高分子第二実験室（松田）

松田研究室では、①高分子材料の省エネルギー・低環境負荷での分解処理法や、②機能性高分子の開発について主に研究を実施している。①のテーマに関しては、特に、ゴムを分解対象とした研究を実施しており、酵素水溶液による常温でのゴムの低分子量化に成功している。②のテーマに関しては、特に、

医用関連高分子の開発を実施しており、生体吸収性
ステントや顕微解剖用途高分子材料の研究開発を
実施している。また、研究成果に関しての特許出願
を行っており、一部は特許化を達成している。

(h)有機機能化学実験室（石井研究室）

石井研究室は、有機合成を基盤とした機能性有機
材料の研究に着手している。自己集合化を鍵とする
超分子レベルでの分子設計に焦点を置き、研究を展
開している。テーマ①水系で強発光を示す自己会合
性赤色発光系の構築、②機械的刺激に応答する固体
発光材料の開発、③長波長領域に長寿命を示す室温
リン光色素の創製

石井教授は、令和5年度に物質・デバイス共同研
究賞を受賞し（室温リン光材料の開発）、研究成果が
本共同研究拠点ニュースレターに特集された。

(i)有機合成化学実験室（辻）

辻研究室の主な研究テーマは、①求核置換反応に
関する反応機構の解明、②多核 NMR を用いた無機
化合物の溶存状態に関する研究である。①の研究で
は、一分子求核置換反応と二分子求核置換反応が競
争する 2-Phenylethyl 系の反応を用い、それぞれの反
応に及ぼす脱離基や求核剤の効果について、¹³C
NMR を用い反応を追跡することにより、検討して
いる。②の研究では、アルミニウムの溶存状態に
ついて、²⁷Al の核磁気共鳴を測定することにより議
論している。錯形成について、これらの元素の核磁
気共鳴を直接測定することにより議論している。

(j)ケミカルエンジニアリング・エラストマー研究室 （渡邊）

渡邊研究室では、「ゴムの配合設計、混練及び各種
特性評価に関する研究」を行っており、特に「農産
廃棄物由来の無機フィラーを補強剤として用いた
エラストマーの創製と特性評価」に関する研究を展
開している。平成25年に改装された研究室には、密
閉型二軸ゴム混練機をはじめ、キュラストメーター

（加硫試験機）、ムーニー粘度計、テストプレス、引
張試験機等ゴムの研究開発に欠かせない機器類が
充実しており、学術研究のみならず、産学連携の共
同研究や社会人向けの公開講座（ゴムの実践技術講
座）にも力を入れている。

表2. 4. 2 卒業生の進路一覧

★令和5年度生物応用化学科卒業生(高専本科学生)

久留米工業高等専門学校専攻科進学(7名)
大学編入(8名):九州大学(工)2名、豊橋技術科学大学(工)3名、筑波
大学(生物)、東京農工大学(農)、広島大学(生)、愛媛大学(農)、熊本大
学(工)、九州工業大学(工)、九州工業大学(情)
就職(12名):第一三共ケミカルファーマ(株)4名、第一三共プロファーマ(株)、旭化成(株)、アステラス製薬(株)、花王(株)、三洋化成工業(株)、
高砂香料工業(株)、大日精化工業(株)、サントリーグループ、味の素
(株)、日本たばこ産業(株)、KM バイオロジクス(株)

専攻科生(生物応用化学コース)

大学院進学(1名):九州大学大学院システム生命科学府
就職(4名):沢井製薬(株)、(株)資生堂、(株)カネカ、東洋新薬(株)

★令和4年度生物応用化学科卒業生(高専本科学生)

久留米工業高等専門学校専攻科進学(5名)
大学編入(16名):九州大学(工)、九州大学(連携)、豊橋技術科学大学
(工)6名、長岡技術科学大学(工)2名、佐賀大学(理工)、九州工大(情
報)、新潟大学(理)、愛媛大学(農)、山口東京理科大学(工)、古賀国際
看護学院
就職(13名):旭化成(株)、(株)三井化学分析センター 2名、小川香料
(株)、第一三共ケミカルファーマ(株)2名、第一三共プロファーマ(株)2
名、アステラス製薬(株)、ニプロ(株)、MHI ソリューションテクノロジーズ
(株)、京セラ(株)、西部技研(株)
専攻科生(生物応用化学コース)
大学院進学(3名):九州大学大学院(工)、大阪大学大学院(生命)
就職(4名):沢井製薬(株)、タカギ(株)、東洋新薬(株)、海上自衛隊幹
部候補生学校

2.5 材料システム工学科

材料システム工学科は、H29年に材料工学科から学科名変更を行なった。産業界では既存の金属・セラミックス材料に関する技術だけでなく、ものづくりに関わる広い工学知識を持つ技術者の要求が高まっていた。そこで、新材料を含む材料工学だけでなく、機械的技術や材料評価技術などの機械工学的素養を持った材料技術者と育成を目指すこととし、材料の開発・設計・製造から利用、その後の寿命による破壊、廃棄、リサイクルまでシステムティックに学ぶことのできる学科とすることにした。この「材料システム工学科」への名称変更に合わせて、カリキュラム変更及び教員配置の見直しを行い、産業界から必要とされる人材の育成を行っている。

(1) 材料システム工学科施設・設備改修

表 2.5-1 に本学科における各部屋の名称と主要教育研究設備・機器を示す。

材料評価実験室、化学分析実験室、材料システム工学実験室、高圧機器分析室、産学民連携リサーチセンターは、各種学生実験に利用されることが多いが、卒業研究にも利用されている。特に、材料評価実験室は十分なスペースを有し、学生実験の他、公開講座、一日体験入学、各種講習会などにも利用されている。

ライトメタル研究室(川上研)では、粉末を原材料として金属製品に加工する『粉末冶金・焼結』に関する研究が行われている。

材料界面制御学研究室(森園研)では、鉄・グラファイト混合粉の雰囲気形成能に注目した、新しい材料の表面改質法の開発などに取り組んでいる。

材料組織制御研究室(山本研)では、鋳造など

表2.5-1 教育研究設備・機器

室名	設備・機器名
材料プロセス工学研究室	遊星型ボールミル、真空式グローブボックス、電子天秤、ホットプレート、ホットスターラー、マグネチックスターラー、攪拌機、ディップコーター、スピンコーター、定温乾燥器、インキュベーター、マッフル炉、卓上小型電気炉、熱間埋込みプレス機、研磨機、クイックコーター、超音波洗浄機、超純水製造装置
磁性材料研究室	局所排気装置、電子天秤、電気炉、ウォーターバス、pHメーター、超音波洗浄機
熱処理・焼成室	電気炉、蛍光X線分析装置
無機材料化学研究室	紫外可視分光光度計、小型色彩色差計、電気炉、ロータリーエバポレーター、計算用ワークステーション、局所排気装置
構造材料物性学研究室	イオンミリング装置、ツインジェット、電解研磨装置、電気炉、ホットスターラー、自動研磨機、pHメーター、真空排気装置
機能材料化学研究室	pHメーター、電気炉、超音波洗浄機、真空排気装置、ホットスターラー、電子天秤、恒温水槽
ライトメタル研究室	シリコニット電気炉、オイルバス、金属顕微鏡、ミクロ組織観察研磨装置
材料評価実験室	放射線測定実習キット、光学顕微鏡、ジョミニー一端焼入れ装置、電気炉、硬度計、フーリエ変換赤外分光光度計、熱分析装置、比熱測定装置、超音波探傷機、琢磨機
化学分析実験室	局所排気装置、イオン交換水製造装置、電子天秤、電気炉
電気化学研究室	ポテンショ・ガルバノスタット、関数発生装置、定電流発生装置、エレクトロメーター、回転ディスク電極、pHメーター、電導度計、クロノメーター、無抵抗電流計、データロガー
材料界面制御学研究室	小型ボックス炉、真空排気装置、窒素フロー炉、横型加熱炉、小型試料切断機、低速切断機、平面研磨機、精密研磨機、バフ研磨機、金属顕微鏡、微小硬度計、電子天秤、表面粗さ測定器、摩耗試験機
応用固体力学研究室	卓上旋盤、ポテンショスタット、計算用ワークステーション、電動カッター、超音波洗浄機、デジタルマクロスコープ、ハイスピードカメラ
金属加工研究室	微小硬度計、ピンディスク摩耗試験機、表面粗さ測定機、スガ摩耗試験機、高温酸化試験装置、局所排気装置、金属顕微鏡
材料システム工学実験室	高周波誘導加熱炉、シリコニット電気炉、ワイヤーカット放電加工機、圧延機、スポット溶接機、平面研削盤、ボール盤、精密切断機、スカイカット切断機、小型フライス盤、鋳型振動装置
材料組織制御研究室	オートグラフ材料試験機、ブリッジマン式一方凝固炉、琢磨機、真空炉
材料特性実験室	全自動変態測定機、X線回折装置、光学顕微鏡
高圧機器分析室	計装シャルピー衝撃試験機、放電プラズマ焼結機、小型オートグラフ材料試験機、オシロスコープ
産学民連携リサーチセンター	高温微小硬度計、X線回折装置、熱分析装置、走査型電子顕微鏡、透過型電子顕微鏡、イオンミリング装置、ICP発光分析装置、紫外可視近赤外分光光度計、走査型X線光電子分光分析装置、ナノ粒子測定装置、卓上顕微ラマン分光光度計
起業家工房(材料)	窒素製造装置、3Dプリンター、電気炉、第一原理計算用ワークステーション
物質工学実験室	比表面積/細孔分布測定装置

の融体加工を用いた新素材（特に高合金白鉄鉄などの耐摩耗材料）の研究が行われている。

材料プロセス工学研究室(岩田研)では、金属やセラミックスからなる原子力材料、生体材料の創製研究などが行われている。

電気化学研究室(矢野研)では、電析法を利用した合金皮膜の作製やそれらの皮膜特性に関する研究が行われている。

構造材料物性研究室(周研)では、燃料電池の微細構造の観察やマグネシウム合金に関する研究などが行われている。

表2.5-2 導入設備・機器、改修工事

年度	導入設備・機器・改修工事
R6	小林研究室を設置 4F奥山研究室→4F無機材料化学研究室へ
R5	窒素製造装置、3Dプリンター、電気炉、蛍光X線分析装置、ハイスピードカメラ 起業家工房設立(プレハブ)
R4	透過型電子顕微鏡、超音波探傷機、3Dデジタルマクロスコープ
R2	金属組織実験システム(試料調整、光学顕微鏡) 総合試作教育センター改修 (R4年度に産学民連携リサーチセンターと改称) 材料実習棟改修
H31,R1	硬さ試験システム(HR,HV)、大型モニター(2台)
H29	森園研究室、小袋研究室、佐々木研究室を設置 印刷室を分割し教員室と印刷室へ

機能材料化学研究室(清長研)では、貴金属の触媒作用に関する研究などが行われている。

応用固体力学研究室(佐々木研)では、吸蔵水素が亀裂の進展に及ぼす影響などの研究が行われている。

無機材料化学研究室(小袋研)では、ナノ粒子を利用した環境調和型セラミックス顔料に関する研究などが行われている。

磁性材料研究室(小林研)では、磁力が種々の物質の現象に与える影響について研究などが行われている。

表2.5-2に過去10年間の設備・機器の導入および施設の改修工事等の一覧を示す。令和2年に本校のものづくり教育等整備第2期計画により材料実習棟と総合試作教育センター(後に産学民連携リサーチセンターと改称)が改修された。それに前後して、数々の設備・機器の新規導入・更新が行われた。R5年には起業家育成を目的に新規に起業家工房が建設され、金属3Dプリンターや電気炉などを設置した。

(2) 教育研究陣容－人事の推移－

R6年10月現在の教員構成と主担当科目を表2.5-3に示す。このほかに、研究および実験実習の補助を務める、教育支援室の吉利用之技術職員や諸田亮技術職員と共に教育・研究を行っている。

H27年～R6年の教員の変遷について表2.5-4に示す。この10年間で4名の教員が定年や転出に

表2.5-3 令和6年10月現在の教員構成と主な担当科目

氏名	職	主な担当科目
川上 雄士	教授	金属物理学、金属材料学、金属熱処理論、品質工学、材料システム実験、構造材料学(専攻科)
森園 靖浩	教授	材料組織学、金属材料学、接合工学・複合材料、材料システム実験、輸送現象論(専攻科)
山本 郁	教授	図学、基礎設計製図、塑性加工学、融体加工学、材料システム実験、材料組織制御(専攻科)
岩田 憲幸	教授	基礎材料化学、セラミックス材料学、材料システム実験、機能性無機材料学(専攻科)
矢野 正明	准教授	電気化学、物理化学、環境工学、材料システム実験、表面処理工学(専攻科)
周 致露	准教授	情報処理、金属物理学、材料システム実験、結晶構造解析学、高温強度学(専攻科)
清長 友和	准教授	材料化学、物理化学、材料システム実験、触媒材料化学(専攻科)
佐々木 大輔	准教授	材料力学、機械加工学、応用設計製図・CAE、材料評価学、材料システム実験
小袋 由貴	准教授	材料化学、情報リテラシー、情報処理、材料システム実験、技術英語(専攻科)
小林 領太	助教	材料物性学、材料システム実験
奥山 哲也	教授 (九大連携)	材料物性学、半導体材料(専攻科)

表2.5-4 教員の変遷

年、月	氏名	職名	備考
R6年4月	小林 領太	助教	採用(鹿児島大学より)
R6年1月	奥山 哲也	教授	九州大学へ転出 クロス・アポイントメントにより久留米高専でも勤務
H29年10月	佐々木 大輔	助教	採用(石川高専より)
H29年4月	森園 靖浩	教授	採用(熊本大学より)
H29年4月	小袋 由貴	助教	採用
H28年5月	田中 慎一	教授	退職(逝去)
H28年3月	馬越 幹男	教授	定年退職(H30年3月まで再雇用)
H28年3月	笹栗 信也	教授	定年退職(H30年3月まで再雇用)
H27年4月	清長 友和	助教	採用(京都大学より)
H27年3月	久保 基一郎	講師	定年退職

表2.5-5 教員の昇任

年、月	氏名	備考
R6年9月	小袋 由貴	准教授へ昇任
R6年4月	佐々木 大輔	准教授へ昇任
R4年1月	清長 友和	准教授へ昇任
R3年4月	岩田 憲幸	教授へ昇任
H31年4月	清長 友和	講師へ昇任
H30年4月	山本 郁	教授へ昇任

より退職しており、4名の教員が赴任している。また、表2.5-5に示すようにのべ6名の教員が昇任している。

(3) 卒業生の進路

表2.5-6に過去10年間の卒業生の進路状況を示す。年度により割合は増減するが、就職が48～61%、専攻科が16～24%、大学編入学が13～30%である。進学した学生の多くは大学院まで進学している。就職先は従来と特に変化はなく、機械・

表2.5-6 卒業生の進路

年度	就職	専攻科進学	大学編入学	その他	計
R5	57%	24%	19%	0%	37
R4	48%	20%	30%	3%	40
R3	57%	20%	20%	3%	35
R2	49%	24%	24%	3%	37
H31,R1	57%	16%	24%	3%	37
H30	56%	22%	19%	3%	36
H29	57%	20%	17%	6%	35
H28	61%	21%	13%	5%	38
H27	61%	17%	22%	0%	36
H26	59%	19%	16%	5%	37

表2.5-7 論文・著書, 講演件数

年度	論文・著書	講演	合計
R5	7	28	35
R4	15	58	73
R3	13	36	49
R2	19	31	50
R1,H31	26	63	89
H30	17	58	75
H29	21	45	66
H28	11	40	51
H27	11	39	50
H26	10	29	39
平均	15.0	42.7	57.7

材料系の会社に就職した割合が 70%程度と多く, 材料技術者としての仕事に従事している。また, 進学した学生の多くは大企業で材料に関連した研究開発, 生産技術職に就いており, 大学等の公的機関の研究職あるいは研究教育職に従事している者も一定程度いる。

表2.5-8 教育・研究活動

年度	活動内容		担当者
R6	公開講座	銀細工	岩田
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 森園, 周, 佐々木
R5	公開講座	銀粘土細工	清長
	公開講座(福井高専にて)	銀粘土細工	清長, 山本
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 周, 佐々木, 奥山
	ハカセ塾	アルミニウム鑄造	川上, 森園, 岩田
	マテリアルコンテスト	破壊靱性競争	佐々木
R4	公開講座	銀粘土細工	清長
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 周, 奥山
	ハカセ塾	アルミニウム鑄造	川上, 山本, 森園
R3	公開講座(女子中高生限定)	銀粘土細工	小袋
	公開講座	銀粘土細工	佐々木
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 奥山
	ハカセ塾	アルミニウム鑄造	川上, 山本, 森園
R2	公開講座(女子中高生限定)	銀粘土細工	小袋
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 奥山
	ハカセ塾	銀粘土細工	小袋
H31,R1	公開講座	青銅鏡	森園
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 奥山
H30	公開講座	青銅鏡	森園
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 奥山
H29	公開講座	青銅鏡	川上, 山本, 矢野
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 奥山
H28	公開講座	青銅鏡	川上, 山本, 矢野
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 奥山
H27	公開講座	青銅鏡	川上, 山本, 矢野
	出前授業	近隣中学校へ	川上, 奥山

(4) 教育研究の取組・成果

詳細は, 第4章資料の4.3教職員関係に記載しており, そちらを参照して頂きたい。

著書, 発表論文等については, 表2.5-7に示すように, 論文は毎年10~20件程度, 口頭発表は30~60件程度行っている。

その他, 表2.5-8に示すように公開講座, 中学校への出前授業, マテリアルコンテスト, 講習会等の講師等も行っている。

2.6 一般文科

2.6.1 教育・研究陣容 ―人事の推移―

高専の5年間一貫教育における一般科目の目標は、専門科目と相まって優れた技術者の育成を期するため、広い視野に立った社会人として必要な教養と創造性に富む、個性豊かな人間形成を行うことにあ
る。特に一般科目文科系は、国際感覚を持って活躍
できる技術者に必要な教養と語学力の養成を主眼
とし、工業高等専門学校における「国語」「社会」「保
健・体育」「芸術」「外国語」の基礎科目と、大学レ
ベルの人文社会科学系教養教育を行っている。

常勤の科目構成は、英語5名、国語2名、社会2
名、体育3名の常勤教員12名と、2024年4月から
秋田高専より石塚政吾嘱託教授を国語科に加えた
計13名で構成されている。役職では、教授5名、准
教授5名、助教2名となっており、学校で定めた一
般文科人員枠の定数を満たした配置となっている。

本校の教育・研究活動に大きな功績を残して退
職・転出された教員名、職名、担当科目、専門分野、
在職期間を以下に記す。

中畑義明教授（英語学、平成16年4月～平成24年
3月、特任・嘱託教授 平成25年4月～平成27年3
月）、河合伸治准教授（財政学、平成24年9月～平
成27年3月）、江島孝則教授（言語学・英語教育、
昭和56年4月～平成26年3月、特任・嘱託教授 平
成26年4月～平成28年3月）、平元道雄教授（中
国哲学、昭和63年4月～平成26年3月、特任教授
平成26年4月～平成28年3月）、小宮厚准教授（中
国思想、昭和60年4月～平成28年3月、特任准教
授 平成28年4月～平成30年3月）、米永正敏准教
授（英語教育、平成2年4月～平成31年3月、嘱託
准教授 平成31年4月～令和3年3月）、藤木篤准
教授（技術者・環境倫理学、平成23年4月～平成30
年3月）、安部規子教授（第二言語習得、平成26年
4月～令和3年3月、嘱託教授 令和3年4月～令和

5年3月）、小林美恵子教授（近現代日本女性文学、
平成28年4月～令和4年3月、令和4年4月沼津
高専へ転籍）、福田かおる教授（社会人類学、平成15
年4月～令和4年3月、嘱託教授 令和4年4月～
令和6年3月）、藍澤光晴准教授（経済史、平成27
年4月～令和5年3月）、西原雅博（英語教育、令和
31年4月～令和2年3月）

なお、江島孝則嘱託教授は平成28年4月～平成
31年3月、小宮厚特任准教授は平成30年4月～令
和2年3月まで非常勤としても教鞭を取られている。

2.6.2 教育研究設備

平成31年に図書館棟2階の英語科「デジタルコ
ンテンツ作成スタジオ」を「総合情報センターワー
クショップ」として改修し、生物・化学実験棟旧LAN
管理室に「英語演習室」を設け、本校の国際交流行
事での交流会や英会話部の活動に使用している。

令和4年3月に同じく図書館棟2階の英語科「PC
学習室」の老朽化したPCを撤去し、洋書多読用図
書を図書館より移動し、英語洋書多読室として活用
している。現在、約1,150冊と外部より寄付のあつ
た約270冊の計1,400冊以上の洋書を揃え、主に高
学年での授業で洋書多読活動を取り入れている。

平成31年10月から翌2月にかけて、老朽化が目
立っていた一般文科学科棟の改修が行われるに伴
い、一般文科学科の教員が専攻科棟、試作センター、
制御棟に間借りする形でそれぞれ仮教員室へ移動
した。改修では外壁・屋上防水、トイレ改修（3階女
子トイレ新設/2階男子トイレ/1階女子トイレにそれ
ぞれ障害者用トイレ新設、1階にはAll Gender Toilet
も新設し、多様化に対応）を行った。3階には学生
の学習や教員の会議等に活用するラーニングコモ
ンズを新設した。平成31年3月の改修終了に合わ
せ、教科によるゾーニングの観点から教員室再配置
し、より充実した教育・研究活動が行われている。

2.6.3 教育研究活動 ―現状と成果―

高専教育は学年進行とともに学科専門科目の比重が増す楔形を特徴としており、優れた技術者に欠かせない幅広い知識と教養、そして豊かな人間性を備えた人材を育成することが、一般科目文科系教員に課された使命である。一方、高等教育機関である高専では、大学受験のための受験指導も高等学校学習指導要領にも縛られることもないため、学生の興味関心に応じた学びの機会を提供することも求められている。教員個々人の専門分野を生かしつつ、文科系科目全般を通して、学生の感性・思考力・表現力・創造力を高める工夫を行っている。

「英語」では、基礎的な語彙や文法の習得に加え、英語圏文化やプレゼンテーションの練習を取り入れた授業、多読活動など個人レベルに応じた授業を実施している。平成 23 年から主に入学者を対象に継続してきた英検 IBA テストは、令和 6 年に TOEIC Bridge に移行した。e-learning 教材 NetAcademy も平成 26 年の導入より活用している。「国語」では、基礎的な漢字力や語彙力の養成のみならず、小説の読み取りや作文を通して情操や感性を培い、相手を意識した表現力・説明力が身につくよう努めている。

「社会」では、社会科各分野の基礎的な知識の定着を図るとともに、論述試験やレポート作成等を通して、自分の考えを論理的に伝える能力を養ってきた。

「保健・体育」では、運動技術や健康・安全に関する知識の習得だけでなく、運動を通して、ルールを守ることや健全な人間関係を保つ態度を養っている。そして「芸術系科目」では、大学から非常勤講師を招き、美術や音楽の授業を通して、豊かな感性と表現力・コミュニケーション力を養成している。

平成 31 年度、担当科目数の整理と科目名称等の大幅な変更を行った。常勤は年 16 コマが基本となり、平成 30 年度まで 20 名いた非常勤講師は、ここ数年は 12 名程度に減少した。「国語」では、「国語Ⅰ、Ⅱ」の表記を「国語 1, 2」と改めるとともに、「国語Ⅲ」を「リテラシー実践」と名称変更し、内容も従来の国語教育に加えてより実践的なものに充実さ

せた。「社会」では、「日本史」から「人社会科学探究 1, 2」へ、新高等学校学習指導要領に合わせた変更により、「世界史」を「歴史」に、「政治・経済」を「公共」にそれぞれ変更している。「地理」は非常勤講師に依頼している。「体育」は「体育Ⅳ・Ⅴ」を「生涯スポーツ 1, 2」に変更した。専攻科では令和 2 年度より「日本語コミュニケーション」と「生涯スポーツ特論」を選択科目として新たに開講し、それぞれ国語・体育教員が担当することになった。

本科 4・5 年対象の「一般選択科目」では、Ⅰ群（人文社会学系）を廃止した。また、Ⅱ群（語学系）3 言語のうちドイツ語に代わりフランス語を入れた選択科目「第二外国語」に改編した。Ⅰ群に代えて新たに「リベラルアーツ特論 1, 2」として新設し、各学科から学生 3 名前後を振り分け、少人数・学科横断科目として各教員の専門分野への入門的な授業を実施している。令和 6 年度後期現在、一般理科教員 7 名・機械科教員 1 名と 18 科目を展開している。

令和 2 年から流行した新型コロナウイルスによる休校措置や登校制限により、遠隔授業対応を余儀なくされ、常勤・非常勤を問わず必要に迫られる形で Microsoft Teams を使用した遠隔授業を開始した。授業もパワーポイントの使用や課題等のオンライン提出などデジタル化が急速に進展した。令和 5 年 5 月の新型コロナウイルスの 5 類移行に伴い徐々に平常化した。この間身に付けたスキルは、今後の校務や教育研究活動に活かされていくと思われる。合理的配慮学生へのきめ細やかな対応、学生の安全面に配慮した災害時の迅速な学校による登校制限判断なども可能となった。本校教職員と非常勤の先生方の惜しみない努力に敬意を表したい。

平成 30 年に鴨川教授が、令和 5 年には常木准教授が博士号（文学）をそれぞれ取得された。令和 6 年には白井助教が 1 か月間の在外研究（台湾・香港・スペイン）を行った。科研費取得数もここ 10 年で増加し（藤木・藍澤・横溝・赤塚・鴨川・岡本・常木）、教育でもベストティーチャー賞（常木・横溝・大家）を受賞している。課外活動では福嶋准教授がサッカー

一全国高専大会で全国優勝（令和 5 年度）、徳永正尚准教授が中心となって指導した九州沖縄地区英語プレゼンテーションコンテストで連続入賞（令和 3 年～令和 6 年）と顕著な成績を収めている。

一般文科は、全学科の 1・2 年担任や主に低学年の授業担当であるため、学生の学校生活の礎を築く重要な役割を担っている。近年、合理的配慮やいじめ・ハラスメントの防止への理解が進み、ケアすべき内容も質量ともに変化した。今後も多忙化・複雑化が進むと懸念されるが、校務効率化・負担軽減という喫緊の課題に取り組みながら、より一層、一般学科としての使命を果たしていきたいと考えている。

現在の一般科目教員 13 名の担当授業科目、氏名、職名、専門分野、本校着任年月を以下に記す。

（１）英語関連科目（英語 1～3、応用英語 1・2、実践英語 I～III）

- ・金城博之 教授（英国文学、英語教育）
平成 17 年 9 月～
- ・徳永美紀 教授（英語教育学）
令和 3 年 4 月～
- ・横溝彰彦 教授（コミュニケーション学）
平成 27 年 4 月～
- ・徳永正尚 准教授（英語教育学）
平成 31 年 4 月～
- ・白井龍馬 助教（英語教授法、CLIL）
令和 5 年 4 月～

（２）国語関連科目（国語 1・2、リテラシー実践、日本語（留学生）、日本語コミュニケーション）

- ・鴨川都美 教授（日本近現代演劇/文学）
平成 30 年 4 月～
- ・常木佳奈 准教授（日本文学）
令和 2 年 4 月～
- ・石塚政吾 嘱託教授（日本近代文学）
令和 6 年 4 月～

（３）社会関連科目（地理、歴史、公共、人文社会科学探求 1・2）

- ・岡本和也 准教授（中世東地中海世界の歴史）

平成 19 年 4 月～

- ・大家慎也 助教（哲学、倫理学）

令和 6 年 4 月～

（４）体育関連科目（保健体育 1～3、生涯スポーツ 1・2、生涯スポーツ特論）

- ・龍頭信二 教授（運動生理学）

平成 8 年 4 月～

- ・赤塚康介 准教授（運動生理学）

平成 20 年 4 月～

- ・福嶋洋 准教授（スポーツ医科学、コーチング）

令和 4 年 4 月～

上記のほか、リベラルアーツ特論にて専門分野または関連する分野に特化した科目を開講している。

- ・「日本語ディベート」（金城）
- ・「TOEIC Listening and Reading」（徳永美）
- ・「コミュニケーション学入門」（横溝）
- ・「大学入試問題研究（英語）」（徳永正）
- ・「日本現代演劇：批評入門」（鴨川）
- ・「小説の近代、近代の小説」（石塚）
- ・「デジタル人文学」（常木）
- ・「アラビア語入門」（岡本）
- ・「健康科学」（赤塚）
- ・「技術の哲学」（大家）
- ・「健康と対話」（福嶋）

この他、以下の科目を非常勤講師に依頼している。

- ・R・カタラーノ（英表 2 久留米大非常勤）
- ・E・F・ヒギンズ（英表 2 エルフ英会話講師）
- ・堀奈緒子（応用英語 1・2 久留米大非常勤）
- ・檜崎洋一郎（国語 1・2 本校非常勤）
- ・永吉守（地理、人文科学探求 西南学院大非常勤）
- ・中島洋典（地理 本校非常勤）
- ・満園良一（生涯スポーツ 1・2 久留米大教授）
- ・藤井菜摘（音楽・九州竜谷短大講師）
- ・金大雄（美術・九州大大学院教授）
- ・趙淑範（中国語・国際医療福祉大非常勤）
- ・藤知映（韓国語・九州産業大非常勤）
- ・ジャンマリー・プルドン（仏語・語学学校経営）

2.7 一般理科

2.7.1 教育研究陣容—人事の推移—

一般理科の科目担当教員は、令和6年4月現在、物理4名、化学2名、数学6名で構成され、理科系一般科目の他、一般の専門科目と専攻科の専門科目を担当している。平成16年4月から平成26年4月までの人事の推移については50年誌に記載しているので、ここでは平成26年4月から令和6年4月までの人事の推移を示す（氏名・職（H26年当時～R6.4現在）・担当科目の順に示す）。

（1）数学

・松田康雄 教授（定年退職H31.3）～特任教授（長崎大学へ転任R2.3）

・伊藤公毅 准教授

H27.3（豊橋科学技術大学へ転任）

・川島克利 准教授

R2.3（大阪産業大学へ転任）

・菰田智恵子 准教授～教授（R4.10昇任）（R5.4～R6.3木更津高専介護支援制度）

数学1、数学2A、数学2B、数学3A、数学3B、リベラルアーツ特論1・2

・酒井道宏 准教授～教授（H30.4昇任）

数学1、数学2A、数学2B、数学3A、数学3B、リベラルアーツ特論1・2、応用数理I、応用数理III

・高橋正郎 准教授～教授（R6.10昇任）

数学1、数学2A、数学2B、数学3A、数学3B、リベラルアーツ特論1・2、応用数理III

・三木 弘史 准教授（R2.10赴任）

数学1、数学2B、数学3A・3B、リベラルアーツ特論1・2、応用数理2

・沖田 匡聡 助教（H27.4赴任）（H30.4～H31.3有明高専人事交流）～講師～准教授（R4.1昇任）

数学1、数学2A、数学2B、数学3A、数学3B、リベラルアーツ特論1・2、応用数理1

・中村駿介 助教（R2.4赴任）～准教授（R4.10昇任）

数学1、数学2A、数学2B、数学3A、数学3B、リベラルアーツ特論1・2

（2）物理

・篠島弘幸 教授（定年退職R5.3）～特任教授（R5.4）
物理、応用物理1、応用物理2、応用物理実験、統計力学及び熱力学

・山崎有司 准教授

物理、応用物理1、応用物理2、応用物理実験

・谷 太郎 准教授

物理、応用物理1、応用物理2、応用物理実験、現代物理学

・小山 暁 准教授（介護支援制度豊田高専より赴任R4.4）

応用物理2、応用物理実験、リベラルアーツ特論、量子力学

（3）化学

・宮本久一 教授

化学1、化学2、化学実験、分子機能化学、応用化学実験、卒業研究、専攻科研究基礎、専攻科研究論文

・黒飛 敬 准教授

化学1、化学2、化学実験、分子機能化学、応用化学実験、卒業研究、専攻科研究基礎、専攻科研究論文

2.7.2 教育研究設備—特色と活用—

（1）数学科

数学科では、各教員がそれぞれの研究室にコンピュータとその拡張システムを備えて、教材や問題作りおよび情報処理など、教育・研究のために活用している。

（2）物理学科

もの作りセンター内に薄膜作製実験室を置き、真空蒸着や高速原子線を用いたスパッタ等の薄膜作製装置、触針式表面粗さ計などを設置している。

応用物理実験室およびその関連施設の改修などにより、教育面での充実を図っている。

(3) 化学科

平成 30 年度の一般文理科棟耐震改修に伴い、一般化学中央実験室、一般化学分析室、一般化学実験室、多目的学習室を新たに整備し、令和 5 年度には、スタートアップ事業で卓上フードの設置など、教育・研究設備の充実を図りつつある。

2.7.3 教育研究活動—現状と成果—

数学、物理、化学など、専門科目を修得するための基礎となる能力を培うことを目指している。また、各教員の近年の研究状況を紹介する。

(1) 数学

・菰田智恵子

無限次元空間に関する基礎的な研究をしている。特に、無限次元空間の一つである C -空間について、コンパクト化定理、写像定理などの基本的な定理を研究している。また、動的幾何システムを活用した数学 e ラーニングに取り組んでいる。

・酒井道宏

研究活動では、ファイバーワイズ空間と呼ばれる空間に対するホモトピー論の研究を行っている。教育活動では、TA を活用した 1 年生向けの数学補習活動（数活）の企画・運営、4 年次学科横断ゼミのリベラルアーツ特論において、STEAM 教育を実施している。

・高橋正郎

ベクトル束を利用した対称空間内の部分多様体の微分幾何的な研究を行っている。

・三木 弘史

自然現象や社会現象のモデルとなる確率過程において、現れる秩序や形態、またその背後にある機構について、計算機による数値計算も援用しながら研究を行っている。

・沖田 匡聡

流体の運動を記述する非線型偏微分方程式の数学

解析を行っている。具体的には Navier-Stokes 方程式などの解の存在・一意性やその解の挙動に関する研究をしている。

・中村駿介

グラフ理論の研究を行っている。グラフとは、ネットワークを数学的モデル化したものである。ネットワークとしての強さを表す連結度について、一般的に成立する性質を研究している。

(2) 物理

・篠島弘幸

超短パルス光を用いた過渡分光法による低次元系半導体の物性研究、光を用いた環境測定のための高感度センシング技術開発の研究、シリコンを基盤とする光電子融合集積回路技術の研究、光制御技術の研究を行ってきた。近年は、災害復興に強いインフラ構築の物理モデル研究に取り組んでいる。

・山崎有司

研究の専門分野は定温物性であるが、本校に赴任後は主に薄膜の作製と評価を主題としている。

・谷 太郎

超弦理論の研究を行っている。特に、コンパクト化空間の幾何学的・代数的性質を調べることにより、現実の 4 次元理論とのつながりやミクロの世界における時空の構造を理解しようとしている。

・小山 暁

鎖状分子系の分子動力学シミュレーションで、結晶化・ガラス転移・固体-固体相転移を再現し、スペクトル分析により、転移現象におけるダイナミクスを研究している。

(3) 化学

・宮本久一

新規機能性有機材料の開発を行っている。例えば、アキラルな分子を結晶中でキラルに配列した状態で

化学反応をして、医薬品として有用な光学活性体を得る研究を行っている。

・黒飛 敬

新規 π 共役系化合物の創出を主軸に新たな機能性の獲得について探求している。特に生理活性やエネルギー変換に関与する物質について、分子構造と機能性の相関関係の解明に取り組んでいる。

2.8 専攻科

2.8.1 専攻科の概略と歴史

専攻科の設置は、平成元(1989)年に九州大学から赴任した第三代校長の長谷川修氏の主導で、平成3(1991)年度から専攻科設置の準備が開始された。久留米高専は平成4(1992)年に準備委員会を立ち上げ、教育目標や内容、専攻の編成、教育課程、教授陣の構成等の具体的な検討、書類作成が進められた。その結果、同年度内に専攻科設置が認められ、平成5(1993)年4月から「機械・電気システム工学専攻」と「物質工学専攻」の2専攻にて、九州で最初の専攻科として本校に設置された。機械・電気システム工学専攻は、本科の機械工学科、電気電子工学科、制御情報工学科を母体とするもので、学生入学定員は12名である。物質工学専攻は、本科の生物応用化学学科、材料システム工学科を母体とするもので、学生入学定員は8名である。

専攻科の運営は、専攻科主事、専攻科主事補、各学科から選出された専攻科委員からなる専攻科委員会で行われている。表2.8-1に最近10年間における専攻科主事、主事補の移り変わりを示す。令和3年度以降、主事室の人員が大幅に縮小され、主事1名、主事補2名の体制となり、これまで主事補が担っていた担任業務の一部は研究指導教員が担うこととなった。

2.8.2 最近10年における変遷・出来事

2.8.2.1 JABEEの廃止

平成16(2004)年度にJABEE新規認定審査を受け、5つの教育プログラム(機械工学プログラム、電気電子工学プログラム、制御情報工学プログラム、生物応用化学プログラム、材料工学プログラム)が審査に合格しJABEE認定を取得した。その後、平成21(2009)年度と平成29(2017)年度(機械工学プログラムは平成30年度)の中間審査を経てJABEEプログラムを維持していたが、維持にかかる費用の増大と多大な事務負担を考慮して以降の審査を受審しないことを決定した。

表 2.8-1 歴代の専攻科主事及び主事補

	専攻科主事	専攻科主事補	
H27	池田(電気)	大津(機械)、綾部(制御) 石井(生化)、奥山(材料)、 金城(文科)	
H28	池田(電気)	谷野(機械)、綾部(制御) 石井(生化)、奥山(材料)、 金城(文科)	
H29-30	奥山(材料)	谷野(機械)、江頭(制御)、 津田(生化)、山本郁(材料)	
R1	奥山(材料)	谷野(機械)、江頭(制御)、 山本郁(材料)	
R2	奥山(材料)	谷野(機械)、江頭(制御)、 笈木(生化)、山本郁(材料)	
R3-4	川上(材料)	堺(制御)	黒飛(理科)
R5	川上(材料)	堺(制御)	松田(生化)
R6	川上(材料)	南山(機械)	松田(生化)

2.8.2.2 認定専攻科(特例適用専攻科)

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構による学位授与は、平成26(2014)年度以前は高等専門学校を卒業した後に大学または「認定専攻科」において所定の単位を修得し、かつ機構の審査に合格したもののに対して行われてきた。平成27(2015)年度以降は一定の実績を有する認定専攻科を「特例適用専攻科」として認定しその在学者に対して、その学修の成果に基づいて学士の学位の授与を行う方途について検討し、機構の学位審査会の審議を経て、学士の学位の授与に係る特例を設けることとなった。久留米高専専攻科もこの「特例適用専攻科」として認定され、平成27(2015)年度以降の修了生に対して新しい制度での学位が授与されている。令和4年度には、「特例適用専攻科」としての要件を満足しているか教育の実施状況などについての機構による審査が行われ、再度「特例適用専攻科」として認定された。なお、平成27年度以降の新制度による学位授与で修了生

309 名に対し 309 名の学位が授与されており、学位取得率は 100%となっている。

2.8.2.3 専攻科 30 周年記念講演会

令和 5 年度に専攻科設立 30 周年を記念し、社会において活躍している各コースの修了生を招へいし記念講演会を開催した。平成 24 年度機械・電気システム工学専攻(情報工学コース)修了生の京都大学大学院情報学研究科 助教 井上 昂治 氏による「AI 研究者の涵養な旅～専攻科時代を振り返って～」の演題で基調講演を行った。その後パネルディスカッションとして、「専攻科 修了生のキャリアパスと専攻科生に求めるもの」のタイトルで各コースの修了生に登壇していただき、活発なディスカッションを行った。開催を高専祭期間中に設定したため、専攻科生、本科生、保護者、一般の方からの多数の参加者があり、会場の D4 教室が満員となる盛況であった。30 周年記念講演会の開催概要、当日の様子を以下に示す。

専攻科設立 30 周年記念講演会開催概要

1. 日時 令和 5 年 11 月 3 日 (金曜日)

13:30～15:30

2. 場所 D4 教室

3. 参加対象者 専攻科 1, 2 年、専攻科進学予定者、本科生 (希望者)、保護者、一般

4. 次第等

開会の挨拶 松村 晶 校長

第 I 部 基調講演

「AI 研究者の涵養な旅-専攻科時代を振り返って-」
京都大学 大学院情報学研究科 助教
井上 昂治 氏 (平成 25 年 3 月 機械・電気システム工学専攻修了)

第 II 部 パネルディスカッション

「専攻科 修了生のキャリアパスと専攻科生に求めるもの」

〈パネリスト〉

機械工学コース修了 (令和 2 年 3 月)

上野 虎太郎 氏

九州大学大学院博士課程 2 年生

電気電子工学コース修了 (平成 29 年 3 月)

田坂 彩夏 氏

キャノンシステムアンドサポート(株)

制御情報工学コース修了 (平成 25 年 3 月)

井上 昂治 氏

京都大学 大学院情報学研究科 助教

生物応用化学コース修了 (平成 27 年 3 月)

田中 征矢 氏

福岡県八女普及指導センター

材料工学コース修了 (平成 11 年 3 月)

石見 知由 氏

東洋鋼鈑株式会社

〈ファシリテーター〉 松田 貴暁 専攻科主事補



写真 2.8.2.3-1 井上 昂治 氏による基調講演



写真 2.8.2.3-2 パネルディスカッション

2.8.2.4 専攻科生による研究発表

平成 26 年度から令和 4 年度までの専攻科生による学会発表・論文投稿数の推移を図 2.8.2.4-1 に示す。R1 年度までは学生ひとりあたり約 2 件の発表を行っていたが、COVID-19 パンデミックの影響を受け学会活動が縮小されて R2 年度以降の発表数が激減している。その後、学会活動などの制限がなくなり、学生の研究発表活動も再度活性化している。また、機構本部の方針として国際化を推進することの支援が増えたおかげで COVID-19 後は国際学会での発表も増加している。

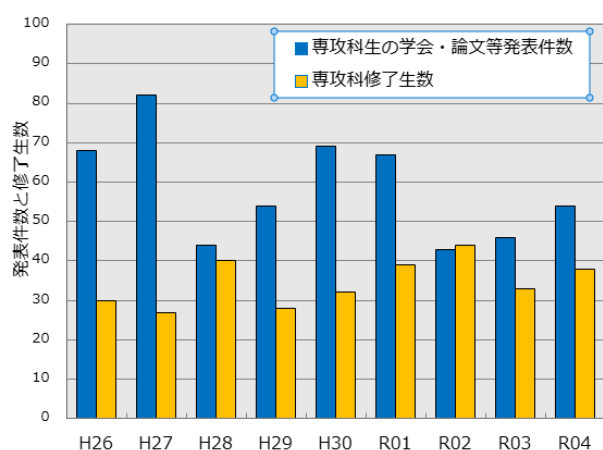


図 2.8.2.4-1 学会論文等への発表数と修了者数

2.8.3 教育課程

本校専攻科の教育課程、授業担当教員は、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構により認定され実施されている。特例による学位授与申請は、高等専門学校学科と専攻科において、申請する専攻の区分に応じて機構があらかじめ認定した「科目表」に記載されている授業科目の中から単位修得の要件を満たすように履修している必要がある。

特に、専攻科の最終学年において大学の学部（学士課程）4 年間に相当する学修を総括する「学修総まとめ科目」は、従来の学位授与の審査における「試験（小論文試験または面接試験）」に代わる重要な授業科目となる。「特例適用専攻科」として認定されたことから、専攻科 2 年生で実施している専攻科研究論文を「学修総まとめ科目」として教育課程を設計

し、専攻分野を通じて培うことが求められる能力と専攻に係る学修・探究の成果を評価して単位を与えることとしている。

2.8.3.1 九大連携教育プログラム

教育課程において、この 10 年間での最大の進化をしているのは九大工学部・九州沖縄 9 高専連携教育プログラム(以下 九大連携教育プログラム) が始まったことである。九大連携教育プログラムは、平成 30(2018)年度から当時の奥山専攻科主事を九州・沖縄 9 高専側の代表者として九州大学工学部の改組とあわせて進められた。第 1 回の連携教育プログラム協議会は、平成 31 年 3 月末に九州・沖縄 9 高専の校長、九州大学副学長、工学部長、研究院長などをメンバーとして開催された。その後、高専、九州大学で協議を重ね、令和 5 年 4 月に第一期生 21 名(定員 20 名)が連携教育プログラム生として、各高専専攻科と九州大学工学部融合基礎工学科に入学した。久留米高専からは第一期生として 8 名の入学があった。その後、久留米高専から令和 6 年度に 3 名入学、令和 7 年度に 3 名合格している。

九大連携教育プログラムは、高専の専攻科に在籍しながら九州大学工学部融合基礎工学科 3～4 年次に在籍し、双方の修了要件単位を取得することで、九州大学から学士(工学)の学位と高専から専攻科の修了証がそれぞれ授与される。

九大連携教育プログラム教育課程の概念

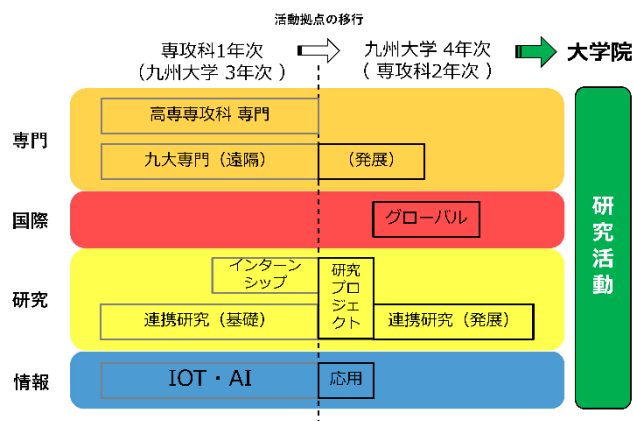


図 2.8.3.1 九大連携教育プログラム教育課程

入学後の高専専攻科1年次(大学3年次)は、各高専のキャンパスが学修の拠点になり、各専攻科の必修・選択科目(研究基礎力を身に付けるための実験・実習系科目や情報系科目を含む)を学び、さらに、九大から配信される同時双方向型遠隔授業(週1科目程度)を受講する。高専専攻科2年次(大学4年次)は、九州大学筑紫キャンパスが学修の拠点になり、所属研究室での本格的な研究生活に入る。春学期に開講される学科共通の発展科目やグローバル科目(英語)を、1年次から九大で学んできた学生達と共に学び、課題解決型の研究プロジェクト科目にも参加する。

双方の教員による連携した研究指導を通じて研究力強化を図ることが本プログラムの特色の1つである。編入学時には本学科の所属研究室が決まっており、卒業研究に早期着手することもできる。専攻科でも研究室配属されており、双方の指導教員が連携・協力して、早期に研究指導する点が従来の編入学にはない特徴になる。

2.8.4 入学者状況

入学者の選抜は、高等専門学校長又は学科長の推薦による選抜(九大連携教育プログラムを含む)と学力による選抜(前期)を5月末、学力による選抜(後期)及び企業等の推薦による社会人選抜を10月に実施している。

専攻科への入学者数は最近10年間では表2.8.4に示すように定員20名に対して平均37名程度で推移しており、入試倍率も3倍以上と高い人気になっている。また、平成26年度以前は他高専からの入学もあったが、最近10年間は久留米高専本科からの進学者のみになっている。

表 2.8.4 専攻科入学者の状況

年度	機電専攻	物質専攻	合計
H27	20	13	33
H28	16	13	29
H29	18	14	32
H30	28	11	39
R 1	26	21	47
R 2	20	13	33
R 3	23	15	38
R 4	26	12	38
R 5	21(4)	18(4)	39
R 6	29(2)	16(1)	45

() 内の数値は九大連携教育プログラム生で内数

2.8.5 進路状況

平成27年度から令和5年度までの専攻科修了生は309名となり、前述の通り全員が専攻科修了と同時に学位授与機構から学士(工学)の学位が授与されている。最近10年間の専攻科修了後の進路は図2.8.5に示すように、就職が40%、進学が60%で大学院に進学する学生が増えている。社会においてより高度な技術や知識が要求されるようになったためであると思われる。就職先は九州圏外の上場企業などの一流企業に就職する学生が多い。進学する学生の半数以上は九州大学大学院への進学である。

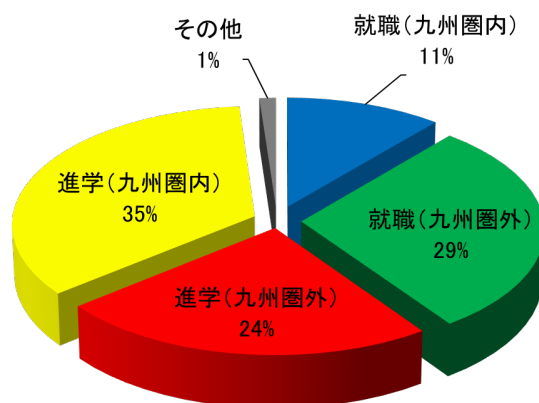


図 2.8.5 最近 10 年間の進路状況

第3章 学生の活動（最近の10年）

3.1 学生会の取り組み

本校学生会は学生大会、代議員会、中央執行委員会、学級会及び監査委員会の機関を置いている。そのうち中央執行委員会は総務、文化、体育及び渉外の四局を統括し、学生会予算の立案、執行及び学生会行事の立案、運営を行っている。

まず初めに学生会最高の議決機関である学生大会について述べる。定足数は学生数の三分の二以上と定められてはいるが、定足数に足りず、流会することもあり、学生には学生自治の観点から学生大会の意義を理解した上で、もっと積極的に参加し、意見に力を持たせ、学生自治を守るように指導しているところである。中央執行委員会より発行される機関紙「覚醒」のここ2年の議題を見ると、前期では高専祭、体育祭及び予餞会実行委員会発足案に加えて決算報告、予算案、監査報告を、後期は実行委員会解散、発足案に加えて高専祭決算報告及び応援団会計報告といったもので毎年代わり映えしない議題が並び、承認してきた状況にある。御存じの通り、令和2年以降の2年間は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学生会の取組に大きく影響を及ぼしたことは想像に難くない。学生大会のような一堂に会する機会は避け、必要に応じて代議員会を開催し、議決してきた2～3年を経て、現在に至っている。学生会の目的である「学生生活の向上をはかること」を達成するためには、もっと学生たちが自分たちの意見に対し、活発に議論し、学生の総意として意見に重みをもたせるための時間と労力を惜しまないことを切に願っている。

学生会行事については文化部発表会（6月）、文化祭（11月）、体育祭（11月）、予餞会（1月）と実行委員会組織を作り、企画・運営している。これらについては、後半の学生会渉外局のところでも触れたい。その他の学生会行事として行っていることとして、クラスマッチがある。前期は5月に、後期は12月にそれぞれ1日ずつ、学年暦に割り当てられ、学生会体育局が実施競技を決定するなど主導的立

場を担っている。最近では世相を反映してか、eスポーツが実施されるようになり、対戦型ゲームを通じて学生たちが一喜一憂している姿を見ていると、時代を感じる今日この頃である。

次に、近年学生会が主体となって実施している学生活動において特筆すべきものとして2つを取り挙げたい。一つは学内外清掃ボランティア活動である。本校では学生会による清掃活動を年2回行い、夏は校内、春は通学路も含めた校内外清掃活動を実施している。この取組によって、毎年増え続ける学内放置自転車が撤去でき、景観も良くなっている。また多くの学生がこの活動に参加することにより学生の美化意識も高まったとも言える。二つ目は一年生合宿研修におけるピアサポート活動である。ピアサポートとは同じような共通項と対等性を持つ人同士（ピア）の支え合いを表す言葉である。本校では、令和5年度からピアサポート体制の構築及びピアサポートマインドの醸成を図るべく、ピアサポーターを育成する体制作りから着手した。一年生合宿研修において新入生がスムーズに学生生活に馴染めるよう、先輩学生が人間関係構築を図るイベント等を企画・立案するとともに協力体制づくりや自立した生活が送れるよう様々な面から助言等を行い、成長を促すためのサポート支援を行ってくれた。上級生のリーダー研修の効果を高めたと同時にピアサポーターとしての意識が向上し、研修後のアンケートでも様々な場面で新入生へのピアサポートを実施できたと高評価回答をしていることは喜ばしい限りであった。

課外活動にも少し目を向けたい。令和2年度と3年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、九州沖縄地区高専体育大会が開催されなかった。5年間の集大成として開催を心待ちにしていた学生たちにとってはさぞかし悔しい思いが残ったと思われる。競技によっては代替大会が開催されたと聞いているため、彼らの成果披露の場があったとしたら嬉しい限りである。そんな時代を乗り越え、ここ数

年、体育局クラブの活躍は目を見張るものがある。令和5年度のサッカー部の全国大会初制覇をはじめ、全国高専ラグビー競技第3位など多くのクラブが地区大会や全国大会で良績を残してくれている。文化局クラブも第34回全国高専プログラミングコンテスト自由部門で特別賞、AGEST（アジェスト）企業賞、Blueship（ブルーシップ）企業賞を受賞するなど体育局クラブ同様に成果を出している。課外活動を含め、学生会には今後の更なる発展を期待したい。

・学生会渉外局の活動

平成25年に学生会の再編により祭事局から名称が改められた渉外局は、以降その活動内容も見直されており、渉外局としての活動は、4月の新入学生を対象とした一年生合宿研修と、不定期に開催されるリーダー研修会（近年は一年生合宿研修の運営を代替活動としている）の企画立案・運営を行うことに加え、他高専の学生会との連携行事（全国、九州沖縄地区高専交流会）への参加がメインである。学生会行事である文化部発表会、高専祭、体育祭、予餞会の各実行委員会は、渉外局傘下の団体となっており、体育局や文化局傘下の各団体と同様の扱いとなる。各行事の実行委員長の選出及び実行委員会の解散は、学生大会を通じて承認が行われるのは従来から変わりはない。

ここ10年の学生会渉外局を取り巻く環境は、新型コロナウイルス感染症の蔓延以降劇的に変化した。令和2年度以降の2年間は、学生生活にも多大な制約が課され、各行事の中止が余儀なくされた。一年生合宿研修については、令和3年度より学内研修として再開されたものの、感染拡大防止対策を施しながらの開催となった。令和5年に新型コロナウイルス感染症の位置付けが5類感染症に変更されたのを受け、夜須高原青少年自然の家での一年生合宿研修が再開された。学生会渉外局、中央執行委員会のメンバーが中心となり、各科5年生の代表者も加えてのリーダー研修の要素も加え、新入生への対

応及び交流行事等の運營業務を通じて、リーダーとしての資質向上を促す良い機会となっている。また、傘下の各行事の実行委員会の活動も、コロナウイルス感染症が下火となるにつれて活発化しており、直近の令和5年度からは、文化部発表会、高専祭、体育祭、予餞会全ての行事で一般来場を解禁し、近隣住民や保護者を中心にたくさんの観客動員がなされるなど、本校の広報活動の一助にもなっている。ここでこの10年において大きく様変わりしたものの代表例として高専祭を取り上げたい。これまで伝統的に行われてきた前夜祭の神輿行列、体育祭の竹取りは新型コロナウイルス感染症の影響により令和2年度より中止することとなった。令和4年度に復活しようとした動きがあったが、学生（実行委員）のほうから「ノウハウが継承されておらず、実施方法が分かる学生も居なくなってしまったため中止したい」との申し出により、現在も再開の目途は立たない状況である。前夜祭に行われていた花火も新型コロナウイルス感染症が原因で令和2年度より中止。令和4年度に見積りまで取り、実施する方向で動いていたが、この年の筑後川花火大会で打ち上げられた不発弾が不幸にも本校弓道場に落下、爆発炎上したこともあり、中止せざるを得ない状況となって以降、いまだ復活を果たせていない。新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行した令和5年度以降は新たな実施形態として前夜祭という形は踏襲せず、朝から夕方までステージイベントや学内出店、展示を行うなどどちらかというと大高専祭に近い形でまるまる2日間文化祭を満喫する取組をスタートしている。次回記念誌発行の際には、伝統を受け継ぎつつ、時代に合わせ、新たな内容を融合させたNEW高専祭の実施報告がなされることをご期待いただきたい。

今後も、学生会渉外局には、「学生自治」の観点でイベントの企画立案・運営に邁進するとともに、「自ら考え行動できる」学生を育てる部署として、ますます発展してほしいと願っている。

3.2 文化局

3.2.01 英会話部

(令和6年度代表顧問 徳永)

2018年度末、部の活動場所が生化棟C4教室から現在の英語演習室に移った。その当時から英語の本やゲームの保管ができるようになった。2019年度には留学生4C Cindyさんが部長になり、週一回の活動で英語の発音や歌を練習したり、小規模で映画鑑賞を行ったりした。しかし当時はまだ外部講師のPenner先生が来られるまでの前半の時間をどううまく使うか試行錯誤していた。2020年度、代表顧問は現在の代表顧問に代わり、部長を3M古賀紀后さんが務めた。部長はこの年、前半の最初の20分間、6単語以内で短い英文を作りあう英語活動を始めた。部の本の貸し出しを始め、自主的に英語学習をする動きも高まっていった。2022年度は部長が4C緒方公伽さんに代わり、部員も前年度11名から19名に増えた。活動前半は主に学生主体でスピーチやゲームを行い、後半はPenner先生とTabooやScrabble等のゲームを行って英語のみで活動する時間を増やした。2023年度には3E高井良謙利さんが部長を務めた。部長や部員の働きかけもあって、この年部員数が34名と大幅に増え、一度に英語演習室には入りきれないほどになった。部員はこれまでの週一回の部活動を一層活発に行うだけでなく、他の平日にも活動日を増やし、毎日のように有志部員が集まって『NHK ラジオ英会話』等で英語力を鍛えるようになった。今年度2024年は部長を3M大城一之さんが務め、現在部員は37名を抱える大所帯となっている。お互いミスなど気にせず、楽しみながら英語を使おう、英語で自分の考えを表現しよう、そしてそれをサポートしようという雰囲気があふれる英会話部となっている。留学生との交流も機会あるごとに行っている。英会話部がもつ英語の学習本(英検やTOEIC, TOEFL 関連, 異文化理解の本等)もこの数年で大幅に増え、部員それぞれが有効に活用している。

英会話部では平常の活動に加えて、毎年大きな取り組みとして「九州・沖縄地区国立高等専門学校英語プレゼンテーションコンテスト」への参加(希望者)を行っている。以下は近年の実績である。

大会名:「九州沖縄地区国立高等専門学校英語プレゼンテーションコンテスト」

●2018年度第51回大会(本校開催)

【暗唱部門1位】2M 松下 綾花

【同3位】2C 野崎 磨央

●2021年度第54回大会(DVD審査)

【プレゼンテーション部門2位, 全国大会出場】

4M 松下 綾花

●2022年度第55回大会(DVD審査)

【暗唱部門2位】1E 堀松 幸

●2023年度第56回大会(DVD審査)

【暗唱部門2位】1E 浅川 麗央菜

●2024年度第57回大会(熊本高専八代校開催)

【プレゼンテーション部門3位】3E 堀松 幸

【暗唱部門2位】1E 中村 佑

2021年度から今年度2024年度まで、久留米高専は4年連続で九州沖縄大会に入賞し、うち1回(プレゼン部門)は全国大会出場を果たした。今後も自分にチャレンジする在校生が後に続いてくれることを期待している。

3.2.02 吹奏楽部

(令和6年度代表顧問 宮崎)

学内では、4月の入学式、6月の文化部発表会、11月の高専祭、3月の卒業式・修了式といった学校行事と、3月に本校ウェーブホールで開催する「卒業生コンサート」で演奏している。式典では入退場時の演奏を吹奏楽部が担当し、好評を得ている。

学外では、福岡県吹奏楽連盟主催でイイヅカコスモスコモンにて7月に開催される福岡県吹奏楽コンクールにほぼ毎年出場している。成績は中々振るわないが、コンクール前の練習が演奏技術や表現力の

向上に寄与しているようである。コロナ禍で練習時間も制限されていた時期もあったが、令和4年のコンクールでは少人数での出演ながら銀賞を受賞した(写真3.2.02)。最近はアンサンブルコンテスト大学の部や3年生以下の部員が管打楽器ソロコンテスト高校の部にも参加し、令和元年にはトロンボーンでソロコンテストに出場した学生が金管の部で1位を獲得している。また、久留米吹奏楽連盟主催で石橋文化ホールにて1月に開催される「ニューイヤーバンドフェスティバル」に久留米市内の高校との合同バンドとして出演している。年末年始に合同練習を重ねて出演しており、他校との交流の場となっている。さらに、12月末に本校の大同窓会が開催された際には、懇親会でのBGM演奏、校歌や逍遥歌の伴奏などを依頼されて演奏している。卒業生の学生当時の演歌や歌謡曲を演奏して好評を得ているとともに、部員には大先輩との交流の場ともなっている。



写真 3.2.02 令和4年度福岡県吹奏楽コンクール

3.2.03 軽音楽部

(令和6年度代表顧問 萩原)

軽音楽研究部(以下、軽音部)の活動の歴史は意外と古く、過去の資料によると昭和40年(1965年)に神田先生(当時)が最初の顧問を務めておられる。したがって、部としての誕生から今年で59年目となるため、設立60周年を迎える高専の歩みと、ほぼ足並みをそろえて軽音部も共に歩み続けているといえよう。

現在(2024年)の軽音部の活動状況であるが、登録部員は総勢146名となっており、男子学生92名、女子部員54名の久留米高専の部活動で一番の大所帯といえる。軽音部の歴史においても創設以来の最大規模ではないかと推察される。

部活動の主な年間スケジュールは、5月「文化部発表会オーディション」、6月「文化部発表会」、9月「高専祭オーディション(バンドおよびDJオーディション)」、11月「高専祭」、1月「予餞会」となっている。部員たちは、このような部内オーディションや各発表会に向けて、日頃より練習に励んでいる。

軽音部の練習環境は充実しており、音楽機材のみならず、その活動範囲も拡大しつつある。いくつか例を紹介すると、2008年以降、軽音部専用のプレハブ小屋が第二体育館南側のスペースに設けられ、現在はプレハブ小屋が思う存分放課後に練習できる貴重な場となっている。プレハブ内部には防音壁のほかにエアコンも完備しており、夏場や冬場でも快適な練習環境が保たれている。直近の2023~24年には、久留米市内の音楽イベントに参加する部員もあり、高専内外に活躍や発表の場を拡げている。

機材については、2012年にミキサーやパワーアンプ等の本格的なPA音響システムを導入し、軽音部のみで本格的なライブイベントが開催できるようになった。2013年には、ドラムセットとギターアンプを新調し、それぞれワンランク上の機材に買い替えられた。また、オーディオインターフェイスも購入して録音環境も整えられ、レコーディングも可能となっている。2014年にはキーボード、2024年には新たなドラムセットを設置し、より一層充実した練習環境が整備されている。今後も音楽を通じて、多くの仲間と出会い、軽音部をさらに盛り上げていくことを期待している。



写真 3.2.03 高専祭での演奏

3.2.04 囲碁将棋部

(令和 6 年度代表顧問 石丸)

囲碁将棋部の登録部員数は、ここ数年は 10 名から 20 名程度で推移している。令和 6 年度の登録部員は 8 名であるが、実際に活動している部員は数名である。囲碁と将棋の両方を指す部員は 1 名のみであり、彼が中心となって活動しているが、日によって囲碁をしたり将棋をしたりとまちまちの活動となっている。活動場所は錬心館の畳の部屋を使用していたが、令和 6 年の夏から改修工事に入ったため、現在は週に 3 回ほど記念館を活動の場としている。他にもオンライン対戦など部員なりに工夫をして楽しんでいる。

コロナ感染症前には、全国高等専門学校将棋大会に毎年のように参加していたが、コロナ発生以降は少し足が遠ざかり、令和 2 年度から 6 年度まで全国大会に参加していない。本校の部員が最後に参加した全国大会が令和元年度の大会であり、この大会はまた本校が主催した大会でもあった。第 26 回全国高等専門学校将棋大会は全国の高専から 30 チームが参加し、男子団体戦および男女の個人戦を実施した。例年、プロ棋士による対局指導や大盤解説をお願いしているが、この年は豊川孝弘七段と本田小百合女流三段をお招きした。大盤解説では、「ここは角をキリマンジャロ」などダジャレで有名な豊川七段が会場を大いに沸かせた。なお、本校学生は健闘したものの、残念ながら上位入賞することは出来な

った。

顧問の変遷は以下のとおりである。平成 27 年度～29 年度は黒飛、山口、平成 30 年度～令和元年度は川嶋、山口、石丸、藍澤、令和 2 年度～4 年度は石丸、山口、藍澤、三木、令和 5 年度は石丸、山口、三木、令和 6 年度は石丸、三木、沖田。



写真 3.2.04 第 26 回全国高等専門学校将棋大会（令和元年 8 月 21 日～23 日）豊川孝弘七段と本田小百合女流三段による大盤解説の様子

3.2.05 茶道部

(令和 6 年度代表顧問 梶)

茶道部では創立から平成 10 年 9 月まで故高橋清太名誉教授、同年 10 月より平成 27 年 3 月まで北島淑美先生（茶名：宗美）、同年 4 月より本年 3 月まで横山芳子先生（茶名：宗芳）に稽古を見ていただいていたが、本年 4 月より横山先生のご紹介により井上久美子先生（茶名：宗古）をお迎えした。先生は裏千家教授の資格をお持ちで、歴代の先生方と同様に今日まで大変熱心に指導いただいている。

井上先生は、学生の頃より現在まで約 60 年に渡って自ら茶道を学ぶとともに指導に当たってこられており、学生茶道にも精通した大変経験豊富な方で、単に所作を教えるばかりでなく、その合理性や背景を分かりやすく丁寧に説明されている。

茶道部の日常の稽古は、井上先生のご指導のもと、毎週水曜日の放課後に記念館で行われている。学生

は、先ず所作からお点前の基本を学び、個々の学生の習熟の程度や季節に応じたお点前の稽古を積んでいる。所属している部員は1年生から入部して経験を積んでいく場合が多いが、途中の学年からでも拒むことはなく、また、男女を問わず稽古に励んでいる。多くの学生は、他のクラブ活動と掛け持ちの場合が多く、時間のやり繰りに苦労しつつ熱心に活動している。特に競技があるわけではないが、文化祭でのお茶会を茶道部の最大のイベントと捉え、天気がよければ記念館前の庭園で野点を実施し、多い年には200名程度が来場し、とても好評である。



写真 3.2.05 令和6年度文化祭でのお点前

3.2.06 新聞文芸部

(令和6年度代表顧問 鴨川)

1995(平成7)年度、久留米高専設立当初から存在していた新聞部と文芸部が合併したことで、新聞文芸同好会が誕生した。1997(平成9)年度末には一旦廃止となるが、2000(平成12)年度に、梶 隆彦教授を顧問として復活する。さらに、2008(平成20)年度には、新聞文芸部として部に昇格し、現在に至る。2014(平成26)年度から2023(令和5)年度までの10年間、川上 雄士教授(材料システム工学科)が代表顧問を務め、2024(令和6)年度より、鴨川 都美教授(一般科目(文科系))へと引き継がれている。

主だった活動は、文化部発表会(6月)と高専祭(11月)での『文芸誌』販売である。部員の多くが

他の部活動や実行委員会に所属していることもあり、『文芸誌』に掲載する作品は、各々が自宅や寮で執筆し、定められた期限までに提出する方法を取っている。小説のジャンルは、SF、ファンタジー、恋愛、ミステリー、ライトノベルなど多岐に亘っており、一冊の『文芸誌』を開くだけで、さまざまな小説世界を堪能することができる。さらには、小説だけでなく、個性的な詩や短歌も『文芸誌』には欠かせない魅力となっている。

また、部内には「高専大辞典」編集委員会を設置し、「高専大辞典」に収録する項目の検討や執筆作業に当たっている。「高専大辞典」は、久留米高専の学校行事、学科、授業、余暇などに関する項目を中心に構成されており、久留米高専生の実態に迫る貴重な資料といえよう。『文芸誌』の巻末付録として存在感を発揮し、学内外から好評を得ている。

2024(令和6)年度からは、年2回の『文芸誌』販売だけでなく、部の活動の活性化について議論すべく、不定期のミーティングを実施している。部員からは、『文芸誌』の合評会、「文学フリマ」等への参加や、高専祭でのイベント企画など、積極的な意見が集まった。今後、これらの実現に向けて活動していく予定だ。

なお、新聞文芸部の「新聞」に関する活動は長らく休止しており、「校内新聞」の再始動については未定である。



図 3.2.06 2024(令和6)年度高専祭の様子

3.2.07 自動車部

(令和6年度代表顧問 中武)

自動車部は高専創立2年目の1965年に創部された歴史の長い部活動の1つである。長い間、機械工学科の中尾先生が代表顧問であったが、令和元年度、一旦、独立して活動していたエコランチーム（エコパワー同好会）と再統合し、代表顧問は機械工学科の中武、顧問に中尾先生の体制となった。

主な活動は、創部当初より自動車整備やチューンアップを通して、自動車の機構やメカニズムを実際に手に触れながら体験型学習を行っている。また、ジムカーナやエコラン（自作車両での燃費競技）等の競技参加用に、マシーンを改造・製作するなど日常的なエンジニアとしてのスキルとレベルアップを実践している。

下の写真は、令和6年9月初旬、夏休みを利用してエコランチームが燃費競技世界一の記録（4,079 km/ガソリン 1L）を持つ広島の企業を訪問し、世界一の車両と製作者を囲んで、見て、触れて、談義した時の様子である。コロナ下で3、4年程、活動が停滞していたが、たくさんの1、2年生が入部し、活況を取り戻しつつある。



写真 3.2.07 燃費記録世界一のエコランカーを前に

3.2.08 ロボットコンテスト部

(令和6年度代表顧問 渡邊)

ロボットコンテスト部では、毎年アイデア対決・

全国高等専門学校ロボットコンテスト出場に向けた活動を行っています。2024年度の部員数は47名で学科・性別を問わずロボットに興味を持った学生が集まっています。

この10年におけるロボットコンテストに大きな影響を与えた事象としてはコロナ禍とデジタルものづくり環境の急速な発展が挙げられます。2019年末からの新型コロナウイルスの世界的な流行は課外活動全般に大きな影響を及ぼしました。2020年度「はぴ☆ロボ自慢」、2021年度「超絶機巧(すごロボ)」では会場に集まり競技を行う形式ではなく、オンライン会議システムを使ってロボットによるパフォーマンスを行う形式での開催となりました。ロボコン部においても従来とは違った大会形式に合わせたロボット製作が模索され、VR技術を用いたロボット遠隔操縦や現代制御による倒立振り制御などにチャレンジしました。

個人向けの3Dプリンタやレーザカッターの普及やプリント基板の受注生産サービスの発展などこの10年の間にロボット製作の環境は大きく変化しました。ロボコン部においてはこうした新しい技術の導入を行うとともに、従来からの汎用旋盤等を用いた機械加工やユニバーサル基板による回路製作を併用しながらロボット製作を続けています。

2003年大会「鼎」以降、全国大会出場がかなわないう状況が続いていますが、九州沖縄地区大会において2016年、2017年、2018年そして今年2024年に特別賞をいただくことができました。

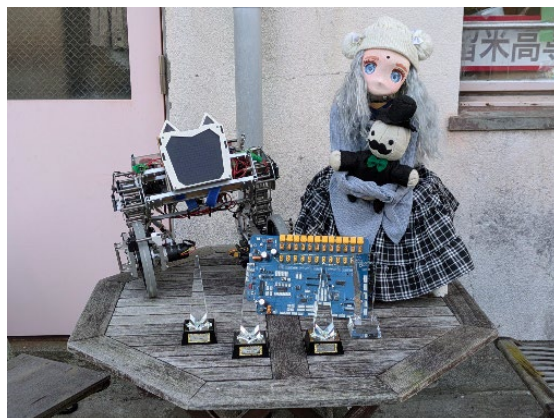


写真 3.2.08 オンラインロボコン出場機体

3.2.09 美術部

(令和6年度代表顧問 越地)

美術部は現在部員数32名で毎週火曜日と木曜日を中心に部室と専門棟1階の教室で活動している。部室には色々な画材が揃っており、文化部発表会や高専祭の展示に向けて各自のペースで創作活動を行っている。過去10年間の代表顧問は藤田先生(機械工学科:~平成26年度)、中畠先生(生物応用化学科:平成27~平成29年度)、松田(康)先生(一般理科:平成30~令和元年度)、越地先生(電気電子工学科:令和2年度~現在)が担当している。また顧問として丸山先生(制御情報工学科)、伊藤(公)先生(一般理科)、沖田先生(一般理科)、黒飛先生(一般理科)、中島(め)先生(生物応用化学科)の各先生にご尽力いただいている。令和6年度の文化祭では『テクスチャーアート体験コーナー』を企画し好評であった。また平成26年度から、毎年3月上旬に全国総本宮水天宮(久留米市)で開催される久留米市商会議所様主催の『水天宮恋ものがたりライトアップコンサート&灯明まつり』において水天宮隣接の筑後川河川敷にて地上絵灯明アートの出展を行っている。数ヶ月前から担当者と細かな打ち合わせ等を行い、当日は早朝から色付紙袋への砂の封入や多数の紙袋の配置などの準備を行い、夕刻に一斉に点灯し4時間のイベントの間は灯明のメンテナンス等を行った。多くの観客が足を止めその美しさに見入ったり、子どもたちが歓声を上げたり等、楽しんでいただいた。部員にとっても社会人との共同作業を通してスケジュール管理や作業手順の効率化等、学ぶところが多い実りある企画となっている。



写真 3.2.09 水天宮祭りでの地上絵灯明アートの出展(左:昼間の準備/右:点灯後の灯明)

3.2.10 華道部

(令和6年度代表顧問 小袋)

平成19年度に愛好会から部に昇格して以来、少人数で活動を続けてきた。部員数はここ2年で増加し、現在は男子15名、女子14名の計29名である。ほとんどが初心者で兼部する者も多いが、稽古を積んでいくうちに生け花の楽しみを見出していく。

日々の稽古は、池坊の江崎如風先生のご指導のもと、毎月2回木曜日に記念館で行われている(平成30年度から江崎先生の助手として松隈留美子先生にも指導頂いている)。江崎先生は、学生の自主性を重視されており、花材の取り合わせや表現技法などを自由に考え、工夫するよう指導されている。手直しの際には「調和」や「余白」、「右長左短」など日本独特の美意識について分かりやすく解説される。お互いの作品を鑑賞することで多様な表現や個性を発見し、自らの感性を磨いている。熱心な学生は、免状を取得したり花展に出瓶したり、生花(しょうか)という伝統的な花型も学んでいる。

主な行事は、Ikenobo 花の甲子園と高専祭である。花の甲子園は、当日発表の花材を用いて制限時間内にチームで3作品を制作し、その作品解説を行う競技である。平成26年度から地区大会に出場し、平成30年には三位に入賞した。近年は先輩から後輩への知識や経験の継承ができるようになり、令和5年に二位、令和6年に初優勝を果たした。高専生は高校生に比べてプレゼンテーション力が高く、“トークで会場を魅了する”と評判である。また、福岡県の学校が地区代表に選ばれることや工業系の学生が全国大会に出場することは初めてであり、高専生の存在感を示す機会となった。

高専祭では、花展と華道体験を企画し、地域の方々との交流を通じて伝統文化の発信に努めている。生け花の技術だけでなくコミュニケーション力や団結力が高まっており、学生らの成長につながっていると感じる。最後になるが、令和4、5年度の池坊学校華道華道具助成制度や松村校長や卒業生

からの寄付により、華道具を新調することができた。心より御礼申し上げる。今後も華道を通じて学校の雰囲気明るくし、文化系クラブを盛り上げてほしい。



写真 3.2.10-1 稽古の様子（上：H30，下：R6）



写真 3.2.10-2 花の甲子園 2024 九州北地区大会 優勝（アクロス福岡）

3.2.11 プログラミングラボ部

（令和6年度代表顧問 田中）

プログラミングラボ部は、平成17年度のプロコン愛好会の設立から数えて、令和6年度で20周年を迎える。放課後になると、部員は SJ 教室に集まり、競技プログラミング、ハッカソン、アプリコンテストなどへの出場に向けて、日々活動している。

毎週水曜日には、部内で定例ミーティングを開き、部員間でプレゼンの場を設けては、低学年部員は C 言語の基礎を高学年部員から教わり、プログラミングスキルの修得を図っている。一方、AtCoder、会津オンラインジャッジ(AOJ)などのオンラインコンテストに挑戦し、日々プログラミングスキルを修得する部員もいる。その他、小中学生へのプログラミング教室での教育活動、自治体との共同研究など、校外活動にも積極的に行っている。

主な出場コンテストは、高専プロコン、情報オリンピック(JOI)、パソコン甲子園(PCK)、スーパーコンピューティングコンテスト(SuperCon)、国際大学対抗プログラミングコンテスト(ICPC)である。この10年間でとくに顕著な成績を収めた部員を3名紹介する。1人目は前田南樹君、2人目は檜原晃都君、3人目は稲田雄大君である。3名とも、JOI 本選にて九州・沖縄地区別成績優秀者に選ばれ、本科卒業後、難関国立大学へ編入学したことで共通している。前田君は SuperCon 準優勝と優勝(平成27年度、28年度)、アジア太平洋情報オリンピック(APIO)銀賞(平成28年度)、PCK プログラミング部門5位(平成28年度)、ICPC 大学別12位(平成29年度)などを受賞した。檜原君は SuperCon 優勝(平成28年度)、高専プロコン競技部門特別賞(平成30年度)、ICPC 大学別37位(令和元年度)などを受賞した。稲田君は高専プロコン競技部門第3位(令和元年度と令和3年度)、富岳チャレンジ(SuperCon 代替)文部科学大臣特別賞(令和2年度)などを受賞した。

近年、ICPC には令和2年度以降、SuperCon には令和3年度以降、いずれも本選出場を果たせていないが、ICT トラブルシューティングコンテスト(ICTSC)特別賞受賞(令和5年度)、高専ワイヤレスネットワークコンテスト(WiCON24)採択(令和6年度)など、他のコンテストにて実績を残している。部の意向を尊重し、今後の更なる活躍を後押ししたい。



写真 3.2.11 (左上) C 言語勉強会の様子
(令和 2 年 9 月)



写真 3.2.12 大会出場の様子

3.2.12 鳥部

(令和 6 年度代表顧問 谷野)

鳥部では、毎年、東京都大田区で開催の日本航空宇宙学会主催 全日本室内飛行ロボットコンテスト出場に向けた活動をしています。部員は現在 42 名、飛行機好きが多く、熱心な学生が集まっています。

この 10 年で一番の出来事は 2020 年以降のコロナ禍での活動制限、そんな困難な状況の中でも、学生達の熱心さが光りました。さすがに 2020 年は出場できず、翌年は部員がほぼ 2 年生以下という状況になりましたが、当時、専攻科生だった先輩が「翌年を見据えて経験のためだけでも参加した方がいい」と働きかけてくれ、経験者がいない中、出場を決意し、1 チームだけでも出場しました。この出場のお陰で、次の年からは彼らが中心となり、以後の大会には 1、2 年生も参加する形ができ挑んでいます。

大会は一般、自動操縦、マルチコプター(マルチ)、ユニークデザイン、ビギナー(2024 年から)部門があり、この 10 年間で計 23 チームが出場、その戦績は、コロナ前は、2017 年 自動操縦 2 位、マルチ 1 位、2019 年 一般 3 位、コロナ後は、2023 年 マルチ 2 位、そのほか、2017 年 ベストプレゼン賞とベストデザイン賞、2022・2023 年 会場賞と、大学生チームが多い中で、かなり健闘した成績を残しています。

これからですが、最近の大会は、技術の高度化が進み、今年の大会も一般部門はこれまでの出場の中でも高得点でしたが表彰には届きませんでした。彼らもそれを実感したようで、例年なら本格的な活動は年度初めからなのですが、今年は大会後から次の大会に向けた活動を始めています。

3.2.13 写真部

(令和 6 年度代表顧問 周)

写真部は、平成 27 年度に同好会から部に昇格した。現在は部員 21 名で活動している。指導教員は周准教授と辻教授である。

活動としては、コロナ期で活動ができなかった時期もあるものの、部活として月 1 回のミーティングや入卒業式・夜須研修等の公式行事での撮影や文化部発表会(写真 3.2.13-1)・高専祭等の学生主体の行事に積極的に参加している。また、定期的に撮影会も行っており、これまで高千穂(宮崎県)・昭和の町(大分県)・宮地嶽神社(福岡県)などに伺った。令和 5 年度は長崎市の散策を行なった。(写真 3.2.13-2)

その他にも、R5 年度から写真甲子園に参加しており、R5・R6 とも残念ながら九州地区 2 回戦敗退であった。また、NEXCO 西日本の高校生の撮ったカレンダーにおいても R4 年から参加している。

コンテストの機会が増えたことで学生達の作品への意欲・技術向上に期待するものである。

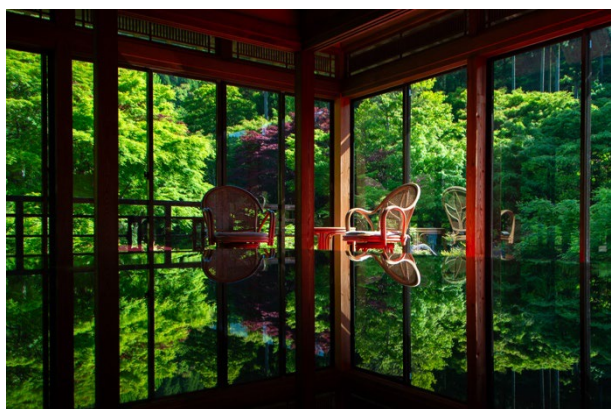


写真 3.2.13-1 文化部発表会作品
(令和 6 年度)



写真 3.2.13-2 撮影会 in 長崎 (令和 5 年度)

3.2.14 ピアノ同好会

(令和 6 年度代表顧問 中畠)

ピアノ同好会は、平成 15 年「ピアノ愛好会」として生涯学習の一環を担うことを目的に、賛同有志学生により小宮 厚准教授（当時）を顧問として結成された。当時の部員は、制御情報工学科及び材料工学科の 5 年生を中心とした 12 名であった。平成 20 年度より同好会に昇格し、現在に至っている（令和 6 年度部員数 43 名）。

グランドピアノのある D4 教室及び電子ピアノのある旧部室が練習場所であったが、部室は令和 5 年度新部室に移された。部員には寮生も多く、各自が楽しみながらピアノ練習に励んでいる。



写真 3.2.14 令和 5 年度入学式での校歌指導の様子

また、第一体育館にも新たに電子ピアノ 1 台を設置したことに伴い、ここ数年、全体集会をはじめ卒業式や入学式等式典では同好会部員が校歌斉唱の伴奏を行っている。令和 5 年度の入学式、卒業式で前代表顧問が校歌指導を行い、入学式では在校生と新入生との交流に努めた。

同好会の学外での演奏会等への参加は特にないが、高専祭の文化祭では同好会として演奏を披露している。

今後も同好会として学校行事に少しでも貢献できれば幸甚である。

3.2.15 ダンス同好会

(令和 6 年度代表顧問 岡本)

ダンス愛好会は、2012 年 5 月に創設された。

2012 年以前から、放課後の生物応用科学化棟前のメインストリートで毎日のように数名の学生が練習している光景は、久留米高専関係者にとって見慣れたものとなっていた。そして、2011 年度にダンスの練習をしていた学生が中心となって、ダンス愛好会という団体結成に向けて動き始めた。団体結成の目的を「多くの人に部の存在を知ってもらい、入部者数を増加させる。」と掲げ、ダンス愛好会は創設された。

17 名の学生でスタートしたダンス愛好会は、20～

30 名が所属する団体として活動を継続し、2017 年には同好会に昇格した。そして、2024 年は 19 名の学生が所属している。

この団体が創設されて約 15 年が経過したことになるが、体育館でも練習できるようになったことや、部費が支給されるようになったことは、創設当初の状況から考えると隔世の感がある。

現在の主な活動内容は、久留米高専における音楽祭や高専祭での公演である。2023 年 10 月には「くるめフォーラム 2023」に参加するなど活動の幅を広げている。



写真 3.2.15 ダンス愛好会

3.3 体育局

3.3.01 陸上競技部

(令和 6 年度代表顧問 赤塚)

陸上競技部は、九州高専大会において数多くの優勝者と団体優勝を成し遂げてきた伝統ある部である。ここ最近の 10 年間を振り返ってみると、九州高専大会において個人では足立智一(110mH、52 回)、齋藤龍洋(走高跳、54・56 回)、草場進太郎(100m・200m、56・57・58 回)、山内雅也(円盤投、57 回)、岩崎良太(200m、59 回)、小幡順平(三段跳、59 回)、井寺快斗(三段跳、61 回)、黒澤凜太郎(円盤投、61 回)、片田莉菜(100mH・100m、55・56・57 回)、清原小百合(砲丸投・円盤投・やり投、56・57・58・59 回)、

藤井美咲姫(800m、58 回)、4×100m3 回、4×400m 2 回の優勝を飾ってきた。令和 2 年度の九州高専大会は、久留米高専が主管校として陸上競技の運営を行わなければならなかったがコロナ禍による九州高専大会の延期、全国高専大会の中止という学生にとって非常に残念な年となった。特に令和 2 年度のチームの 4×100mR 最高記録は、全国の高専ランキングでトップであったため、全国大会が開催されなかったことは悔しい限りである。令和 2・3 年度ともに夏季に九州高専大会を開催することはできなかったが、関係者のご尽力により大牟田にて代替大会を行えることとなった。

現在の陸上部は、コロナ禍以降部員が集まらない状態が続いているが、部員一人一人は各々の目標に向かって活動を行っている。卒業生の皆様には、現役生への支援や応援をいただき、心より感謝いたします。



写真 3.3.01 56 回九州高専大会

3.3.02 柔道部

(令和 6 年度代表顧問 細野)

柔道部が最後に成績を残したのは令和元年、第 54 回全国高専大会における女子 52kg 級 3 位入賞である。その後試合に出場することもなくなり、現在の柔道部の部員数はわずか 2 名、いずれも 5 年生であるため、この部は近く廃部となるだろう。



写真 3.3.02 抑え込みで合わせ一本を決めた

柔道の競技人口は全国的に減少し続けている。地区高専大会への参加者も減っており、個人戦が午前中のうちに終了する有り様である。

選手数とともに競技のレベルも低下しており、令和 4 年、5 年の地区高専大会では受け身もまともにとれない初心者が投げられ大けがをし、救急搬送される事態が続いた。十分に習熟していないのに試合に出ることは危険であるが、学生は初心者でも出場したがる。他高専では全く練習していない学生が、参加者数が少なく出場即入賞となることを見越して参加登録しようとし問題となった。もはや、高専大会の柔道競技そのものが成立しなくなる日が遠くないかもしれない。

そのような状況であるが令和 5 年度には地区高専大会を本校主管で実施することができた。長年ご指導いただいている中尾藤宏先生をはじめ、ご協力いただいた南筑高校の松尾先生ならびに柔道部生徒の皆さん、奔走された本校事務部の皆様に深く感謝申し上げます。

3.3.03 弓道部

(令和 6 年度代表顧問 中野)

弓道部のこの 10 年間の活動において、最も印象的な事柄は、弓道場の変遷である。昭和 55 年に建てられた 4 代目の弓道場の老朽化が進んだことにより、

令和 2 年度に改修され新道場となった。しかしながら、令和 4 年 8 月 5 日、筑後川花火大会における花火玉の弓道場射場内への落下と爆発により弓道場が焼失している。その後、学校関係者と筑後川花火大会実行委員の尽力により弓道場の復旧活動が勧められ、令和 6 年 8 月 9 日に同実行委員会からの寄贈として新弓道場が完成し、現在に至っている。この弓道場の焼失については、当時、事態を知った本校弓道部の OB・OG はもちろん、全国の個人・団体から多くの励ましやご支援を頂いている。現在の弓道場があり、焼失前と変わらぬ活動ができていることに感謝し、ご尽力・ご支援を頂いた皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

対外試合活動としては、5 月の高体連ブロック予選・県大会、7 月の高専大会九州大会、8 月の高専大会全国大会、9 月の高体連新人戦である。また、他高専との交流として、昭和 40 年から続く有明高専との交流試合は、現在も夏と冬の時期に行われており、令和元年からは夏に北九州高専を加えた 3 高専交流試合として実施している。10 年間の活動の中で、全国大会において特筆すべき成果を上げたのは、令和 4 年高専大会全国大会の女子団体準優勝である。

ご指導いただいている外部コーチとして、平成 25 年 4 月～令和 4 年 3 月までを水田英敏氏(教士七段)に、令和 4 年 4 月からは富安隆一氏(五段)に師事している。氏らの日々の根気強いご指導・ご鞭撻が、弓道部部員に射技だけではなく、「目先の結果に囚われず、正しいことに集中することが大切で、必ず自然と結果がついてくる」という「正射必中」の精神性そのものを与えてくださっていると考える。射技の修練を通して、学生一人一人が、心身共に強く大きく成長してくれることを、私も心から願い、一助となるべく今後も支援したいと考える。



写真 3.3.03 寄贈された新弓道場（令和 6 年撮影）



図 3.3.04-1 第 61 回九州沖縄地区高専体育大会
優勝（令和 6 年度）

3.3.04 剣道部

（令和 6 年度代表顧問 清長）

剣道部の学生は第一体育館裏にある武道場 2 階の剣道場にて稽古に励んでいる。主な大会参加としては高専大会や福岡県高等学校剣道大会、ならびに久留米市剣道連盟が主催する各種剣道大会がある。

令和 6 年度の部員は男子 14 名、女子 2 名であり、過去 10 年間の代表顧問は、越地先生（～令和元年度：電気電子工学科）、佐々木先生（令和 2 年度～令和 5 年度：材料システム工学科）、清長先生（令和 6 年度～：材料システム工学科）が担当されている。また顧問として和泉先生（機械工学科）、原田先生（機械工学科）、安部先生（一般科目）にもご尽力いただいた。さらに平成 27 年度からは外部コーチとして小川金吾先生（教士七段、～令和 4 年度）ならびに大隈光夫先生（教士七段、令和 5 年度～）を招聘しており、剣道部の学生に対して熱心な指導を行っていただいている。

剣道部は上記の体制で動いており、また久留米高専 剣道部 OB 等との合同親善練習も定期的に行いながら稽古に励んでいる。日々の稽古の成果として令和 5 年度と令和 6 年度に九州沖縄地区高専体育大会優勝（2 連覇）と全国高専大会出場を達成することができている。これまでの剣道部の活動と運営にご尽力を賜った関係者の皆様に厚く御礼申し上げたい。

3.3.05 硬式野球部

（令和 6 年度代表顧問 渡邊）

本校硬式野球部は、高専設立と同じ昭和 39 年に創部された。昭和 50 年 3 月から日本高等学校野球連盟に加盟し、以後 1 年生から 3 年生部員で構成される高野連チームと 4、5 年生部員で構成される高専連チームが編成され、各種対外試合に出場している。創部以来高専連チームでは、昭和 61 年全国制覇、平成元年全国三位の成績を収めている。（両年とも九州地区優勝）また、高野連チームについては、第 64 回（昭和 57 年）、第 67 回（同 60 年）、第 70 回（同 63 年）と 3 度に渡り全国高校野球選手権福岡大会へ進出している。

最近 10 年の硬式野球部の動きとしては、平成 18 年に外部コーチとして招聘し、足掛け 12 シーズンに渡り技術指導に当たられ、高野連チーム監督を務められた吉村雅英氏が、令和元年夏の第 101 回選手権大会を最後に勇退された。その後、令和元年 11 月より、第 55 回全国高校野球選手権大会に柳川商の選手として出場経験を持つ古賀敏光氏（元（株）スリーボンド軟式野球部監督）を外部コーチとして招聘。令和 3 年 10 月より本校課外活動指導員に就任され、高野連チームを中心に精力的に技術指導に当たられている。また、令和元年秋より、公

式戦用ユニフォームを刷新し、以降高校野球諸大会、高専大会で着用している。(写真)

高野連チームは目標である夏の選手権福岡大会出場、更には高専チーム史上初の甲子園出場を目指し、年間通じて精力的に活動している。令和5年の第105回全国高校野球選手権記念福岡大会において、南部予選を突破し、35年ぶり4度目の福岡大会に進出したのは記憶に新しい。

高専連チームは、平成27年、本校が担当校開催した全国高専大会において第三位となったのを皮切りに、この10年は安定した成績を残している。九州地区高専大会では、平成29年、30年、令和元年と三連覇を飾り、その後コロナ禍による2度の大会中止はあったものの、直近の令和6年に5年ぶりの優勝を果たした。全国大会では平成29年、30年二年連続準優勝、直近の令和6年は第三位の成績を収めた。

これからも、野球と勉学を両立し、各大会で好成績を収められるよう精進していきたい。



写真 3.3.05-1 令和6年度高野連チーム



写真 3.3.05-2 令和6年度全国高専大会第3位入賞

3.3.06 バスケットボール部

(令和6年度代表顧問 山本)

男子バスケットボール部は、昭和39年4月の本校設立と共に創部され、平成15年には女子バスケットボール愛好会が創立された。平成18年に愛好会から女子バスケットボール部に昇格し、平成23年には男女が合併してバスケットボール部となり現在に至る。

主な公式試合は次の通りである。福岡県高等学校総合体育大会(4月)、福岡県高等学校バスケットボール選手権大会(ウインターカップ予選)(6月)、福岡県南部ブロック高等学校一年生バスケットボール大会(7月)、九州沖縄地区国立高等専門学校体育大会(7月)、久留米地区高等学校バスケットボール大会(8月および3月)、全国高等専門学校体育大会(8月)、福岡県高等学校バスケットボール新人大会(12月)、福岡県高等学校バスケットボール新人大会(12月)。その他、5月に北部九州高専の練習試合、1月にはOB会を主催している。

ここ10年間の主な大会上位成績をまとめる。

平成26年度第49回全国高等専門学校体育大会に男子チーム出場。

平成27年度第50回全国高等専門学校体育大会に男子チーム出場。

令和元年度第54回全国高等専門学校体育大会に男子チーム出場。

令和5年度 福岡県高等学校バスケットボール新人大会(兼 第54回 全九州高等学校バスケットボール春季選手権大会福岡県予選) 男子チーム16位。

令和6年度福岡県高等学校総合体育大会バスケットボール競技大会(兼 令和6年度全国高等学校総合体育大会バスケットボール競技大会福岡県予選 兼 第77回全九州高等学校体育大会バスケットボール競技大会福岡県予選) 男子チーム16位。

令和7年度の第60回全国高等専門学校体育大会は久留米で開催され、全国大会制覇の目標達成に期待したい。

3.3.07 バレーボール部

(令和6年度代表顧問 高橋)

ここ10年の活動で特筆すべき事項は

- ・高専大会での男女バレーボールの活躍
- ・高体連での男子バレーボールの活躍
- ・女子バレーボールの高体連県大会出場
- ・コロナ禍等による活動縮小

の4点になるかと思う。

次に、ここ10年の主な戦績を記す。

(男子)

- ・平成26年度天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会 福岡県ラウンド 福岡県ベスト8
 - ・平成27年度天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会 福岡県ラウンド 福岡県ベスト16
 - ・平成27,28,29年度九州沖縄地区高専大会 優勝
 - ・平成27年度 福岡県高等学校バレーボール新人大会 福岡県ベスト16
 - ・平成28年度福岡県高等学校総合体育大会バレーボール選手権大会 福岡県ベスト16
 - ・平成29年度天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会 福岡県ラウンド 福岡県ベスト8
 - ・平成29年度全国高専大会 準優勝
 - ・平成29年度全日本高等専門学校選手権大会 3位
- (女子)
- ・平成28,29,30,令和元年度九州沖縄地区高専大会 優勝
 - ・平成28,29,30年度全国高専大会 優勝
 - ・平成28,29,30年度全日本高等専門学校選手権大会 優勝
 - ・令和元年度第72回全日本バレーボール高等学校選手権大会 福岡県南部ブロック予選会 7位 県大会出場
 - ・令和2年度九州沖縄地区高専大会代替大会優勝

久留米高専の自由な環境の下、私立高校並みの練習量により、上記のような素晴らしい成績を残してきた。しかし、コロナ禍以降は練習量が減り、残念ながら戦績は低迷してきている。

最後にこの10年、顧問、外部コーチに名を連ねて

いただいた先生方を紹介させていただいて、この報告を終わりにする。

山崎 有司、金城 博之、江頭 成人、谷野 忠和、
堺 研一郎、小林 美恵子、小袋 由貴、中村 駿介、
上野 虎太郎

堅山 彰一郎（平成25年度より外部コーチ）

以上の先生方には顧問、外部コーチとしてご協力いただいたことに感謝いたします。

3.3.08 テニス部

(令和6年度代表顧問 小田)

テニス部は、部員の間でソフトテニス部と区別して「硬式テニス部」と呼ばれている。伝統を継承し、本校のコートや近隣のリバーサイドパーク（新宝満川コート）で日暮れまで汗を流して練習に励んでいる。

平成26年度から30年度までは20～30名ほどの部員が所属し、多くの学生がテニスを楽しんでいた。しかし、令和になり日焼けを気にする風潮の影響もあり、令和5年度のテニス環境等実態調査報告書にも「高校生登録選手が5年前と比べて30%減少している」とあるとおり、我が部も令和2年度には部員が5名にまで減少した。それでも、この危機を乗り越えて、令和5年度には15名まで回復し、再び増加傾向にあることは喜ばしい限りである。

他方、主力選手の低年齢化も進み、部長と副部長は3年生が務めている（令和3年度は2年生）。公式試合は、九州沖縄地区高専大会と福岡県高等学校総合体育大会南部ブロック予選会に出場しているが、高体連の全国総体予選や新人大会は、近年は不参加となり、高専大会に集中している。高専大会での目標は、上位入賞（4位以内）と全国大会出場権の獲得（2位以内）である。新型コロナウイルスの影響で令和2年度と3年度は中止となったものの、それ以外の年度は、継続的に男子団体戦と個人戦に出場している。女子団体戦と個人戦の出場は、女子部員の状況により変動がある。なお、平成26年度と

令和5年度には、部員と顧問が協力し、九州沖縄地区高専大会の運営を無事に成功させた。

テニスは「紳士のスポーツ」と称され、セルフジャッジによって選手自身の公正さや誠実さが重んじられる競技である。フェアプレーの精神が強く求められ、相手を尊重しながら競技に臨むことが求められる。部員がテニスを通して培った誠実さやフェアプレーの精神は、卒業後さまざまな場面で信頼を築き、自らの成長を促す大きな力となっていることを願う。

3.3.09 卓球部

(令和6年度代表顧問 横溝)

20名程度だった部員数は世間で卓球人気が高まるにつれて増加し、令和6年度には40名に達した。それに伴い女子部員も増え、令和6年度には8名が在籍している。練習は第二体育館において、週に3回、1回2時間半実施している。

年間の主な出場大会や試合は以下のとおりである。福岡県高総体南部ブロック予選(4月)、高専定期交流戦(5月、久留米、有明、大分、佐世保、八代高専)、久留米市春季卓球大会(5月)、九州沖縄地区高専体育大会(7月)、久留米市秋季卓球大会(9月)、福岡県高校新人大会南部ブロック予選(10月)、高専定期交流戦(12月、久留米、有明、大分、北九州、佐世保、八代高専)、高良歳雄杯争奪卓球大会(3月)、久留米市総合団体卓球大会(3月)

高校生の大会で県大会に駒を進める部員もまれにいる。高専生の大会では、コロナ禍で九州沖縄地区高専体育大会が開催されなかった令和2年に実施された代替大会において、男子団体が準優勝した。

また、平成29年度には、第54回九州沖縄地区高専体育大会卓球競技を、基山町総合体育館にて本校が担当校として実施した。

顧問の変遷は以下のとおりである。平成27～30年度は松山、石丸、丸山、横溝。平成31(令和元)年度～令和3年度は石丸、丸山、原田(裕)、横溝。令

和4～6年度は石丸、原田(裕)、横溝。



写真 3.3.09 第61回九州沖縄地区高専体育大会
卓球競技の様子(令和6年7月6日)

3.3.10 バドミントン部

(令和6年度代表顧問 龍頭)

40周年記念誌では成績が芳しくないと言った報告を行い、続く50周年記念誌では、高専大会において平成25年度大会では女子団体戦、26年度大会では個人戦ダブルスで全国準優勝するなど特に女子部員の活躍を紹介している。さらに平成26年度大会では、地区大会男子団体でも準優勝を果たし、全国出場を果たすなど、良績を残してくれた。このようにバドミントン部の成績は絶えず浮き沈みを繰り返してきた。さて直近の10年はどちらだったのだろうか。残念ながら前者と言った方が適切だろう。50周年記念誌活動報告に続く平成27年から令和5年までの主要成績を記す。

第52回大会 女子団体：第3位、女子個人戦シングルス第3位：神之園那帆、女子個人戦ダブルス第3位：倉員佳奈絵・清野保菜美組

第54回大会 女子個人戦ダブルス第3位：古澤七海・金丸楓佳組

第56回大会 男子団体：第3位、女子団体：第3位、女子個人戦ダブルス第3位：古澤七海・金丸楓佳組

第57回大会および第58回大会 新型コロナウイルス感染拡大防止のため実施されず。また第5

9回大会 部内感染により、不参加

第60回大会 男子団体：第3位

令和2～3年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、そもそも大会自体が開催できなかった。特に令和2年度は本校がバドミントン競技を担当する年度でもあったが、初めての地区大会中止を経験することとなった。この2年間、最後の高専体育大会に参加できなかった5年生はさぞかし悔しい思いをしたことだろう。唯一の救いは、バドミントン競技として代替大会が開催でき、これまで頑張ってきたその証としての活躍の場を提供できたことだろうか。この2年を経験した部員たちが、毎年開催しているOB・OG会で元気な姿で顔を見せてくれることが何よりもうれしい。さてクラブの成績としては直近の地区大会（令和6年度を含む）において、男子団体が2年連続で第3位となり、全国大会でも上位の成績を誇る鹿児島、北九州に続く成績を残している。徐々に低迷状態からの脱却を図りつつある。今後の更なる活躍を期待している。

最後にこの10年間、顧問として携わっていただいた先生方をはじめとして、日頃よりクラブ活動に対し、ご支援、ご尽力を賜った関係者の皆様にこの場をお借りし、感謝の意を表したい。

3.3.11 ラグビー部

（令和6年度代表顧問 松島）

ラグビー部は、昭和39年9月に体育教員であった池田一徳先生が創部された。その後、体育教員であった井上弘之名誉教授（昭和40年度～平成8年定年退職～平成24年逝去）、平成15年度で定年退職された機械工学科の米倉将隆名誉教授、平成30年度で定年退職された一般文科の米永正敏准教授、令和4年度で定年退職された制御情報工学科の江崎昇二名誉教授が歴代の顧問を務めた。現在、制御情報工学科の松島宏典教授（平成20年度～現在）、青野雄太准教授（平成25年度～現在）の指導の下、活動を続けている。

全国高専大会（54回大会中）、九州高専大会（61回大会中）および九州高専新人大会（33回大会中）の主な成績は、下記のとおりであり、全国屈指の強豪チームである。なお、令和元年度から令和6年度まで、九州大会は6連覇中である。

・全国大会

優勝：3回（昭和54年度、平成5、6年度）

準優勝：2回（平成12年度、令和3年度）

3位：13回（昭和50、57年度、平成3、4、8、9、10、13、15、16年度、平成26年度、令和4、5年度）

・九州大会

優勝：22回

準優勝：20回

・新人大会

優勝：14回

準優勝：13回

また、3月と8月には本校で高専・高校合同合宿を開催しており、福岡工業、佐世保工業、有明高専、宇部高専など、近隣の高校・高専チームが参加し、例年300名を超えるラグーが交流試合を行っている。

OB会活動も盛況であり、令和6年5月には創部60周年記念および江崎先生退職記念式典が開催され、いずれも100名を超え大盛況であった。OB会も毎年開催しており、会員数も500名弱となり、全国各地でOBの活躍、交流が広がっている。



写真 3.3.11-1 創部60周年記念および
江崎先生退職記念式典



写真 3.3.11-2 現スタッフと現役部員

3.3.12 サッカー部

(令和6年度代表顧問 福岡)

2023年、本校サッカー部は、創部以来初の全国大会優勝という歴史的な快挙を成し遂げました。私が着任する以前の、2020年頃にはわずか3人しか練習に参加しない日々が続き、部の存続さえ危ぶまれていた時期があったと聞きました。松田弦己(主将)と田中優希(副主将)が4年生となる年に、九州高専大会で、これまで29回の優勝を誇る強豪、鹿児島高専を延長戦の末に破り、初優勝。そして全国大会では、初戦から勝ち進み、準優勝という素晴らしい成績を収めました。翌年、彼らが最終学年となった2023年の九州大会でも優勝し、全国の舞台へ。見事、4試合で18得点2失点という圧倒的な強さで優勝を果たしました。20人の登録選手全員が多くの試合に出場し活躍できたことが何より嬉しい記憶です。学生コーチ、マネージャー、スタッフ、顧問、そして多大なるご支援をいただいたOB・OGの皆様、チーム一丸となって掴んだ優勝は、私たちの誇りです。

2連覇を目指した2024年は、残念ながら九州大会初戦で敗退してしまいました。また、高体連にも参加していますが、まだ県大会出場を果たせていません。思うようにいかない日々が続いていますが、この困難を乗り越えようと試行錯誤する経験が、学生たちの成長につながると信じています。壁を乗り越えたときに得られる喜びは、彼らの今後の人生の中で財産となるはずです。

本校サッカー部は、昭和44年の創部以来、長い歴史を刻んできました。これまで部を支えてくださったOB・OGの皆様、そして歴代の顧問の先生方の想いを胸に、私たちは、選手たちの成長を全力でサポートしていきます。



写真 3.3.12-1 全国優勝メンバー集合写真



写真 3.3.12-2 優勝後、歓喜のロッカールーム

3.3.13 合気道部

(令和6年度代表顧問 松田)

平成27年度から令和6年度までの合気道部では、平成23年度から令和元年度まで山田芳和先生に、令和2年度から森邦孝先生に外部コーチをお願いし、週2回稽古指導をいただいている。合気道には試合はない。高専大会などの競技参加ではなく、例年11月に演武会を開催している。日々の稽古の成果として演武を披露する場であり、合気道部が一年で最も大切にしている活動である。演武会では、

部員の保護者を招き、近隣の大学等の合気道部、合気道道場の方々にも賛助演武として参加いただき、また、他大学や合気道道場の演武会の際には、本校合気道部から賛助演武として参加するなどの活動や交流があった。しかし、令和2年度から令和4年度については、新型コロナウイルス対応として、活動全般に制限や縮小を余儀なくされた。令和5年度からは通常の活動や稽古を再開し、久留米総合スポーツセンター武道場にて演武会を開催した。合気道部は令和6年にて創部50周年を迎える。合気道創始者植芝盛平開祖の内弟子をされた、合気道祥平塾道場長の菅沼守人先生が、久留米高専初代校長和栗明先生を訪問され、合気道部開設を決定されたことが嚆矢とされる。以来、多くの学生が稽古を通して合気道の技と精神を学び、心身を錬成し巣立っている。



写真 3.3.13 合気道道場（令和6年11月）

3.3.14 水泳部

（令和6年度代表顧問 田中）

本校水泳部はこれまで、平成23年度～平成29年度では、当時代表顧問であった生物応用化学科の松田貴暁准教授をはじめとする顧問の指導のもと、平成30年度～令和6年度では、現在代表顧問である制御情報工学科の田中諒准教授をはじめとする顧問の指導のもと、活動を続けてきた。平成31年

3月には、建物の老朽化や筑後川堤防工事に伴う区画整備等により、校内プールの移設工事が決まり、令和元年度には、校外近郊のプールでの活動を余儀なくされた。令和元年11月には校内プールの移設工事を終え、その翌年度にはようやく校内での活動を再開できるかと思われた。しかし、令和2年4月には、新型コロナウイルスが全国的に蔓延し、令和2年度と令和3年度では、本校が主管校だった、九州沖縄地区国立高等専門学校体育大会水泳競技（以下、地区大会）が中止となり、令和2年度の全国高等専門学校体育大会水泳競技（以下、全国大会）も中止となった。それでも、これらの代替大会として、全国高専通信記録会が開催され、これのエントリーに向けて、本校水泳部では、同ウィルスの感染防止対策に細心の注意を払い、校内プールにて記録会を実施した。全国大会は令和3年度より、地区大会は令和4年度より順次再開されたが、本校水泳部からの地区大会への出場部員は10名程度であり、20名程度出場し続けていたコロナ前と比べて、出場部員が少ない状況である。

以上の状況下でも、本校水泳部は、地区大会および全国大会での各男女種目で多くの優秀な成績を収めてきた。この10年間に関わって頂いた先生方は、綾部隆元教員、原田豊満元教員、富岡寛治元教員、田中慎一元教員、宮崎浩一教員、松田貴暁教員、我部篤教員、田中の総勢8名であり、日頃より課外活動時の校内プールの見回りなどのご面倒をいただいた。また、令和2年2月には、本校水泳部OB（9期～14期）の皆様からの寄附金により購入したハナミズキについて、三川譲二元校長、江崎昇二元教員、水泳部OB代表者の皆様と一緒に植樹祭を行った。これまで水泳部に携わっていただいた関係諸氏に心より御礼申し上げる。



写真 3.3.14 植樹祭での記念撮影
(令和2年2月)



写真 3.3.15-1 2024 年九州沖縄地区高専体育
大会にて

3.3.15 ハンドボール部

(令和5年度代表顧問 沖田)

ハンドボール部はラグビー部のシーズンスポーツとして 2002 年に愛好会として始まった。愛好会から同好会に昇格し、その後の 2012 年に有志の学生の尽力により、正式な部として活動を始めた。

この 10 年の成績としては、平成 27 年度と平成 28 年度に高専大会の九州沖縄地区で予選リーグを突破し、第 3 位の成績を収めた。これらの年は全国大会への出場枠が広がっていたこともあり、全国大会（八代市開催、金沢市開催）に進んだ。健闘はしたものの全国大会での 1 勝は叶わなかった。その後は部員の数が減ったり、コロナ過で上手く活動が行えなかったりなどあったが、令和 4 年度から外部コーチの相浦宏介コーチもハンドボール部の技術指導に加わり、練習の活気も上がっている。高専大会以外にもチャレンジカップや久留米市ハンドボール大会に参加するなどし、経験と実力を培っている。

今後の九州沖縄地区高専大会優勝および高専全国大会出場、勝利を目指し、日々の活動に邁進している。

最後にここ 10 年のハンドボール部の活動を支えて頂いた顧問の篠島弘幸先生、黒飛敬先生、宮崎浩一先生、小山暁先生に心より感謝いたします。

3.3.16 ソフトテニス部

(令和6年度代表顧問 辻)

2013 年以前は、同好会として活動していた。年間を通じて複数行われる福岡県高等学校体育連盟主催の大会、久留米ソフトテニス連盟による市内高校リーグ、および毎年 7 月に開催される九州・沖縄地区高専体育大会に参加するために、日々練習に励んだ努力が認められ、2014 年度にめでたく「同好会」から「部」に昇格した。しかし、ここ数年の活動状況は芳しくない。2024 年度は、50 名に近い学生が部員登録しているが、週に 3 回の練習日に参加するのは 4、5 名程度であり、大会の結果も 1 回戦突破がやっとの状態である。

2018 年 6 月から 2020 年 2 月まで筑後川堤防拡張工事が実施された。本校テニスコートは工事範囲に入っていたため、使用することができなかった。追い打ちをかけるように、2019 年から流行した新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、2020 年度から、部活動は縮小を余儀なくされた。そのような状況においても、代表顧問の指導の下、制限の範囲内で、志ある選手たちは活動を続けてきた。ワクチンの普及などにより感染の終息が見え始めた 2022 年度から大会が開催されるようになり、練習が再開さ

れた。しかし、練習環境が制限されていた期間が長かったためか、志のある選手が練習する部になったようである。

多感な時期に幅広い年代の学生が集う高専の部活は、学生が中心となり活動することにより、講義では教えてもらえない多くのことを学んでいる。上級生は下級生を育てることにより指導力を身に付け、意見を戦わせながらチームとしての方向性を定めることにより、組織運営の何たるかを理解する。個人の意見も大切だが、集団としての体をなすためには、チームとしての方針を優先し、個の考えを犠牲にすることも必要である。チームとしての明確な目標をもち、その目標達成のために邁進するチームになって欲しいと切に願っている。



写真 3.3.17 令和 6 年度 夏合宿先にて

3.3.17 サイクリング同好会

(令和 6 年度代表顧問 中尾)

サイクリング同好会は、平成 15 年に団体結成されたもので、当初は愛好会としてスタートし、平成 21 年度に同好会に引き上げられた。

団体結成の目的は、サイクリングを通じた人間育成及び健康促進であり、主にロードバイクによる活動が中心である。但し、時期によってはマウンテンバイクや MBK 等の部員の趣向に合わせた活動も行ってきた。

競技については、様々なイベントが行われているが、ここ 10 年での参加は低調である。また、コロナウイルス災禍によって、サイクリング競技、イベント等の中止が相次ぎ、また、イベント自体が再開されず、部員たちのモチベーションは低下しているようである。そんな中で令和 6 年度、卒業生らの協力により、夏合宿(2 泊 3 日)を復活させることができた。今後も安全面に考慮しながら、積極的にイベント等へ参画し、心身の鍛錬のために続けて行きたい。

第4章 資料

4. 1. 1 専攻科の修了者数と学位取得者数

平成26年度～令和5年度

() は他高専出身者で内数

年度	修了者数						学位取得者(修了時)					
	機械・電気システム工学専攻		物質工学専攻		合計		機械・電気システム工学専攻		物質工学専攻		合計	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
平成26年度	17(1)	0	12	1	29(1)	1	17(1)	0	12	1	29(1)	1
平成27年度	16	0	9	2	25	2	16	0	9	2	25	2
平成28年度	19	1	8	4	27	5	19	1	8	4	27	5
平成29年度	18	0	6	4	24	4	18	0	6	4	24	4
平成30年度	15	1	12	4	27	5	15	1	12	4	27	5
令和元年度	25	3	10	1	35	4	25	3	10	1	35	4
令和2年度	23	0	14	7	37	7	23	0	14	7	37	7
令和3年度	18	3	9	3	27	6	18	3	9	3	27	6
令和4年度	23	0	12	3	35	3	23	0	12	3	35	3
令和5年度	23	2	8	4	31	6	23	2	8	4	31	6

4. 1. 2 専攻科の修了者の進路状況

(1) 機械・電気システム工学専攻

() は女子数で内数

卒業年度	修了者数	就職希望者数	求人数	求人倍率	就職者数	就職率	地域別		進学者数	その他
							県内	県外		
平成26年度	17 (0)	3 (0)	427	142.3	3 (0)	100	1	2	13 (0)	
平成27年度	16 (0)	6 (0)	514	85.6	6 (0)	100	4	2	10 (0)	
平成28年度	20 (1)	6 (1)	681	113.5	6 (1)	100	2	4	13 (0)	
平成29年度	18 (0)	6 (0)	790	131.6	5 (0)	83.3	0	5	12 (0)	
平成30年度	16 (1)	8 (0)	787	98.3	8 (0)	100	2	6	8 (1)	
令和元年度	28 (3)	7 (1)	779	111.2	7 (1)	100	3	4	20 (2)	
令和2年度	23 (0)	10 (0)	772	77.2	10 (0)	100	3	7	12 (0)	
令和3年度	21 (3)	16 (2)	735	45.9	16 (2)	100	3	13	5 (1)	
令和4年度	23 (0)	14 (0)	761	54.3	13 (0)	92.8	2	11	9 (0)	
令和5年度	25 (2)	13 (1)	826	63.5	13 (1)	100	2	11	12 (1)	

(2) 物質工学専攻

() は女子数で内数

卒業年度	修了者数	就職希望者数	求人数	求人倍率	就職者数	就職率	地域別		進学者数	その他
							県内	県外		
平成26年度	13 (1)	6 (0)	230	38.3	6 (0)	100	1	5	7 (1)	
平成27年度	11 (2)	4 (2)	264	66	4 (2)	100	1	3	7 (0)	
平成28年度	12 (4)	5 (2)	413	82.6	5 (2)	100	0	5	7 (2)	
平成29年度	10 (4)	2 (2)	496	248	2 (2)	100	0	2	8 (2)	
平成30年度	16 (4)	5 (2)	548	109.6	5 (2)	100	1	4	11 (2)	
令和元年度	11 (1)	2 (0)	525	262.5	2 (0)	100	0	2	9 (1)	
令和2年度	21 (7)	9 (6)	539	59.8	9 (6)	100	2	7	12 (1)	
令和3年度	12 (3)	7 (3)	514	73.4	7 (3)	100	1	6	5 (0)	
令和4年度	15 (3)	4 (1)	556	139	4 (1)	100	1	3	11 (2)	
令和5年度	12 (4)	7 (3)	592	84.5	7 (3)	100	0	7	5 (1)	

4. 2. 1 卒業生の就職・進路状況

(1) 機械工学科

() は女子数で内数

卒業年度	卒業者数	就職希望者数	求人数	求人倍率	就職者数	就職率	地域別		進学者数	地域別		その他
							県内	県外		県内	県外	
平成26年度	37 (2)	21 (2)	635	30.2	20 (2)	95.2	2	18	14 (1)	7 (0)	7 (1)	3
平成27年度	46 (3)	30 (2)	704	23.4	30 (2)	100	8	22	13 (1)	7 (1)	6 (0)	3
平成28年度	37 (0)	20 (0)	809	40.4	19 (0)	95	2	17	15 (0)	9 (0)	6 (0)	3
平成29年度	44 (0)	25 (0)	891	35.6	25 (0)	100	5	20	16 (0)	12 (0)	4 (0)	3
平成30年度	39 (0)	17 (0)	893	52.5	17 (0)	100	3	14	19 (0)	13 (0)	6 (0)	3
令和1年度	36 (2)	18 (1)	860	47.7	18 (1)	100	1	17	17 (1)	11 (0)	6 (1)	1
令和2年度	36 (3)	17 (2)	807	47.4	17 (2)	100	1	16	18 (1)	16 (1)	2 (0)	1
令和3年度	49 (6)	29 (5)	767	26.4	28 (5)	96.6	5	23	19 (1)	9 (1)	10 (0)	2
令和4年度	32 (4)	19 (4)	801	42.1	19 (4)	100	4	15	11 (0)	5 (0)	6 (0)	2
令和5年度	39 (6)	23 (3)	853	37	23 (3)	100	4	19	14 (2)	8 (1)	6 (1)	2

(2) 電気電子工学科

() は女子数で内数

卒業年度	卒業者数	就職希望者数	求人数	求人倍率	就職者数	就職率	地域別		進学者数	地域別		その他
							県内	県外		県内	県外	
平成26年度	35 (1)	21 (0)	652	31	20 (0)	95.2	5	15	12 (1)	8 (1)	4 (0)	3
平成27年度	46 (2)	21 (2)	693	33	20 (2)	95.2	4	16	23 (0)	12 (0)	11 (0)	3
平成28年度	38 (5)	19 (3)	800	42.1	19 (3)	100	5	14	17 (2)	9 (1)	8 (1)	2
平成29年度	35 (3)	18 (1)	897	49.8	18 (1)	100	4	14	17 (2)	10 (1)	7 (1)	0
平成30年度	38 (3)	16 (3)	906	56.6	16 (3)	100	4	12	20 (0)	9 (0)	11 (0)	2
令和1年度	33 (3)	16 (2)	872	54.5	16 (2)	100	4	12	16 (1)	12 (1)	4 (0)	1
令和2年度	34 (3)	14 (2)	830	59.2	14 (2)	100	3	11	18 (1)	14 (1)	4 (0)	2
令和3年度	39 (1)	18 (0)	791	43.9	15 (0)	83.3	6	9	19 (1)	14 (1)	5 (0)	5
令和4年度	37 (2)	14 (1)	825	58.9	13 (1)	92.9	3	10	22 (1)	12 (0)	10 (1)	2
令和5年度	45 (6)	20 (5)	889	44.4	18 (5)	90	4	14	25 (1)	14 (1)	11 (0)	2

(3) 制御情報工学科

() は女子数で内数

卒業年度	卒業者数	就職希望者数	求人数	求人倍率	就職者数	就職率	地域別		進学者数	地域別		その他
							県内	県外		県内	県外	
平成26年度	37 (2)	20 (2)	520	26	18 (2)	90	4	14	17 (0)	12 (0)	5 (0)	2
平成27年度	36 (3)	20 (3)	580	29	20 (3)	100	4	16	16 (0)	13 (0)	3 (0)	0
平成28年度	36 (3)	25 (3)	683	27.3	25 (3)	100	9	16	10 (0)	4 (0)	6 (0)	1
平成29年度	40 (3)	22 (1)	762	34.6	22 (1)	100	8	14	17 (2)	14 (2)	3 (0)	1
平成30年度	35 (5)	17 (5)	820	48.2	17 (5)	100	3	14	16 (1)	13 (1)	3 (0)	2
令和1年度	37 (7)	25 (2)	810	32.4	25 (2)	100	6	19	11 (4)	7 (2)	4 (2)	1
令和2年度	39 (7)	26 (5)	774	29.7	26 (5)	100	2	24	11 (0)	7 (0)	4 (0)	2
令和3年度	44 (7)	26 (5)	735	28.2	26 (5)	100	7	19	16 (1)	14 (1)	2 (0)	2
令和4年度	38 (7)	14 (6)	770	55	13 (6)	92.9	3	10	21 (1)	12 (1)	9 (0)	4
令和5年度	40 (8)	18 (7)	816	45.3	16 (6)	88.9	3	13	17 (2)	16 (1)	1 (1)	7

(4) 生物応用化学科

() は女子数で内数

卒業年度	卒業者数	就職希望者数	求人数	求人倍率	就職者数	就職率	地域別		進学者数	地域別		その他
							県内	県外		県内	県外	
平成26年度	38 (15)	18 (10)	293	16.2	18 (10)	100	1	17	19 (6)	8 (3)	11 (3)	1
平成27年度	36 (20)	20 (15)	311	15.5	20 (15)	100	1	19	16 (5)	10 (4)	6 (1)	0
平成28年度	33 (18)	24 (15)	436	18.1	24 (15)	100	4	20	9 (3)	6 (2)	3 (1)	0
平成29年度	40 (26)	30 (23)	501	16.7	30 (23)	100	2	28	10 (3)	6 (0)	4 (3)	0
平成30年度	41 (22)	17 (11)	568	33.4	17 (11)	100	0	17	24 (11)	14 (8)	10 (3)	0
令和1年度	34 (11)	14 (7)	553	39.5	14 (7)	100	1	13	20 (4)	10 (2)	10 (2)	0
令和2年度	39 (14)	22 (11)	532	24.1	22 (11)	100	1	21	16 (4)	8 (2)	8 (2)	1
令和3年度	42 (18)	16 (9)	501	31.3	16 (9)	100	1	15	24 (9)	10 (3)	14 (6)	2
令和4年度	35 (16)	13 (8)	552	42.4	13 (8)	100	1	12	20 (7)	8 (3)	12 (4)	2
令和5年度	35 (12)	15 (6)	586	39	15 (6)	100	0	15	20 (6)	11 (2)	9 (4)	0
												0

(4) 材料システム工学科 (※平成26年度～平成29年度：材料工学科)

() は女子数で内数

卒業年度	卒業者数	就職希望者数	求人数	求人倍率	就職者数	就職率	地域別		進学者数	地域別		その他
							県内	県外		県内	県外	
平成26年度	37 (11)	23 (11)	316	13.7	22 (11)	95.7	6	16	13 (2)	8 (2)	5 (0)	2
平成27年度	36 (10)	22 (7)	345	15.6	22 (7)	100	3	19	13 (3)	7 (2)	6 (1)	1
平成28年度	38 (7)	24 (4)	459	19.1	23 (4)	95.8	7	16	13 (3)	10 (2)	3 (1)	2
平成29年度	35 (13)	20 (12)	529	26.4	20 (12)	100	5	15	13 (1)	9 (1)	4 (0)	2
平成30年度	36 (24)	20 (9)	600	30	20 (9)	100	5	15	15 (0)	9 (0)	6 (0)	1
令和1年度	37 (12)	21 (9)	580	27.6	21 (9)	100	1	20	15 (2)	8 (1)	7 (1)	1
令和2年度	37 (11)	19 (5)	558	29.3	19 (5)	100	3	16	17 (5)	10 (3)	7 (2)	1
令和3年度	35 (6)	21 (3)	524	24.9	20 (2)	95.2	6	14	14 (3)	10 (2)	4 (1)	1
令和4年度	40 (18)	19 (9)	584	30.7	19 (9)	100	6	13	20 (8)	13 (4)	7 (4)	1
令和5年度	37 (13)	21 (8)	609	29	21 (8)	100	4	17	16 (5)	10 (2)	6 (3)	0

4. 2. 2 地区別就職状況

学科	卒業年次	九州地区	関西地区	関東地区	その他	計
機械工学科	平成26	3	5	8	4	20
	平成27	9	4	15	2	30
	平成28	4	5	6	4	19
	平成29	5	3	15	2	25
	平成30	5	3	6	3	17
	令和1	1	3	11	3	18
	令和2	2	1	10	4	17
	令和3	8	2	13	5	28
	令和4	7	2	5	5	19
	令和5	5	3	13	2	23
電気電子工学科	平成26	6	1	10	3	20
	平成27	6	4	10	0	20
	平成28	7	4	6	2	19
	平成29	8	3	5	2	18
	平成30	5	2	6	3	16
	令和1	5	3	7	1	16
	令和2	3	1	10	0	14
	令和3	7	2	5	1	15
	令和4	4	1	6	2	13
	令和5	4	3	8	3	18
制御情報工学科	平成26	5	3	9	1	18
	平成27	6	2	8	4	20
	平成28	9	0	12	4	25
	平成29	11	3	7	1	22
	平成30	4	0	11	2	17
	令和1	7	0	16	2	25
	令和2	4	4	16	2	26
	令和3	8	3	12	3	26
	令和4	4	1	8	0	13
	令和5	4	1	9	2	16
生物応用化学科	平成26	3	3	10	2	18
	平成27	7	5	6	2	20
	平成28	6	9	6	3	24
	平成29	8	6	12	4	30
	平成30	4	0	11	2	17
	令和1	3	5	6	0	14
	令和2	4	3	15	0	22
	令和3	5	2	7	2	16
	令和4	2	2	9	0	13
	令和5	1	2	12	0	15
材料システム工学科 (平成26年度～平成29年 度：材料工学科)	平成26	7	3	7	5	22
	平成27	6	5	7	4	22
	平成28	9	2	9	3	23
	平成29	5	2	8	5	20
	平成30	7	3	8	2	20
	令和1	1	8	11	1	21
	令和2	6	3	6	4	19
	令和3	9	3	6	2	20
	令和4	11	1	4	3	19
	令和5	6	1	9	5	21

4. 2. 3 業種別及び産業別就職状況

(1) 機械工学科

年度		平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和1年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
区分											
農	業										
建	設	業	1		3	3			2	1	1
製	食料品・飲料・たばこ・飼料							1		1	
	織 維 工 業				1						
	印 刷 ・ 同 関 連 業		1		1			1			
	化学工業・石油・石炭製品	3	2		1		2	3	5		4
	鉄鋼業・非鉄金属・金属製品		7	2	2	1	1		5	3	1
	一 般 機 械 器 具	1	4		5	2	3	3	4	5	8
	電気部品・端末・回路製造業	1	4	2	1			2	2	4	5
	電 気 ・ 情 報 通 信 機 器	6	1	3		11	4	2		2	2
	輸 送 用 機 械 器 具	8	9	8	6	1	3	3	4		
	そ の 他 の 製 造 業						1	1		1	
電 気 ・ ガ ス ・ 熱 供 給 ・ 水 道 業			2	1	1	1	1	1	1		
情 報 通 信 業										1	
運 輸 業 ・ 郵 便 業					1	1	1		1		1
卸 売 ・ 小 売 業											
学 術 ・ 専 門 ・ 技 術 サ ー ビ ス 業					2		2		3		1
そ の 他					1				1	1	
合 計		20	30	19	25	17	18	17	28	19	23

(2) 電気電子工学科

年度		平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和1年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
区分											
農	業										
建	設	業			1		3	1	2	1	
製	食料品・飲料・たばこ・飼料	1		2			1				
	織 維 工 業										
	印 刷 ・ 同 関 連 業		1	2				1			
	化学工業・石油・石炭製品	1	1		1						1
	鉄鋼業・非鉄金属・金属製品		1	1		2					
	一 般 機 械 器 具	3	1		3	3	2	5	1	2	8
	電気部品・端末・回路製造業		4	3		1		2	2	1	2
	電 気 ・ 情 報 通 信 機 器	2		2	3	5	4		1	1	
	輸 送 用 機 械 器 具	2	1	5	2	1			1		3
	そ の 他 の 製 造 業										
電 気 ・ ガ ス ・ 熱 供 給 ・ 水 道 業		2	3	1	5	2	2	1	4	4	2
情 報 通 信 業		1	2	1	2		3	4	2	4	2
運 輸 業 ・ 郵 便 業		1	1	1					1		
卸 売 ・ 小 売 業			1						1		
学 術 ・ 専 門 ・ 技 術 サ ー ビ ス 業		1	2		1	1	1				
そ の 他		6	2	1							
合 計		20	20	19	18	15	16	14	15	13	18

(3) 制御情報工学科

年度		平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和1年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
区分											
農	業										
建	設	業	1		1		3	3			
製	食料品・飲料・たばこ・飼料				2	1					
	織 維 工 業										
	印 刷 ・ 同 関 連 業			1					2		
	化学工業・石油・石炭製品	1		1		1					
	鉄鋼業・非鉄金属・金属製品			1				1		1	
	一 般 機 械 器 具	1	1	5	2	1		1	5		
	電気部品・端末・回路製造業		8	2	2	2		1	2		1
	電 気 ・ 情 報 通 信 機 器	5	2	7	2		3	1		1	
	輸 送 用 機 械 器 具	1	1	3	3	3			2		
	そ の 他 の 製 造 業	2				1	1			2	1
電 気 ・ ガ ス ・ 熱 供 給 ・ 水 道 業		2	3	2	1		3	1			
情 報 通 信 業		2	2	2	6	7	15	17	14	8	13
運 輸 業 ・ 郵 便 業			1	1	1				1		
卸 売 ・ 小 売 業					1						
学 術 ・ 専 門 ・ 技 術 サ ー ビ ス 業						1		1			
そ の 他		3	2		1	1				1	1
合 計		18	20	25	22	18	25	26	26	13	16

(4) 生物応用化学科

年度		平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和1年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
区分											
農	業							1			
建	設							1			
製	食料品・飲料・たばこ・飼料		1	3	4			1	1		3
	織 維 工 業										
	印 刷 ・ 同 関 連 業										
	化学工業・石油・石炭製品	13	18	17	20	13	12	18	12	8	12
	鉄鋼業・非鉄金属・金属製品								1		
	一 般 機 械 器 具						1			1	
	電気部品・端末・回路製造業			1	1					1	
	電 気 ・ 情 報 通 信 機 器										
	輸 送 用 機 械 器 具			1							
業	そ の 他 の 製 造 業			1	3						
電 気 ・ ガ ス ・ 熱 供 給 ・ 水 道 業		1	1								
情 報 通 信 業											
運 輸 業 ・ 郵 便 業											
卸 売 ・ 小 売 業											
学 術 ・ 専 門 ・ 技 術 サ ー ビ ス 業					2	4	1	1	1	3	
そ の 他		4		1					1		
合 計		18	20	24	30	17	14	22	16	13	15

(5) 材料システム工学科 (平成26年度～平成29年度：材料工学科)

年度		平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和1年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
区分											
農	業										
建	設										
製	食料品・飲料・たばこ・飼料						1				1
	織 維 工 業			2			1				
	印 刷 ・ 同 関 連 業				1						
	化学工業・石油・石炭製品	2	1	1	1	3	1	2	3	3	1
	鉄鋼業・非鉄金属・金属製品	8	7	14	13	10	11	5	6	5	9
	一 般 機 械 器 具	1	1		2		2	1	2	3	5
	電気部品・端末・回路製造業	1	3					3	2	2	1
	電 気 ・ 情 報 通 信 機 器					4	1				
	輸 送 用 機 械 器 具	4	8	5	2	2	1	3	2		2
業	そ の 他 の 製 造 業	5	1	1			1	1	2	2	
電 気 ・ ガ ス ・ 熱 供 給 ・ 水 道 業						1	1	1		1	
情 報 通 信 業											
運 輸 業 ・ 郵 便 業											
卸 売 ・ 小 売 業										1	
学 術 ・ 専 門 ・ 技 術 サ ー ビ ス 業			1		1		1	2	2	1	1
そ の 他		1						1	1	1	1
合 計		22	22	23	20	20	21	19	20	19	21

4.3.1 科学研究費補助金受給状況

科学研究費補助金採択課題一覧

(単位:千円)

年度	種目	研究代表者		研究課題	交付金額
		所属・職	氏名		
27	基盤研究(C) (期間延長)	材料工学科 教授	田中慎一	非対称交流電解による生体親和性を有する多孔質皮膜の生成	0
	基盤研究(C) (継続)	生物応用化学学科 准教授	松山清	超臨界流体活性化法を用いた分子認識機能を有する多孔性配位高分子膜の開発	910
	基盤研究(C) (継続)	電気電子工学科 准教授	ウリントヤ	日常生活における妊娠女性・胎児へのデジタル電磁波影響の高精度シミュレーション	780
	基盤研究(C) (継続)	生物応用化学学科 教授	石井努	ドナー・アクセプター蛍光色素の自己会合を鍵とした生体蛍光検出	650
	基盤研究(C) (継続)	機械工学科 教授	中武靖仁	炭酸ガス抽入燃料によるディーゼル機関の燃焼改善に関する研究	390
	基盤研究(C) (新規)	制御情報工学科 准教授	黒木祥光	スパース表現を用いた多視点ライトフィールド画像の実時間符号化に関する研究	1,430
	萌芽研究 (期間延長)	電気電子工学科 教授	越地尚宏	多様な双方向性及びPBL観点を主眼にした実験ノートを核とする実験指導に関する研究	0
	萌芽研究 (新規)	電気電子工学科 教授	越地尚宏	リテラシーの涵養とPBLを主眼とする双方向実験ノートを用いた実験指導に関する研究	650
	若手研究(B) (継続)	一般科目(文科系) 助教	藤木篤	技術者の責任と環境配慮義務に関する研究:工学倫理と環境倫理学の両面的アプローチ	650
	若手研究(B) (新規)	制御情報工学科 助手	堺研一郎	強磁性金属 Fe ₃ Si/ 半導体 FeSi ₂ 人工格子による新規スピン注入素子の創製	3,770
	若手研究(B) (新規)	機械工学科 助教	大津健史	複数添加剤を併用した低摩擦潤滑機構とその評価法に関する研究	1,950
	若手研究(B) (新規)	材料工学科 准教授	岩田憲幸	ナノ・メゾ組織制御による高強度粒子分散強化合金の創製と強化機構の実験的解明	2,730
	研究活動スタート支援 (新規)	一般科目(文科系) 准教授	藍澤光晴	インド系マダガスカル人の経済活動	1,170
28	基盤研究C (継続)	電気電子工学科 准教授	ウリントヤ	日常生活における妊娠女性・胎児へのデジタル電磁波影響の高精度シミュレーション	780
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 教授	石井努	ドナー・アクセプター蛍光色素の自己会合を鍵とした生体蛍光検出	650
	基盤研究C (継続)	機械工学科 准教授	谷野忠和	都市環境型制御フリー集風ケーシング付高出力垂直軸風車の実用化	780
	基盤研究(C) (継続)	機械工学科 教授	中武靖仁	炭酸ガス抽入燃料によるディーゼル機関の燃焼改善に関する研究	390
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 准教授	黒木祥光	スパース表現を用いた多視点ライトフィールド画像の実時間符号化に関する研究	1,690
	基盤研究C (新規)	生物応用化学学科 教授	津田祐輔	光照射で濡れ性制御が可能なポリイミドの創成とエレクトロニクス・バイオ分野への応用	2,730
	基盤研究C (新規)	電気電子工学科 教授	平川靖之	ゴム製品におけるフィラー補強効果のテラヘルツ分光による解明	3,120
	基盤研究C (新規)	生物応用化学学科 准教授	松山清	超臨界流体法による多孔性配位高分子-ナノ粒子複合体の創製とその工業的利用技術開発	2,470
	挑戦的萌芽研究 (継続)	電気電子工学科 教授	越地尚宏	リテラシーの涵養とPBLを主眼とする双方向実験ノートを用いた実験指導に関する研究	650
	若手研究B (継続)	一般科目(文科系) 講師	藤木篤	技術者の責任と環境配慮義務に関する研究:工学倫理と環境倫理学の両面的アプローチ	650
	若手研究(B) (新規)	材料工学科 准教授	岩田憲幸	ナノ・メゾ組織制御による高強度粒子分散強化合金の創製と強化機構の実験的解明	1,300
	若手研究B (継続)	制御情報工学科 助手	堺研一郎	強磁性金属 Fe ₃ Si/ 半導体 FeSi ₂ 人工格子による新規スピン注入素子の創製	650
	奨励研究 (新規)	教育研究支援室 技術専門職員	岡崎朋広	実験への意識を改革して実践的技術力を養う荷物搬送ロボットの設計・試作	300
29	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 准教授	黒木祥光	スパース表現を用いた多視点ライトフィールド画像の実時間符号化に関する研究	780
	基盤研究C (継続)	材料システム工学科 教授	森園靖浩	チタン及びその酸化物に対する新しい熱還元・炭窒化プロセス開発	1,040
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 准教授	松山清	超臨界流体法による多孔性配位高分子-ナノ粒子複合体の創製とその工業的利用技術開発	1,040
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 教授	津田祐輔	光照射で濡れ性制御が可能なポリイミドの創成とエレクトロニクス・バイオ分野への応用	1,430
	基盤研究C (継続)	電気電子工学科 教授	平川靖之	ゴム製品におけるフィラー補強効果のテラヘルツ分光による解明	910
	基盤研究C (新規)	生物応用化学学科 教授	石井努	会合発光色素のレクチンへの可逆的な結合・解離に基づく生体蛍光検出	2,470
	基盤研究C (新規)	機械工学科 准教授	谷野忠和	抗力型風車高出力化のための集風ケーシング偏流装置の最適化	1,300
	若手研究B (新規)	一般科目(文科) 准教授	藤木篤	工学倫理における公衆優先原則と環境配慮義務の相反に関する研究	1,170
	若手研究B (新規)	制御情報工学科 准教授	松島宏典	クラウド型道路損傷計測システムの開発	1,820

30	奨励研究 (新規)	教育研究支援センター 技術専門職員	岡崎朋広	好奇心と創造性に画像処理で応えるタフで実用的な荷 物搬送ロボットの設計・試作	510
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 教授	津田祐輔	光照射で濡れ性制御が可能なポリイミドの創成とエレクトロニクス・バイオ分野への応用	1,040
	基盤研究C (継続)	電気電子工学科 教授	平川靖之	ゴム製品におけるフィラー補強効果のテラヘルツ分光による解明	910
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 教授	石井努	会合発光色素のレクチンへの可逆的な結合・解離に基づく生体蛍光検出	1,170
	基盤研究C (継続)	機械工学科 准教授	谷野忠和	抗力型風車高出力化のための集風ケーシング偏流装置の最適化	650
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 准教授	松山清	超臨界流体法による多孔性配位高分子ナノ粒子複合体の創製とその工業的利用技術開発	1,040
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 准教授	松島宏典	クラウド型道路損傷計測システムの開発	1,040
	基盤研究C (新規)	制御情報工学科 教授	小田幹雄	英語の語形変化推定を利用した言語モデルによる自動文書作成ソフトウェアに関する研究	2,080
	若手研究 (新規)	材料システム工学科 助教	佐々木大輔	長いき裂を対象とするペースト法とプラズマ法を複合した新規き裂進展抑制手法の構築	2,860
	奨励研究 (新規)	教育研究支援センター 技術専門職員	岡崎朋広	ウイルス感染してその脅威を学ぶ最恐のセキュリティ教育実践用ネットワークの構築	460
	奨励研究 (新規)	教育研究支援センター 技術専門職員	吉武靖生	バーチャルリアリティ(VR)を用いた鋳造体験教材の開発	510
1	基盤研究C (継続)	機械工学科 教授	谷野忠和	抗力型風車高出力化のための集風ケーシング偏流装置の最適化	260
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 教授	石井努	会合発光色素のレクチンへの可逆的な結合・解離に基づく生体蛍光検出	1,170
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 教授	小田幹雄	英語の語形変化推定を利用した言語モデルによる自動文書作成ソフトウェアに関する研究	650
	基盤研究C (新規)	材料システム工学科 教授	森園靖浩	鋼に対する新しい浸炭現象の発見と実用プロセスへの展開	2,470
	基盤研究C (新規)	材料システム工学科 教授	山本郁	鋳型振動法を用いた鋳造材料の結晶粒微細化と結晶粒微細化機構の解明	1,950
	基盤研究C (新規)	一般科目(文科系) 准教授	横溝彰彦	高等学校におけるESDと大学における異文化コミュニケーション教育の接続と開発	1,950
	若手研究 (継続)	材料システム工学科 助教	佐々木大輔	長いき裂を対象とするペースト法とプラズマ法を複合した新規き裂進展抑制手法の構築	650
	若手研究 (新規)	制御情報工学科 助教	古賀裕章	自己組織化マップを用いた眼底血管の形状分類による脳卒中リスクの推定	1,170
	奨励研究 (新規)	教育研究支援センター 技術専門職員	吉利用之	VR動画とヒヤリハット報告を用いた安全管理手法の構築	540
	奨励研究 (新規)	教育研究支援センター 技術職員	屋並陽仁	IoTを最大限活用した、学生のための全国横断仮想スマートグリッド実験システムの構築	540
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 教授	小田幹雄	英語の語形変化推定を利用した言語モデルによる自動文書作成ソフトウェアに関する研究	650
2	基盤研究C (継続)	材料システム工学科 教授	森園靖浩	鋼に対する新しい浸炭現象の発見と実用プロセスへの展開	1,040
	基盤研究C (継続)	材料システム工学科 教授	山本郁	鋳型振動法を用いた鋳造材料の結晶粒微細化と結晶粒微細化機構の解明	1,300
	基盤研究C (継続)	一般科目(文科系) 准教授	横溝彰彦	高等学校におけるESDと大学における異文化コミュニケーション教育の接続と開発	1,560
	基盤研究C (新規)	機械工学科 教授	中武靖仁	軽油・重油へのファインバブル添加による燃費改善および排ガスクリーン化	2,600
	基盤研究C (新規)	機械工学科 教授	田中大	赤外線カメラを用いたレドックスフロー電池のセル内流動状態の可視化	1,430
	基盤研究C (新規)	機械工学科 准教授	南山靖博	囲い込み制御理論の進展と安全接触可能な高応答多リンクシステムの開発と応用	2,340
	基盤研究C (新規)	電気電子工学科 教授	加藤直孝	ネットワークシステム実習教育機器のGNS3による仮想化とその機能拡張	2,600
	基盤研究C (新規)	制御情報工学科 教授	黒木祥光	I1 ノルム損失における畳み込み型スパース表現と分散圧縮符号化・深層学習への展開	1,690
	基盤研究C (新規)	制御情報工学科 准教授	中野明	AI技術を用いた日本人英語学習者のためのリーダビリティ予測モデルの開発	390
	基盤研究C (新規)	生物応用化学学科 准教授	萩原義徳	オプトジェネティクスを促進するビリン色素合成酵素ライブラリの構築	2,340
	基盤研究C (新規)	一般科目(文科系) 准教授	赤塚康介	ヒト運動抑制機能へ運動強度が及ぼす影響について	3,900
	若手研究 (継続)	材料システム工学科 助教	佐々木大輔	長いき裂を対象とするペースト法とプラズマ法を複合した新規き裂進展抑制手法の構築	650
	若手研究 (継続)	制御情報工学科 助教	古賀裕章	自己組織化マップを用いた眼底血管の形状分類による脳卒中リスクの推定	910
	若手研究 (新規)	電気電子工学科 助教	原田裕二郎	ニューロンMOSFETを用いた最小ユークリッド距離検索連想メモリに関する研究	1,950
	若手研究 (新規)	材料システム工学科 助教	小袋由貴	遮熱特性に優れた非クロム系複合酸化顔料の創製	2,340
	若手研究 (新規)	機械工学科 助教	渡邊悠太	超音速粒子衝突による光触媒酸化チタン粒子の固定化	2,210

3	研究活動スタート支援 (新規)	一般科目(文科系) 助教	常木佳奈	口絵デジタルアーカイブ拡充と明治期出版文化研究への活用	1,300
	基盤研究C (期間延長)	制御情報工学科 教授	小田幹雄	英語の語形変化推定を利用した言語モデルによる自動文書作成ソフトウェアに関する研究	0
	基盤研究C (継続)	材料システム工学科 教授	森園靖浩	鋼に対する新しい浸炭現象の発見と実用プロセスへの展開	910
	基盤研究C (継続)	材料システム工学科 教授	山本郁	鋳型振動法を用いた鋳造材料の結晶粒微細化と結晶粒微細化機構の解明	1,170
	基盤研究C (継続)	一般科目(文科系) 准教授	横溝彰彦	高等学校におけるESDと大学における異文化コミュニケーション教育の接続と開発	910
	基盤研究C (継続)	機械工学科 教授	中武靖仁	軽油・重油へのファインバブル添加による燃費改善および排ガスクリーン化	1,170
	基盤研究C (継続)	機械工学科 教授	田中大	赤外線カメラを用いたレドックスフロー電池のセル内流動状態の可視化	1,820
	基盤研究C (継続)	機械工学科 准教授	南山靖博	囲い込み制御理論の進展と安全接触可能な高応答多リンクシステムの開発と応用	1,040
	基盤研究C (継続)	電気電子工学科 教授	加藤直孝	ネットワークシステム実習教育機器の GNS3 による仮想化とその機能拡張	780
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 教授	黒木祥光	II ノルム損失における畳み込み型スパース表現と分散圧縮符号化・深層学習への展開	1,430
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 准教授	中野明	AI 技術を用いた日本人英語学習者のためのリーダビリティ予測モデルの開発	780
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 准教授	萩原義徳	オプトジェネティクスを促進するビリル色素合成酵素ライブラリの構築	910
	基盤研究C (継続)	一般科目(文科系) 准教授	赤塚康介	ヒト運動抑制機能へ運動強度が及ぼす影響について	130
	基盤研究C (新規)	制御情報工学科 教授	小田幹雄	意味構造と統語構造の統合学習を用いた文書作成支援アプリケーションの開発	1,820
	基盤研究C (新規)	一般科目(文科系) 准教授	岡本和也	「東地中海地域圏」の構築—13-14 世紀のジュチ・ウルスを中心に—	390
	基盤研究C (新規)	一般科目(理科系) 教授	酒井道宏	マルチメディアと AI による数学の深い学びへの誘いとその効果の検証	780
	基盤研究C (新規)	機械工学科 教授	谷野忠和	揚・抗力型ハイブリッドによる高出力・高稼働率垂直軸風車のフイージビリティスタディ	2,210
	基盤研究C (新規)	生物応用化学学科 准教授	笈木宏和	ゴム分解微生物の分解遺伝子特定に関する研究	1,560
	基盤研究C (新規)	生物応用化学学科 教授	石井努	長波長領域に長寿命発光を示す会合性リン光色素群の創出	2,210
	基盤研究C (新規)	制御情報工学科 准教授	松島宏典	道路損傷検出及び地図更新のための自己学習型車載スマートビジョンシステムの開発	1,950
	挑戦的萌芽 (新規)	電気電子工学科 教授	越地尚宏	Withコロナ新時代のアナログ手法とICTを活用した課題解決型実験ノート指導	2,470
	若手研究 (継続)	制御情報工学科 助教	古賀裕章	自己組織化マップを用いた眼底血管の形状分類による脳卒中リスクの推定	1,040
	若手研究 (継続)	機械工学科 助教	渡邊悠太	超音速粒子衝突による光触媒酸化チタン粒子の固定化	650
	若手研究 (継続)	電気電子工学科 助教	原田裕二郎	ニューロン MOSFET を用いた最小ユークリッド距離検索連想メモリに関する研究	1,170
	若手研究 (継続)	材料システム工学科 助教	小袋由貴	遮熱特性に優れた非クロム系複合酸化顔料の創製	1,040
	若手研究 (新規)	一般科目(文科系) 准教授	鴨川都美	村山知義を基軸とした演劇運動史に関する基礎的研究	1,040
	若手研究 (新規)	材料システム工学科 助教	佐々木大輔	簡易延命手法のき裂 / 焼結体界面の最適設計と高サイクル疲労特性向上	2,990
	若手研究 (新規)	制御情報工学科 助教	田中諒	台車型倒立振子の特性値再測定を要しないカスケード型 LADRC の安定解析とその応用	2,860
	若手研究 (新規)	生物応用化学学科 講師	我部篤	炭素の含酸素官能基の存在位置・種類・量の制御による炭素アクティブサイトの創製	2,470
4	研究活動スタート支援 (継続)	一般科目(文科系) 助教	常木佳奈	口絵デジタルアーカイブ拡充と明治期出版文化研究への活用	1,300
	奨励研究 (新規)	教育研究支援センター 技術専門職員	吉利用之	VR 動画とアイトラッキングを用いた安全教育手法の開発とマルチスパン評価	470
	基盤研究C (期間延長)	一般科目(文科系) 准教授	横溝彰彦	高等学校におけるESDと大学における異文化コミュニケーション教育の接続と開発	0
	基盤研究C (継続)	機械工学科 教授	中武靖仁	軽油・重油へのファインバブル添加による燃費改善および排ガスクリーン化	520
	基盤研究C (継続)	機械工学科 教授	田中大	赤外線カメラを用いたレドックスフロー電池のセル内流動状態の可視化	650
	基盤研究C (継続)	機械工学科 准教授	南山靖博	囲い込み制御理論の進展と安全接触可能な高応答多リンクシステムの開発と応用	780
	基盤研究C (継続)	電気電子工学科 教授	加藤直孝	ネットワークシステム実習教育機器の GNS3 による仮想化とその機能拡張	910
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 教授	黒木祥光	II ノルム損失における畳み込み型スパース表現と分散圧縮符号化・深層学習への展開	1,040
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 准教授	中野明	AI 技術を用いた日本人英語学習者のためのリーダビリティ予測モデルの開発	260

	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 准教授	萩原義徳	オプトジェネティクスを促進するビリネ色素合成酵素ライブラリの構築	910
	基盤研究C (継続)	一般科目(文科系) 准教授	赤塚康介	ヒト運動抑制機能へ運動強度が及ぼす影響について	130
	基盤研究C (継続)	機械工学科 教授	谷野忠和	揚・抗力型ハイブリッドによる高出力・高稼働率垂直軸風車のフィージビリティスタディ	1,300
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 教授	小田幹雄	意味構造と統語構造の統合学習を用いた文書作成支援アプリケーションの開発	520
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 准教授	松島宏典	道路損傷検出及び地図更新のための自己学習型車載スマートビジョンシステムの開発	1,040
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 准教授	笈木宏和	ゴム分解微生物の分解遺伝子特定に関する研究	2,080
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 教授	石井努	長波長領域に長寿命発光を示す会合性リン光色素群の創出	1,040
	基盤研究C (継続)	一般科目(文科系) 准教授	岡本和也	「東地中海地域圏」の構築—13-14 世紀のジュチ・ウルスを中心に—	520
	基盤研究C (継続)	一般科目(理科系) 教授	酒井道宏	マルチメディアと AI による数学の深い学びへの誘いとその効果の検証	520
	基盤研究C (新規)	電気電子工学科 教授	宮崎浩一	大気中のラマン散乱現象を利用したレーザービーム品質の非接触モニタリング	2,990
	基盤研究C (新規)	材料システム工学科 教授	奥山哲也	ナノスケール超空間でのアーキテクトニクス分子センシングシートの創成	1,690
	基盤研究C (新規)	材料システム工学科 教授	森園靖浩	二酸化炭素の発生を抑えた鋼の新規浸炭法の提案と応用	2,340
	基盤研究C (新規)	一般科目(文科系) 准教授	藍澤光晴	インド洋におけるマダガスカルの奴隷貿易と奴隷制度の役割	520
	基盤研究C (新規)	一般科目(理科系) 准教授	谷太郎	楕円ファイバーカラビ – ヤウ空間における非小平型特異点の研究	910
	基盤研究C (新規)	一般科目(理科系) 准教授	菰田智恵子	ポストコロナ時代に自ら学ぶ姿勢を涵養する数学オンライン学習スタイルの構築	780
	挑戦的萌芽 (継続)	電気電子工学科 教授	越地尚宏	With コロナ新時代のアナログ手法と ICT を活用した課題解決型実験ノート指導	1,040
	若手研究 (継続)	制御情報工学科 助教	古賀裕章	自己組織化マップを用いた眼底血管の形状分類による脳卒中リスクの推定	1,170
	若手研究 (継続)	機械工学科 助教	渡邊悠太	超音速粒子衝突による光触媒酸化チタン粒子の固定化	520
	若手研究 (継続)	電気電子工学科 助教	原田裕二郎	ニューロン MOSFET を用いた最小ユークリッド距離検索連想メモリに関する研究	1,170
	若手研究 (継続)	材料システム工学科 助教	小袋由貴	遮熱特性に優れた非クロム系複合酸化顔料の創製	780
	若手研究 (継続)	制御情報工学科 助教	田中諒	台車型倒立振子の特性値再測定を要しないカスケード型 LADRC の安定解析とその応用	520
	若手研究 (継続)	生物応用化学学科 講師	我部篤	炭素の含酸素官能基の存在位置・種類・量の制御による炭素アクティブサイトの創製	650
	若手研究 (継続)	材料システム工学科 助教	佐々木大輔	簡易延命手法のき裂 / 焼結体界面の最適設計と高サイクル疲労特性向上	650
	若手研究 (継続)	一般科目(文科系) 准教授	鴨川都美	村山知義を基軸とした演劇運動史に関する基礎的研究	910
	研究活動スタート支援 (期間延長)	一般科目(文科系) 助教	常木佳奈	口絵デジタルアーカイブ拡充と明治期出版文化研究への活用	0
5	基盤研究B (新規)	機械工学科 教授	中武靖仁	脱炭素社会への過渡期を担うファインパブル燃料の製造・品質・輸送・燃焼技術の研究開発	12,870
	基盤研究C (期間延長)	機械工学科 教授	田中大	赤外線カメラを用いたレドックスフロー電池のセル内流動状態の可視化	0
	基盤研究C (期間延長)	機械工学科 准教授	南山靖博	囲い込み制御理論の進展と安全接触可能な高応答多リンクシステムの開発と応用	0
	基盤研究C (期間延長)	制御情報工学科 教授	黒木祥光	11 フルム損失における畳み込み型スパース表現と分散圧縮符号化・深層学習への展開	0
	基盤研究C (期間延長)	一般科目(文科系) 准教授	赤塚康介	ヒト運動抑制機能へ運動強度が及ぼす影響について	0
	基盤研究C (継続)	機械工学科 教授	谷野忠和	揚・抗力型ハイブリッドによる高出力・高稼働率垂直軸風車のフィージビリティスタディ	260
	基盤研究C (継続)	電気電子工学科 教授	宮崎浩一	大気中のラマン散乱現象を利用したレーザービーム品質の非接触モニタリング	910
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 教授	小田幹雄	意味構造と統語構造の統合学習を用いた文書作成支援アプリケーションの開発	520
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 准教授	松島宏典	道路損傷検出及び地図更新のための自己学習型車載スマートビジョンシステムの開発	1,170
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 教授	石井努	長波長領域に長寿命発光を示す会合性リン光色素群の創出	1,040
	基盤研究C (継続)	生物応用化学学科 教授	笈木宏和	ゴム分解微生物の分解遺伝子特定に関する研究	390

	基盤研究C (継続)	材料システム工学科 教授	奥山哲也	ナノスケール超空間でのアーキテクトニクス分子センシング シートの創成	1,560
	基盤研究C (継続)	材料システム工学科 教授	森園靖浩	二酸化炭素の発生を抑えた鋼の新規浸炭法の提案と応用	910
	基盤研究C (継続)	一般科目(文科系) 准教授	岡本和也	「東地中海地域圏」の構築—13-14 世紀のジュチ・ウルスを中心 に—	390
	基盤研究C (継続)	一般科目(理科系) 教授	酒井道宏	マルチメディアと AI による数学の深い学びへの誘いとその 効果の検証	520
	基盤研究C (継続)	一般科目(理科系) 准教授	谷太郎	楢田ファイバーカラビ—ヤウ空間における非小平面型特異点 の研究	390
	基盤研究C (新規)	機械工学科 准教授	南山靖博	MR ブレーキの力制御による安全接触可能な多リンクシステ ムの構築と安全制御理論の進展	2,470
	基盤研究C (新規)	機械工学科 准教授	青野雄太	風車翼への応用を目指した連続観察に基づくスギの疲労損 傷メカニズムに関する研究	2,860
	基盤研究C (新規)	制御情報工学科 教授	黒木祥光	大規模データを用いて作成した畳み込み型スパース辞書に よる分散圧縮符号化と深層学習	1,950
	基盤研究C (新規)	制御情報工学科 准教授	中野明	共起辞書と AI 技術を用いた日本人英語学習者のための リーダービリティ予測モデルの開発	1,040
	挑戦的萌芽研究 (継続)	電気電子工学科 教授	越地尚宏	With コロナ新時代のアナログ手法と ICT を活用した課題解 決型実験ノート指導	1,300
	挑戦的萌芽研究 (新規)	機械工学科 准教授	細野高史	バイオマスと再生石灰を利用したカーボンニュートラルなグ リーンアセチレン合成	2,470
	若手研究 (継続)	機械工学科 准教授	渡邊悠太	超音速粒子衝突による光触媒酸化チタン粒子の固定化	650
	若手研究 (継続)	制御情報工学科 准教授	田中諒	台車型倒立振子の特性値再測定を要しないカスケード型 LADRC の安定解析とその応用	650
	若手研究 (継続)	材料システム工学科 助教	佐々木大輔	簡易延命手法のき裂 / 焼結体界面の最適設計と高サイクル 疲労特性向上	910
	若手研究 (継続)	一般科目(文科系) 教授	鴨川都美	村山知義を基軸とした演劇運動史に関する基礎的研究	650
	若手研究 (継続)	生物応用化学科 助教	谷本勝一	アルギニンによるポリグルタミンタンパク質の凝集阻害過程の 理論研究	650
	若手研究 (新規)	生物応用化学科 准教授	我部篤	構造と含酸素官能基の最適設計による炭素アクティブサイト の析出と触媒反応への応用	1,430
	研究活動スタート支援 (期間延長)	一般科目(文科系) 准教授	常木佳奈	口絵デジタルアーカイブ拡充と明治期出版文化研究への活 用	0
	特別研究員奨励費 (継続)	生物応用化学科 助教	谷本勝一	ハンチントン病原因蛋白質の凝集機構とアルギニン誘導体 による凝集阻害機構の理論研究	1,430
6	基盤研究B (継続)	機械工学科 教授	中武靖仁	脱炭素社会への過渡期を担うファインバブル燃料の製造・ 品質・輸送・燃焼技術の研究開発	3,770
	基盤研究C (期間延長)	機械工学科 教授	谷野忠和	揚・抗力型ハイブリッドによる高出力・高稼働率垂直軸風車 のフィージビリティスタディ	0
	基盤研究C (期間延長)	生物応用化学科 准教授	笈木宏和	ゴム分解微生物の分解遺伝子特定に関する研究	0
	基盤研究C (期間延長)	一般科目(文科系) 准教授	岡本和也	「東地中海地域圏」の構築—13-14 世紀のジュチ・ウルスを中心 に—	0
	基盤研究C (継続)	電気電子工学科 教授	宮崎浩一	大気中のラマン散乱現象を利用したレーザービーム品質の 非接触モニタリング	260
	基盤研究C (継続)	材料システム工学科 教授	森園靖浩	二酸化炭素の発生を抑えた鋼の新規浸炭法の提案と応用	910
	基盤研究C (継続)	一般科目(理科系) 准教授	谷太郎	楢田ファイバーカラビ—ヤウ空間における非小平面型特異点 の研究	390
	基盤研究C (継続)	機械工学科 准教授	南山靖博	MR ブレーキの力制御による安全接触可能な多リンクシステ ムの構築と安全制御理論の進展	1,560
	基盤研究C (継続)	機械工学科 准教授	青野雄太	風車翼への応用を目指した連続観察に基づくスギの疲労損 傷メカニズムに関する研究	1,170
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 教授	黒木祥光	大規模データを用いて作成した畳み込み型スパース辞書に よる分散圧縮符号化と深層学習	1,430
	基盤研究C (継続)	制御情報工学科 准教授	中野明	共起辞書と AI 技術を用いた日本人英語学習者のための リーダービリティ予測モデルの開発	1,040
	基盤研究C (継続)	一般科目(理科系) 教授	菰田智恵子	ポストコロナ時代に自ら学ぶ姿勢を涵養する数学オンライン 学習スタイルの構築	780
	基盤研究C (新規)	材料システム工学科 准教授	清長友和	シンタリング抑制と触媒機能発現の両立に向けた SiO _x 層と 金属触媒の位置選択的形成	2,600
	挑戦的萌芽研究 (期間延長)	電気電子工学科 教授	越地尚宏	With コロナ新時代のアナログ手法と ICT を活用した課題解 決型実験ノート指導	0
	挑戦的萌芽研究 (継続)	機械工学科 准教授	細野高史	バイオマスと再生石灰を利用したカーボンニュートラルなグ リーンアセチレン合成	3,250
	若手研究 (継続)	機械工学科 准教授	渡邊悠太	超音速粒子衝突による光触媒酸化チタン粒子の固定化	0
	若手研究 (継続)	制御情報工学科 准教授	田中諒	台車型倒立振子の特性値再測定を要しないカスケード型 LADRC の安定解析とその応用	0
	若手研究 (継続)	一般科目(文科系) 准教授	鴨川都美	村山知義を基軸とした演劇運動史に関する基礎的研究	0
	若手研究 (継続)	生物応用化学科 助教	谷本勝一	アルギニンによるポリグルタミンタンパク質の凝集阻害過程の 理論研究	0
	若手研究 (継続)	生物応用化学科 准教授	我部篤	構造と含酸素官能基の最適設計による炭素アクティブサイト の析出と触媒反応への応用	2,730
	研究活動スタート支援 (期間延長)	一般科目(文科系) 准教授	常木佳奈	口絵デジタルアーカイブ拡充と明治期出版文化研究への活 用	0
	研究活動スタート支援 (継続)	一般科目(文科系) 助教	大家慎也	技術の主観的意味の生成にたいする主体の能動的関与の 研究	1,170
	特別研究員奨励費 (継続)	生物応用化学科 助教	谷本勝一	ハンチントン病原因蛋白質の凝集機構とアルギニン誘導体 による凝集阻害機構の理論研究	1,430

4.3.02 共同研究受入状況（平成26年度～令和5年度）

契約年度	契約件数
平成26年度	23件
平成27年度	25件
平成28年度	20件
平成29年度	13件
平成30年度	16件
令和元年度	13件
令和2年度	9件
令和3年度	7件
令和4年度	12件
令和5年度	12件

4.3.03 受託研究受入状況（平成26年度～令和5年度）

契約 年度	研究代表者	研究題目	研究期間	研究経費 (千円)
26		実績なし		
27	中武 靖仁	重質原油中の水分挙動研究	H27.12 ～ H28.1	100
28	松山 清	モノリス細孔を利用した元素間融合によるロジウムを用いない排ガス浄化触媒の開発	H28.6 ～ H29.3	1,700
29	中畠 裕之	伝統的醤油製造における醤油諸味中の菌叢解析を通じた福岡県発酵産業への貢献	H29.7 ～ H30.2	1,064
	藤木 篤	『課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業』（領域開拓プログラム）「生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究-21世紀型参加のビジョンと試行-」	H29.10 ～ R2.9	240
30		実績なし		
1		実績なし		
2		実績なし		
3		実績なし		
4	松村 晶	メタン転換触媒反応過程の高分解能その場実験解析	R4.4 ～ R5.3	1,170
	松村 晶	触媒ガス反応その場直接観察に係る調査・研究	R4.4 ～ R5.3	1,150
	松村 晶	多元素ナノ合金材料のTEMによる構造解析	R4.7 ～ R5.3	1,000
	古賀 裕章	LPWAを使用したリアルタイム内水氾濫危険度可視化システム『WLCR』	R4.7 ～ R5.3	1,660
5	松村 晶	触媒ガス反応その場直接観察に係る調査・研究	R5.4 ～ R6.3	5,422
	松島 宏典	移動ロボット「SLAM」共通プラットフォームの技術要素検証	R5.10 ～ R6.2	110

4.3.04 奨学寄附金の受入状況

(単位:千円)

年 度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
寄附の目的										
機械工学科 奨学寄附金		13		40						
機械工学科 櫻木教員 奨学寄附金	200									
機械工学科 中武教員 奨学寄附金			1,000							
機械工学科 原田教員 奨学寄附金		500		500	800	1,000				
機械工学科 石丸教員 奨学寄附金		200	200			200				830
機械工学科 和泉教員 奨学寄附金				50						
機械工学科 大津教員 奨学寄附金	2,548	628								
機械工学科 谷野教員 奨学寄附金		800							2,000	2,000
機械工学科 渡邊教員 奨学寄附金			16				500			
機械工学科 細野教員 奨学寄附金							500			
電気電子工学科 平川教員 奨学寄附金			1,000		1,790				1,000	
電気電子工学科 山口教員 奨学寄附金								200		
制御情報工学科 江崎教員 奨学寄附金	100									
制御情報工学科 黒木教員 奨学寄附金		90								1,000
制御情報工学科 松島教員 奨学寄附金									90	550
制御情報工学科 松本教員 奨学寄附金	5,500	2,500								
制御情報工学科 堺 教員 奨学寄附金								500	300	
制御情報工学科 田中教員 奨学寄附金								200		
制御情報工学科 古賀教員 奨学寄附金									400	
生物応用化学科 奨学寄附金									500	500
生物応用化学科 中島教員 奨学寄附金					100	100				
生物応用化学科 津田教員 奨学寄附金	2,000									
生物応用化学科 辻 教員 奨学寄附金	600	2,200	850	850	850		780	850	850	
生物応用化学科 渡邊教員 奨学寄附金	50	50							9	200
生物応用化学科 石井教員 奨学寄附金			2,200	1,300	1,200	500	700			
生物応用化学科 松山教員 奨学寄附金		150	2,000	300	700					
生物応用化学科 我部教員 奨学寄附金									200	200
材料システム工学科 奨学寄附金								1,000	500	500
材料工学科 笹栗教員 奨学寄附金	500	1,000	1,000	500						
材料工学科 馬越教員 奨学寄附金	23									
材料システム工学科 奥山教員 奨学寄附金	200	200	400	200	400	500	500	500	3,500	400
材料システム工学科 山本教員 奨学寄附金	150	2,400	1,400	1,000	1,700	700	2,000	2,500	2,500	3,360
材料システム工学科 森園教員 奨学寄附金				2,000						
材料システム工学科 佐々木教員 奨学寄附金						2,500	3,300		2,000	2,120
材料システム工学科 川上教員 奨学寄附金						600	800	800	300	
一般科目理科 酒井 教員 奨学寄附金									125	
一般科目理科 黒飛教員 奨学寄附金				2,000						
教育研究支援センター 奨学寄附金				150						
教育研究支援室 権藤技術職員 奨学寄附金	350	350	300	300						
教育研究支援室 田中技術職員 奨学寄附金	100	100	100	100	100	100				
学生課長									4	10,000
久留米工業高等専門学校 基金								30	3,502	306
学校運営助成金	6,657	5,700	6,363	3,389	1,340	2,930	1,422	3,723		11,515
学校創基75周年・高専創立 50周年記念事業寄附金	12,624									
合 計	31,602	16,881	16,829	12,679	8,980	9,130	10,502	10,303	17,780	33,481

4. 4 図書館関係資料

4. 4. 1 冊数、図書購入費（学生閲覧用）

項目 年度	蔵書冊数	雑誌	貸出冊数	図書購入費
		(学術・一般)		(学生閲覧用)
	(冊)	(種)	(冊)	(千円)
平成26年度	79,571	40	6,909	2,075
平成27年度	94,414	38	8,108	1,842
平成28年度	95,273	38	7,132	1,841
平成29年度	95,353	36	6,687	2,020
平成30年度	94,060	28	6,939	1,790
令和1年度	93,747	28	7,467	1,790
令和2年度	89,589	28	5,411	1,656
令和3年度	92,388	28	4,475	1,212
令和4年度	92,825	28	5,197	1,006
令和5年度	116,931	27	5,413	936

4. 4. 2 蔵書数

分類 種別	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	その他	合計
和書	3,971	4,264	5,593	5,358	18,863	20,170	563	3,427	4,440	12,472	22,214	101,335
洋書	341	179	153	90	2,726	3,087	23	44	3,193	2,547	3,213	15,596
合計	4,312	4,443	5,746	5,448	21,589	23,257	586	3,471	7,633	15,019	25,427	116,931

4. 4. 3 開架図書数

分類 種別	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	その他	合計
開架図書	3,837	2,493	3,462	3,429	13,726	13,027	435	2,948	7,005	9,919	17,715	77,996

第5章 創基 85 周年・高専創立 60 周年記念事業

5.1 記念事業（講演会）

久留米工業高等専門学校創立 60 周年を記念して、講演会を実施した。講演会の実施概要は以下の通りである。

実施日：令和 7 年 1 月 8 日（水）

会場：久留米高専第一体育館

対象：本校本科学生、教職員

講演テーマ：学生時代にすべきこと

式次第：

1. 開会挨拶
2. 記念講演 1（講演者：道井 俊介 氏）
3. 記念講演 2（講演者：熊井 真次 氏）
4. 閉会挨拶

5.2 記念講演 1

講演者の道井俊介（みちい しゅんすけ）氏は本校制御情報工学科の 43 期卒業生であり、本校卒業後に九州工業大学編入学、筑波大学大学院進学を経てピクシブ株式会社に入社され、現在はピクシブ株式会社の CTO を務めておられる。



情報化社会、汎用 AI (AGI) が出現してくる中で、果たして高専で学んだことが社会に出てから役に立つのかどうか、ということを主眼にご講演頂いた。高専時代に様々なことにチャレンジすることで、それが結果として人生の様々なことに役に立つ場合もあることを自身の経験からお話しいただいた。

5.3 記念講演 2

講演者の熊井真次（くまい しんじ）氏は本校金

属工学科の 12 期卒業生であり、本校卒業後に東京工業大学編入学、同大学大学院進学を経て、東京工業大学に勤務され、ケンブリッジ大学での研究後に東京工業大学准教授、教授を経て、現在は東京科学大学物質理工学院特任教授と務めておられる。また、東京工業大学の名誉教授でもあられる。



高専にそれほど関心のなかった講演者が高専に入学し、様々な葛藤を抱く中で英語弁論大会に居場所を見出し、多くの先生方のサポートの下で大学に編入学した経験、また、大学・大学院の学生時代、大学での教員時代の様々な苦労や喜びについても自身のご経験をもとにお話しいただいた。

5.4 まとめ

冬の寒い中であったが、多くの学生が講演者の話に真剣に聞き入っていたのが印象的であった。学生諸君は、高専時代に色々なことにチャレンジし、様々な人と会うことによってより良い学生生活が得られることを講演を通して学んだものと考えている。



編集後記

久留米工業高等専門学校は、昭和36年の久留米工業短期大学に附置された附属工業高等学校に端を発するが、高専としての創立は昭和39年となるため、令和6年4月1日をもって創立60周年を迎えることになった。

この度、高専創立60周年記念事業の一環として本記念誌を発刊するに至った。しかしながら、諸般の事情により記念誌刊行専門部会の立ち上げが8月にずれ込み、第1回専門部会の開催は同月22日となった。専門部会で定めた本記念誌編集の基本方針は、以下のとおりである。

(1) 本校高専創設50周年・創基75周年記念誌及び他高専の60周年記念誌を基に掲載項目を検討するが、時間的余裕のない中での発刊となるため、内容を精査し、厳選する。

(2) 平成26年4月1日～令和6年3月31日の10年間の記録を中心に掲載する。

(3) 本校ホームページ上での公開を想定した、オンライン版のみの発刊とする。

(4) 今後、本校記念誌(「高専創設75周年・創基100周年記念誌」等)を編纂する際は、本記念誌よりも掲載内容が充実している50周年記念誌の内容を参考とする。また、時間的余裕をもって編纂スケジュールを組む。

本誌各記事において、ご多忙の中、玉稿をお寄せくださった高専機構谷口功理事長、本庄春雄前校長、伊藤絹子本校同窓会会長、田中秀喜本校後援会会長及びテクノネット久留米津福一宏会長に厚く御礼申し上げます。また、専門部会メンバーをはじめ、本校教職員においては、経費や時間などの制約がある中で多大な労を惜しむことなく、ご協力いただいた。本誌発刊にあたり、携わった皆様に心より御礼申し上げます。

最後に、久留米工業高等専門学校が多くの関係者に支えられ、60周年を迎えられたことに感謝するとともに、今後更に飛躍していくことを祈念しつつ、筆をおきたい。

「高専創立60周年記念誌」記念誌刊行専門部会メンバー

主担当：龍頭信二(学生主事、一般科目文科系)、長濱圭一(学生課長)

部会メンバー：中尾哲也(機械工学科)、村上秀樹(電気電子工学科)、堺 研一郎(制御情報工学科)、中島めぐみ(生物応用化学科)、周 致霆(材料システム工学科)、常木佳奈(一般科目文科系)、谷 太郎(一般科目理科系)、石原 拓(学生課学生生活支援係)、福田茂大(総務課用度係)、久保田秀彬(学生課寮生活支援係)、小野美織(総務課研究推進係)